

ガールズ&パンツァー バタフライエフェクト

七匠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人は欲深い生き物だ。だが、その欲が深いからこそ自身の身体を投げ出すことができる。だが、その先に待っている残酷な運命なんて知る由もない。

もしもあの時、ああしていたら、していなかつたら。
もしもあの時、選択していたら、していなかつたら。

選択肢を一つ変えるだけで、少しのズレが、大きく運命を動かしてしまうことだつてある。正と死を分ける結果となりうる。

まさに運命のいたずらだつた。だが、それでも彼女たちは前に進まなければならなかつた。

この日のために彼女は、彼女も、多くの物を犠牲にしてきた。人生を不意にしてきた。努力なんて、人の数倍してきた。
まさか、その結果が戦争になるなど思いもよらなかつた。

これは、一つの国を滅ぼすための戦争。

この戦いに正義は……無い。あるのは、純粹な願いだけである。

それが、戦争。

目次

ログ

戦車道始めます

一一一

二
二
二

通志

5 説用

1—6

1
—
7

1—8

1—9

1—10 覚悟

戦車
乗ります

卷之三

卷之六

2
—
4

2-5

216

2—7

2-8 始動

2-9

卷二十一

試合、やります

3—5 3—4 3—3 3—2 3—1
伝統 喊叫 勇氣 操者 傾斜

198 189 175 163 157

プロローグ

それは、優しかったがために起こつた悲劇だつた。

その日は試合が始まつた当初から天氣は大荒れで、局地的な大雨に見舞われていた。視界も悪く、遠くに原っぱが見えるはずのこの崖でも、その緑が少しも見えることのない、灰色の風景しか見えることのなかつた。まるで、一昔前の戦争の映像のようだ。

『ここから道は細くなつていきます！出来るだけ崖から離れて走行してください！』

『了解!!』

彼女は、戦車隊の前から二つ目の戦車から、その場にいたすべての戦車に向けて指示を飛ばす。

正直に言えば、いつ崩れるかもわからないような崖の上を行くななどという危険な行為は避けたかつた。下を見ると、川が増水して激流になつてゐる。落ちてしまつたら、人間はひとたまりもないであろう。しかし、それでも彼女たちはその道を通るしかなかつた。自分たちが通りそうにもない道、それはすなわち敵も通りそうにない道だからだ。つまり、その道を通つていれば敵に出会う確率は低いであろう。そう、姉とも話し合つてこの道を選んだ。

この先、さらに細い場所を通ることになるが、そこさえ切り抜ければ、危険なポイントはないはずだ。この崖を渡つた後は、周囲が開けていないところで密集陣形を取つて、姉が相手のフラツグ車を落とすのを待つだけ。ただ、それだけだつた。

その時だつた。

『きやあ!!』

『!!』

彼女の耳に叫び声と崖が崩れるような音がなだれ込んできたのは、雨で地盤が弱くなつていていたのだろう。自分の目の前を走つていたティーガーIの足元が崩れ、そのまま激流の中へと身を沈めたのだ。少女は、その戦車がどうすることもできないままに急流によつて流

される様子をただ見ているだけだった。少女は慌てて姉へと連絡を取り。

『こちらフラッグ車！隊長、戦車が一輛川に落ちて、どうしよう!!』

『落ち着け副隊長。それぐらいで壊れるほどティーガーはやわじやない。カーボン纖維で衝撃にも耐えられる。中にいる者も大丈夫なはずだ』

『でも……』

彼女も知っている。確かに姉の言う通りティーガーIはちょっとやそつとで壊れるような作りはしていない。衝撃も、カーボン纖維によつて吸収されて中にいる人間たちは確かに大丈夫だろう。

だが、中からの衝撃はどうだろう。戦車が激流に飲まれている今、そのまま履帶が下に、天井が上にあるとは限らない。もしも波によって横転でもしてしまつたら、中で様々な機材に身体中をぶつけて大怪我を負つてしまう恐れがある。いや、大したケガでなくともあざなんてできてしまつたら女の子としては大ピンチに陥つてしまう。

見ると、まだティーガーIはすぐそばに浮かんでいる。泳いでいけばまだたどり着ける距離にいるということ、それが彼女の明暗を分けてしまつた。助けに行ける距離にいるという事が、彼女にいらぬ覚悟を決めさせたのだ。少女は、その場にいる全車輌に向けて通信を開いた。『全車後退してください！崖が崩れた今進むことはできません！それから、今後の指示は西住隊長に一任します！』

『副隊長！』

『お姉ちゃん御免！でもやつぱり助けに行かないと!!』

『待て！早まるな!!みほ!!!』

隊長、副隊長と呼び合っていた二人は突如『お姉ちゃん』『みほ』と碎けた、いや本来の呼び方に変わっていた。それは、あまりにも彼女たちが慌てていたという事を表していたのかもしれない。

少女、否みほは姉や同じ車輌に乗っていた面々からの制止を振り切つて一人土砂降りの中崖を滑るように降りていった。

その最中に上を見上げると、フラッグ車を含めたその場にいた全車輌が次々と後退の準備に入つていた。

指示に従つてくれたことに安堵したみほは、崖下に少しだけ露出している地面に降り立つとすぐに激流の皮へと飛び込んだ。

「待つてて、今助けるから……ツ！」

その時、突然の鉄砲水が彼女の身体を襲つた。突発的に起こつたそれに対し、みほは対処することなどできなかつた。意識しなくとも彼女の口から、鼻から次々と水が入る。冷たい、苦しい、無理やり冷えたそうめんを鼻の中に詰められているような感覚。だが、彼女の眼はまだティーガーリを見据えていた。みほは、ソレに対して必死で手を伸ばす。だが、遠くに見える小さな列車を掴むことができるか。否だ。彼女の身体は次第に沈み始め、ついにその手が水面から消えていつた。まるで、最初からその場には誰もいなかつたかのように、すでに彼女の身体に水面へと上がる力など残されていなかつた。だがそれでも彼女は手を上へと伸ばした。必死で、ただひたすらに、がむしゃらに伸ばしていた。だが、結局最後まで彼女は気がつかなかつた。自分が手を伸ばしていたのは、川底であつたという事実に。

「ツ!!」

背中に走る激痛を最後に、彼女の意識は刈り取られた。

彼女が、自分たちのチームが負けたこと、そして受け入れたくない事実を知つてしまつたのは、病院のベッドの上であつた。

その時、目覚まし時計が彼女の悪夢を覚まさんがごとくに鳴り響いた。軽快で、聞いてて心地の良い音を立てている。

少女、西住みほは頭の上にあつたそれをゆつくりとした動きで止める、横にスライドするようにベッドから落ちた。

「痛たたたた……」

そして、上半身だけを起こして周りを見渡す。はて、自分の部屋はこんな風であつたか。確かに広さはこんな感じであつたことは認めらるが、しかしあらう少し物があつたはずだ。そう思いながら彼女は起き上がると、そのタイミングでようやく頭が回り始め

、自分の置かれている状況を思い出させてくれた。

「そつか……もう、家じやないんだ」

随分と慌ててしまつた物である。もう、自分の事を叱る人間などいなさいというのに。

みほは、ベッドの端っこに手をかけると、思いつきりの力を腕にかけて上半身だけでもベッドの上へと上げた。ベッドの高さが低いものを買つてよかつたと思う。そうでなければ、おそらく上がれていなかつただろう。

こうなつてしまふと、ベッドではなく布団の方がよかつただろうかと思つてくる。実家ではベッドを使つていたので使い慣れている方を思つてこつちでもベッドを買つたのだが、その時と今とでは身体が全然違うという事を考慮していなかつた。だが、もしかしたらそれは、彼女なりの抵抗だつたのかもしれない。今の自分の状況を受け入れたくないという無意識からくる選択であつたのかもしれない。

ともかく、みほはさらに身体を上へと押し上げると、横向きとなり、両手を使つて体を持ち上げてベッドの端に座る。こうやってただ単に座るという動作をするだけでもどれだけリハビリをしたことだろう。だが、おかげで座る姿勢を保持すること、座位保持というらしいが、それをすることができた。

さて、この時点できることというのは数少ない。目覚まし時計が鳴り響いたのがその証拠だ。もうそろそろ、鍵が回される音が鳴るはず。そして数秒後、確かにその音が彼女の耳に届いた。

次の瞬間、玄関のドアがゆっくりと開かれていく。外から現れたのは一人の女性だつた。年は、自分と一つしか変わらない。しかし、それでも凛々しさ、格好良さは自分は足元にも及ばないだろう。そんなオーラと、おいしそうな匂いを纏つた女性がそこにはいた。

ハツキリと言つてしまえば、こんなところにいてはおかしな人間

だ。しかし、それでも彼女はここにいる。すべてはこんな体になつてしまつた自分のために。だめだ、気がつくと自己嫌悪に陥つてしまう。あの日からの悪い癖である。

「おはようみほ……またベッドから落ちたの？」

「うん、でも大丈夫。ちゃんとひとりで上に上がれたよ……お姉ちゃん」

西住まほ、自分が暮らしている学生寮の一室のすぐ隣で暮らしている姉である。先ほど床に落ちる音は、隣の部屋にまで聞こえていた様子だ。

「ほら、朝ごはん。一緒に食べよう」

「もう、料理ぐらい一人でできるのに」

「でも……」

「心配しなくてもいいよ……」

その時、みほの目線は下を向いていた。足の方を見ていた。

「足が動かなくとも……料理くらい……」

決して動くことのないその足を。

そんな様子をみたまほはただ黙つてみほの身体を抱きしめる。

「大丈夫。私はずっとそばにいるから」

「お姉ちゃん……うん」

その後、二人は朝ご飯を食べ終えると、これから自分たちが通う学校の制服に着替えた。なんだか、このようにシンプルなデザインの服を着るのも新鮮である。それから、みほはあの日から自分の相棒となつている車椅子に移乗して、あの日から日課となつていてトイレも済ませて、まほに押されて寮を出た。

例え、足が不自由になつたとしても、例え、妹のためにすべてを捨てたとしても、優しい姉と一緒に暮らせるのだから、愛する妹と一緒に暮らせるのだから、今の二人は最高に幸せだった。

その日、彼女たちの大洗での生活は、本当の始まりを迎えた。

戦車道始めます

1—1 転校

何気ない日常、普通の風景、しかし彼女はそれが好きだった。

パン屋からあふれ出てくる香ばしい良い匂い、まるでフルートが奏でられているかのように心地の良い響きのカモメの鳴き声、地元ではまず見ることのなかつたコンビニも新鮮だ。それと、アンコウ？なのだろうか、魚のようなものを模した看板もある。だが、可愛いのは確かだ。

そういえば、前にこの街の事を調べた時にアンコウが有名であるという話を聞いたことがある。自分や姉はあまりアンコウという物を食べたことはないのだが、どうやらあん肝という物は特に美味しいらしい。噂によれば、それを手に入れるために腕の骨を折った人間や、突然世の中が嫌になってしまった人間がいるほどの珍味なのだとか。

そんな二人のすぐ近くを、自分達と同じ制服を着た少人数のグループが通り過ぎていった。そんな仲睦まじい姿を見せられて、みほは急に不安になってきた。二年生である自分にとつて、今から行くクラスは異質な物、そして自分自身も異質な物として見られるだろう。果たして、友達など作れるのだろうか。前の学校でも友達らしい友達は作れず、自分を慕ってくれていた人間もいたが、それはどちらかといふと憧れの面が強く、姉ほどではないが下駄箱に女性からのラブレターが何通も入っていた時には、流石に背筋が凍つてしまつた。

色々と話したが、簡単に言えば自分は健全な友達の作り方など知らないも同然なのだ。この学校には、前の学校の人達が自分を憧れの対象として見てくれていた原因はない、というか、それがないからこそこの学校に来たのだ。そんな自分が、この大洗学園で友達を作ることができるだろうか。そう心配していた彼女は、姉に肩を叩かれて言われる。

「大丈夫、みほならいくらでも友達を作ることができる」

「お姉ちゃん……うん」

その言葉に根拠などなかつた。しかし、姉であるからこそ、みほの心まで知つていたからこそ、彼女は戦車がなくても友達を作ることくらいできるという事を信じていた。

みほは、ここで失念していた。よく考えるとまほの方が不安でいっぱいなのかもしない。三年生であるまほの周りは、大洗で二年間友達を作つてきた者ばかりで、もしかしたらまほ一人孤立してしまふ恐れもある。さらにまほもまた、部下と言えるような人間は多々いたものの、はつきりと友達であるといえるような友達は自分と同じいなかつたように思える。それに加えて、戦車と一週間以上離れるという事が、いやもしかしたら二十四時間だつたかもしれない。みほは、まほが戦車と離れている姿を見たことがあまりないように思えた。そんなまほが戦車から離れて暮らすのだから、きっと辛いことなのだろうと、妹ながらに心配になつてしまふ。

しかし、姉に勇気づけられたみほは、本当に自分は大丈夫なような気がしていた。それは、姉妹という硬い鎖で繋がれた者同士であるからこそ分かるような物であつた。

それから十数分後、桜の花びらが雪のようにひらひらと綺麗に舞う中、大洗学園が見えた。まほは、みほの事を担任の先生に任せると、三年の教室へと向かつた。

さて、一人になつてしまふとやつぱり不安になつてしまふ。戦車と戯れる事しか知らなかつた自分が、よき交友関係を築こうともしなかつた自分が、果たして友達など作れるだろうか。

みほは、自分は友達の作り方を知らないというようなことを言つていたが、それは間違いだ。特に、赤星小梅という少女はみほに好意すら抱いていた。みほと自分が大洗に行くことになり、彼女を含めた何人かもまた大洗に転校すると言い出した時には、流石の自分も焦つてしまつた。自分が説得したことによつて、何とか黒森峰の戦力ダウンは免れたものの、それでもやはりみほに友達がいるという事実は二年前に手に入れた栄光よりももつと自分の心を弾ませるほどに嬉しかつた。

果たして、自分は戦車なしで友達を作ることができるのでだろうか。

そんな不安を抱えながら、彼女は教室のドアを開けた。

その時、最初に感じられたのは不審だつた。当たり前だらう。二年も大洗に通つていると、クラスメート以外であつたとしても大体の同級生の顔は見ているはずだ。例え、自分のようにあまり特徴のない人間であつたとしても、初めて見る顔にみな驚いてしまつてゐるのだろう。そう彼女は思つていた。

しかし、實際には違つていた。その場にいた全員がただただ驚いているのだ。彼女からあふれ出でてゐるオーラ、その凜々しい顔つきに何人もの女子生徒が心を奪われていたのだ。西住まほは無意識のうちに抑えられないほどのカリスマ性を放出していたのだ。

その後は出席番号順に自己紹介が始まつた。と言つても、大半の生徒にとつては見知つてゐる顔ばかりなのでそれほど関心はなかつた。しかし、ある人物の番になつてからは違つた。

まほは、自分の名前が呼ばれた瞬間ゆつくりと席から立ち上がつて言つた。

「西住まほだ。黒森峰女学園から今日転校してきた……一年ばかりの付き合いになるがよろしく頼む」

緊張はしたもの、しかし事前にみほと一緒に考えていた言葉は伝えられた。だが、すこし堅苦しかつたかと思つてしまふ。もう少し趣味とか好きな食べ物とかを話した方が、より自己紹介らしかつただろうか。そう思いながら彼女は席に座つた。

そして、いい意味での教室のざわめきが止まらない中、一人彼女の後姿を見て笑みをこぼす者がいた。

「へえ、あの子がね……」

そう言つると、少女は手に持つた干しイモにしゃぶりついた。

1—2 罪人

時間は一気に飛んでお昼時まで移る。午前中の授業を難なくこなしたみほは、一人教科書や筆箱を片付けていた。他の学校に来て初めて黒森峰女学園の勉強カリキュラムがかなり進んでいたのだと実感する。だが、遅れていたならともかく、進んでいたのは幸いと言つていいだろう。おかげで楽に授業を受けることができた。

その時、ペンが一つ落ちていった。

「あつ、いけない……」

車椅子に座つている状態で、地面に落ちた細かいものを取るのにも限界という物がある。ペンが落ちているのは、彼女がギリギリ取れない場所である。

みほは一度溜息をつく。一端床に降りると、その後車椅子に一人で上るのはかなり苦労する。だが、他人のペン一本をわざわざ拾つてくれるような奇特な人間などいるわけがないと、みほは車椅子を降りて机の下にもぐつてペンを取りに行つた。しかし、それがいけなかつた。

ペンを取りに行こうと机の下にもぐつた時に、思わず机を揺らしてしまつたのだ。そのせいで、片づけの途中だつた定規や筆箱が次から次へとタ立のように落ちる。それを見て、みほはもう一度溜息をつき、筆箱を取ろうと手を伸ばした。しかし、その手が届く寸前に、突然一つの手が上から降りてきて筆箱を掴み、UFOキャッチャーのように上に持ち上げた。

みほは、筆箱を取つたのが誰なのかを確認するために机の下から顔をのぞかせた。果たして、そこにいたのは黒髪の長髪の女性だつた。

「はい、大丈夫ですか？」

「えつ……あの……」

みほは、どうして少女がそんなことをするのか分からず、それに加えて友達が少なかつたこともあつてこのような時にどう反応しているのか彼女は咄嗟には分からなかつた。そういうしている時に、今度は後ろから声をかけられる。

「へイ彼女、一緒にお昼でもどう?」

「アウツ!」

ブロンド、いや赤、オレンジだろうか微妙な髪色の少女に声をかけられて、素つとん狂な声を上げてしまい、机にまたも頭をぶつけてしまった。

「ほら沙織さん。西住さん驚いてらつしやるじゃないですか」

「あつ、いきなりごめんね。私達も拾うの手伝うよ」

「あつ、ありがとう。式部沙織さん。五十鈴華さん」

「え?」

「私たちの名前、覚え照らしたのですか?」

「うん、武部沙織さん、6月22日生まれ。五十鈴華さん、12月16日生まれ。先生から先に名簿を貰つてて、いつ友達になつても大丈夫なようについて」

彼女は、この学校に来る前に担任の先生から同じクラスになる予定のクラスメイトの名簿を貰つており、それを丸暗記していたのだ。その努力が、こうも早くに報われてよかつた。そう感じていた。

筆箱や文房具を拾い終え、沙織に協力してもらつて車椅子への移乗を完了させたみほは、後ろの方からよく知る声で自分の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「みほ」

「あつ、お姉ちゃん」

西住まほだつた。

幸運なことにまほもまたクラスで良き友人に巡り合えていた。その友人たちから一緒にお昼ご飯に行こうとも言っていたが、今日の所は妹と一緒にお昼ご飯を食べたいという事でそれらを断つたのだ。友達がすぐにできると言つたとはいえ、いや言つたからこそその言葉が本当なのかが自分自身不安で仕方がなかつたのだ。そして、みほの姿を見て思う。

「取り越し苦労だつたか……」

「え?」

「いや、何でもない」

みほは、ちゃんと友達を作ることができていた。困った時には助けてくれる、そんな友達を。まほは『ホツ』と胸をなでおろした。

「西住さんの、お姉さまですか？」

その時、まほの姿を見た黒髪の少女がまほに声をかけてきた。

「ああ、西住まほだ。妹が世話になつていてる」

「いえ、そんな大げさなことは……」

「あつ、そうだ！お姉さんも一緒にお昼どうですか？」

「え？……それじや、お言葉に甘えて……」

妹が、クラスメイトと仲良くなるチャンスを不意にしたくはないとは思うが、それで断つてしまうのも彼女達に申し訳がない。そのため、ここは彼女たちの提案を受け入れることにした。

「よし、それじや急ごう！」

「ワツ！ちよ、危ないですからゆつくりお願ひします!!」

茶髪の女の子に押されて食堂に向かうみほ。その様子をまほはまるで母親のように微笑ましく見ていた。

そして食堂。四人は席に着き、それと同時に沙織が言つた。

「それにしても、クラス全員の名前と誕生日を覚えるなんて、西住さん本当に面白いよね」

「え？・う、うん……」

みほは、おぼろげにもそう返事をした。というのも、確かに彼女はクラス全員の名前は覚えた。しかし、誕生日を覚えてたのはごく僅かだったのだ。では何故彼女たちの誕生日だけを覚えていたのか。それには、ある理由がある。

式部沙織の誕生日である6月22日は、第二次世界大戦中にドイツ軍がソビエト連邦に対してバルバロツサ作戦を決行した日。

五十鈴華の誕生日である12月16日は、第二次世界大戦中に、同じくドイツ軍がアメリカ軍を主体とする連合軍との戦闘を始めたバルジの戦いの決行の日である。

すなわち、世界史における大きな戦闘のあつた日と同じであつた。それが印象に残つていたのだ。因みに、五十鈴華の誕生日である12月16日は、かの有名な戦艦ヤマトが竣工した日もある。

とはいえ、かくゆう自分の誕生日である10月23日は第二次エル・アラメイン会戦。まほの誕生日である7月1日は、第一次エル・アラメイン会戦が行われた日である。もはや、何かの運命を疑つてしまう。

「あつそうだ。西住さんだとお姉さんと混ざつてややこしいから名前で呼んでいい?」

「え?」

「みほって」

「……」

みほは、その言葉にサバ煮をつつく手が止まつた。なにか気に障るようなことを言つてしまつただろうか。心配する二人を尻目にして、彼女は言つた。

「すつ……」

「え?」

「すご~い! 友達みたい!!」

そして、みほは嬉しそうにサバ煮を一欠けら口に入れた。そんなみほの様子を微笑ましく見ていたまほにも、華が声をかける。

「あの」

「え?」

「よろしかつたら、お姉さんも名前で呼んでもよろしいでしょ?」

「え……なんで?」

「何となくです。ダメでしょ?」

「……いや、いいよ。名前で」

「ありがとうございます」

考えてみれば、向こうでも自分の事を名前で呼んでくれる人間はいなかつた。大体の人間が自分の事を隊長呼ばわりで、それは確かに組織としてみれば優秀な人間なのかもしれないが、しかしこうしてその組織から離れてみると、底知れぬほど寂しいことだつたと分かる。もしも、またあの場所に帰ることがあつたら、彼女達にも教えてあげなければならぬ。ふと、ありえることのない未来の事を考えてしまつた自分に対して、自傷するように笑つた。

「それにもよかつた、友達ができて。私達一人つきりで引つ越してきだから」

「ああ、不安だつたのは確かだ……」

「そつかゝまつ、人生いろいろあるよね。泥沼の三角関係とか、告白される前にふられるとか、実は親が本当の親じゃなかつたとか」

「えつと……」

「まあ、それじやご家族に不幸が？ 骨肉の争いですとか遺産相続とか」

「そ、そう言うわけじや……」

おかしい。話が変な方向へと飛躍し始めている。昼ドラマの見すぎではないかというほどに話がこんがらがつてしまつており、正直驚いてしまう。

「なんだ、じや親の転勤とか？」

「……」

その言葉にみほは少しうつむいた。その表情の変化を見て何かを察したのか、沙織と華はアイコンタクトで会話をして話を途切れさせるために話題を振つた。

「ご飯が冷める前に、いただきましょう」

「あつ、うん……」

まほは、その二人の配慮に感謝しながら、自分もまたカレーライスに手を付ける。確かに、少しだけ冷めてしまつたであろうが、しかしその日友人と一緒に食べたそのカレーライスは、凄くおいしく感じた。

「それは、一種の情報操作ではないでしょうか」

薄暗い部屋の中、大きな窓から入る明るい光を背にして、一人の小さな少女が大きな椅子に座つていた。それは、先ほどまほの事を珍しげに見ていた干しイモを食べていた三年生の少女である。少女は、目の前に立つ二人の少女に向けて何かを言つた。先ほどのセリフは、それに対する片一方の答えである。少女は、その答えを聞くとあつけら

かんとした感じでいた。

「ダイジヨブダイジヨブ……許可はもう取り付けてあるし、後のこと
は全部任せること

「もはや放任主義にしか思えません……」

「分かりました。直ちに取り掛かります」

真面目そうに見える少女がそう発言した後、二人は一度その部屋から静かに出て行つた。そして、一人残つた少女は、机の上から資料を取り出す。それは、今日自分のクラスに来た一人の少女、ほか二名について書かれている書類であつた。

「西住まほに西住みほ……そして」

もはや、なにかの運命めいたものを感じる。この大事な年にこの学園に専門家が三人も来てくれたのだから。この三人が加わってくれればきっとこの学校を守ることができるはずだ。

だが、その世界に置いて知らぬ者はいないというほどの有名人三人が、その世界から外れた学校に来る。その事の重大さに彼女が気づいていないわけがなかつた。一人については、後々ヒアリングをしてみなければ理由は分からぬ。しかし、残り二人については、すでに承知していた。無論、それが理由で、この学校に来たのならば、自分の思惑通りに事は運んでくれないだろうという事も分かり切つていた。そんな少女たちを無理やり引っ張り出すのだから、それ相応の覚悟が必要だ。彼女たちの人生に踏み込んでいく、そんな覚悟が。でも、それでも彼女はやらなければならなかつた。

「それでも……私はやらなくちゃならない。……ごめんね、地獄への道連れみたいでさ……」

少女は、同じく机の上にあつた干しイモの入つた袋を取ると、その部屋から出て行つた。扉から出る寸前に見えた顔、そこには、先ほどまでのようないいなくなつていた。

1—3 戦略

「今日帰りお茶していかない？」

「え、お茶？女子高生みたい」

「女子高生ですって」

昼ご飯を食べた後、みほたちはそれぞれ自分たちのクラスへと帰つていった。若干みほと離れることに對して後ろ髪惹かれる思いだつたまほではあるものの、あまり過保護すぎるのも悪いと思つて潔く自分のクラスへと帰つていった。

みほは、黒森峰女学園の時にはなかつた女子高生としての会話にウキウキしていた。家では、厳格な母のため女子高生らしい生活ができる、彼女の周りにいた生徒たちも帰りにお茶をしようなんて誘つてくれる人達はいなかつた。そのため、こうして自分を誘つてくれること自分が嬉しいものであるのだ。

「実は相談があつてさ」

「え？」

「ちよつと悩んでて……」

と、沙織が突然話を切りだしてきた。その顔から考えるにかなり深刻な悩みのようだ。

「私つて罪な女でさあ」

「また、その話ですか？」

華の反応を見る限りその悩みやらは何度も相談し、答えの出なかつたもののようだ。

「最近、いろんな男の人から声かけられまくりで……どうしたらいいかな？」

「いろんな？」

つまり、よくナンパに会うという相談らしい。まあ、確かに彼女は整つた顔つきをしていて、こんなにも明るい性格なのだから、恋人にしたいという人間が多く現れても不思議ではない氣がする。

自分は、黒森峰女学園にいた頃はナンパというものには遭遇しなかつた。だが、もしもそんな状況に陥つたらどうしようかと考えてい

たのは確かだ。結論から言つて、あたふたして何もできないだろうな
というのが自分の答えだつたが。

みほは黒森峰時代から部員から戦車関連での相談事を日々請け
負ってきた経験はあつた物の、恋の悩みについては皆無だつた。だか
ら、一体どう返答したらいいのか困つてしまつている中、沙織はさら
に話を続ける。

「いや、近所の人達なんだけれどね。毎朝『おはよう』とか、『今日も
元気だね』つて」

「え、それつて……。

「ですから、それはただのあいさつでは」

「でも、絶対私のこと好きだもん！」

「はいはい」

なるほど、ご近所でのあいさつを自分に対する好意として認識して
いるわけである。この反応から察するに、恐らく沙織は自分が大真面
まじめな恋愛を経験したことがないのだろう。そんな自分が大真面目に華のよう^に反対することや、彼女を気遣つて肯定してあげること
は失礼にあたることだろう。あやふやな答えというのも彼女に申し
訳が立たない。だから、一応みほ自身が思つてることを口にしてみ
た。

「武部さん、明るくて親しみやすいもんね。だから皆、友達になりたく
なるんじゃないかな。誰とでもすぐ仲良くなれるなんてすごいと思
うよ……。私、それから多分お姉ちゃんも式部さんや五十鈴さんが声
をかけてくれて……足が不自由な私に優しくしてくれて、本当に
嬉しかつた。素敵な友達ができたなつて……」

友達ができるか不安だつた自分がしかし、式部沙織、そして五十鈴
華という少女たちが友達になつてくれて、救われたような気持になつ
た。姉もまた、戦車に関係のない後輩として、友達になつてくれた彼
女たちに感謝しているに違ひない。そうみほは思つていた。そんな
みほに対しても華は言つた。

「西住さんこそ素敵な方です」

「わ、私なんて全然！五十鈴さんの方が落ち着いてて、心が強そうで

……それに大人っぽくて……すぐ羨ましいな」

「そんな、いつも堅苦しいって言われてしまつて……」

華は、この時点でもみほの何が自分たちを引きあわせたのか分かった気がする。もちろん足が不自由なのを憐れんだわけではない。彼女は、人を見る目という物がとてもいいのだ。優しく、穏やかな心持で誰かの眼を見ているそんな目をして、だれかのいいところを見つけるのが得意で、それでいてちよつとばかり自分に対する自信がないようだ。それに……。

「そうなの？ 私なんか前の学校だと皆にいつも頼りないって叱られればつかりだつたの。どうしたら五十鈴さんみたいになれるんだろう……」

「華道をずっとやつていたからそのせいしから」

「ええすごい！ 私もやつてみたかったの！ 女らしくて華やかでいいよね!!」

随分な食いつきように、一瞬だけポカンとしてしまつた華。どうしてだろうか、この少女からは自分と似たようなにおいが感じられるのだ。姉のまほに至つては、もはや同族嫌悪であるかのように仲間意識すら感じる。一体、みほの家は何をしているところなのだろうかと、疑問に思つてしまつた。続けて、みほは言う。

「二人とも、友達になつてくれてありがとう」

それは、きれいなお辞儀であつた。華道をたしなんでいる自分から見ても、気品に溢れ、それでいて最上級に敬意を表している。そんなお辞儀だ。華は、それに対しても微笑み。

「いらっしゃいこそ」

そう言つて同じくお辞儀で返す。後ろに人の気配をいくつか感じながら。

みほが二人に対してもお礼を言う寸前、三人の少女達が教室の中に入り、背の小さな少女を先頭にして教壇に立つた。眼鏡をかけた少女は、何やらバインダーを持つており、先頭に立つ背の小さな少女は何やら細々としたものを食べている。その袋をよく見ると表面には干しイモという言葉が見えた。その姿を見た周りのクラスメイト達は

口々に『会長』と言葉を発している。自分の理解力が正しいのであれば、会長とは生徒会長の事なのだろう。だが、どうしてそんな人間がこの教室に現れたのだろうか。

その時、眼鏡をかけた少女がバインダーから目を離して自分の方を指さした。なんだかとてつもなく嫌な予感がする。それに伴い、先頭に立った少女は自分に向かつて手を振りながら言つた。

「やあ、西住ちゃん！」

「はい!?」

突然のご指名にみほは驚いた。もちろん、彼女は生徒会長と面識はないし生徒会に厄介になるようなことはしでかしていない。

そもそもその少女達、おそらく背の小さい少女が生徒会長であるとは思うが、それ以外の少女二人は何者なのだろう。みほは、思わず沙織に目線を向けた。その視線をキヤツチした沙織は顔を耳元に近づけて言う。

「一番前の人のが生徒会長、それと副会長と広報の人だよ」

などと教えられている間にも、三人は自分の目の前までやつて來た。なんとも圧迫感というか、威圧感があるし、自分の思っていた以上に大きく見える。先ほどまで小さいと思っていた、生徒会長である少女ですら、自分と同じ身長に思えてくる。

果たして、みほが困惑している間にも眼鏡をかけた少女は言つた。

「少々話がある」

「はい?」

「廊下まで来てくれ」

「は、はい……」

そう言われて、みほはそう返事をした。三人の中で一番普通に見えるポニーテールの少女が、手を貸そうかと言つてくれたが、自分一人でも車椅子を操作できるようにリハビリを積んできたのだから必要なかつた。

そもそも、この大洗に来るまで一人で暮らさなければならぬと思つていた彼女にとつて、手伝いなしに動くという事など、簡単でしかなかつた。

一人の力で廊下までたみほに対し、生徒会長である少女が顔を近づかせて言った。

「履修選択科目なんだけどさあ、戦車道取つてね。よろしく」

「え？」

みほは耳を疑った。履修選択科目？ 戦車道？ 確かこの学校は戦車道の授業はないはずだつたのではないか。それに……。みほは、そう思いながら自分の足元をやんわりと見ながら動揺を隠しながら言った。

「あの……この学校は戦車道の授業はなかつたはずじゃ……」

だからこそ、自分は、自分と姉はこの学校を選んだのだ。そうじやなければ、この学校に入学するという判断もしなかつた。続けて、眼鏡をかけた少女が言う。

「今年から復活することになった」

「わ、私この学校は戦車道がないと思つて、わざわざ転校してきただんですけど……」

「いやあ、運命だね」

運命、そんな言葉一つで解決できるような簡単な問題だつたら、自分もこの少女のように笑い飛ばしているだろう。だが、事はそんなゆでた卵を立たせるかのように簡単なことではない。

「り、履修選択科目なら好きに選べるんじや、それに私足も……」

「いい時代になつたよねえ。最近は安全性を確保出来たら、障害者でも戦車に乗れるようにルール変更されたつて聞いたんだけどさあ」「ツ！」

確かに、彼女の言つていることは正しい。数年前に、近年の社会情景からかんがみて、障害者であつたとしても戦車道に参加できるようルール付けが行われた。簡単に言えば、安全性を確保することができれば、身体身体障者であつても戦車に同乗することを許可するというルールにだ。だが、自分はそれ以上に……。

「戦略アドバイザーとかそんなんでもいいからさ、とにかくよろしく」一人、ポニーテールの少女を除いて好き勝手に言つていた少女は、それだけを言うとそそくさと退散していった。

取り残されたみほの頭の中は、まるで台風に巻き込まれてしまつた時のように滅茶苦茶となつてしまい、混乱寸前だつた。

せつかく戦車道がない学校に来たというのに、せつかく姉としがらみもなく楽しく暮らせると思つたのに、せつかく女子高生らしい生活を送ることができると思つたのに。青天の霹靂という物じやすまされない。誰も望まなかつたような悲劇。

とにかく、次の授業の準備をしないといけない。みほは、車いすの車輪を漕ごうとした。しかし、何故かそれが回ることなく、手すりから手が滑つてしまつた。何故だろう。みほは、両の手を見た。そこには、まるで雨の後の地面のように汗がべつたりと、粘つこく付着していた。それに震えている。尋常じやなく、震えている。そんなみほの様子を沙織、華の二人は心配そうに教室の入口から見ていことしかできなかつた。みほは、右手で左手を掴むとつぶやくように言つた。

「お姉ちゃん……」

と。

一方、その姉の方にもまた、生徒会三人衆の魔の手が忍び寄つっていた。

「今、何と言つた？」

「だからさあ、必修選択科目、戦車道履修してもらいたいの」

「断る。私は戦車道をするために大洗に来たわけじゃない」

みほも同じく、いや、みほの時よりもはつきりとまほは三人からの勧誘を断つていた。

「そんなこと言わずに」

「断る、と言つている」

鋭い目つきとどこからかあふれ出てくるプレッシャー、それによつて会長の後ろにいた二人は後ずさつてしまつた。しかし、それでも生徒会長、角谷杏は退かなかつた。元々断られるのは覚悟の上、ならばと、彼女も覚悟をしてここに来たのだ。それこそ、威圧感によつて殺されようとも。

「私からしたらさあ、そのあまりある才能をほつたらかしにしているのは、ちよつとばかしもつたい氣がするんだよねえ」

「何を言われても、私は戦車道から足を洗つた身だ。心変わりする気もない」

「……」

「……」

かたや大洗学園の現トップ、かたや元日本一の実績を持つ黒森峰女学園の元トップ、一触即発という状況に双方一步たりとも退こうとはしなかつた。その緊張は、クラス中にも伝わっており、無関係であるはずなのだが、その光景に対して息をのむばかりであった。角谷の後ろにいる生徒会広報の河島桃に至つては、もはや泣き出しそうにも見え、それに対して副会長の小山柚子がなだめている。自分たちは、とんでもないところに来てしまつたようだと懼いてしまっていた。

しかし、そんな険悪な雰囲気も、学校のチャイムによつて幸運にも途切れることとなつた。

「チャイムも鳴つたことだし、今回の所はこの辺にしどくから」

「何度も来ても私は……」

「ああそうそう、一応言つておくけど、西住姉さん以外にもスカウトしている人いるから。それだけは伝えておくね」

「私以外にも……？ツ！」

その言葉と言動に、まほはすぐに妹の顔が浮かんだ。例え足が動かなくとも、戦車道に拘わらせることなんて容易いことだ。特に、昨今のルール変更で、障害者であつたとしても競技に参加できるようルール作りがされているため、可能性は確実にある。

まほは、すぐにみほの元へと向かおうと教室から出ようとした。しかし、ちょうどその時先生が来て、席に着くようにと言われてしまう。こんなチャイムギリギリに彼女たちが自分の元に訪れたのは、これが理由だつたのだ。流石のまほも、しぶしぶ席に着くことしかできなかつた。ただただ不安をその身に宿らせながら、時間を過ぎるのを待つしかなかつたのだ。

1—4 同調

生涯で二度はないと思っていた。そんな混乱の渦が今、西住みほの心目掛けて疑問という名の石を投げつけてきた。

どうしよう。どうしようか。どうすればいいのだろう。どうしたらよいのだろう。彼女の頭は真っ白となり、何も考えられないでいた。

先ほどまで、自分は心中で鐘楼を煩く鳴らされたかのようにトラウマが揺さぶりをかけていた。そして、今はその余韻で、身体全体がおかしくなっている。そう思える。生徒会に命令された戦車道履修。ただ、断ればいいだけだ。しかし、彼女はそれができなかつた。トラウマと戦うのに必死になつて、結局言い出すことができなかつたのだ。だが、今のところはぼろ負け状態だ。

そういえば、姉の所にも話は行つているのだろうか。当たり前であろう。姉は、自分等よりも優秀で、一昨年は黒森峰女学園の戦車道全国大会九連覇に貢献した実力の持ち主。黒森峰女学園の十連覇を阻んでしまつた自分などよりもよっぽど優秀な人だ。彼女たちが何のために自分に戦車道をまたやれと言つたのかは分からぬが、しかし優秀な人材を集めているのだとしたら、姉に声をかけないはずがない。

せつかく、自分は戦車道から離れることができたといふのに。ようやく、トラウマが薄らいできたと思つていたのに。それと、姉と昔のように仲のいい関係に戻ることができ始めてきたといふのに。どうして、世界は自分たちに安定を安泰をもたらしてくれないのである。自分で、自分はあの家に生まれてしまつたのだ。どうして、なんで……。

「みほ」

「え?」

その時、斜め後ろにいる沙織から声がかけられた。どうやら、考え方をしそぎていたようだ。授業の内容も先生の話も全然頭に入つてきていなかつた。

現在の状況からして、先生に問題を答えるように指名され、それを

完全無視していた様子であるが、しかし今の自分に黒板に書いてある問題を解く気力なんてなかつた。

「どうしたの？ 気分でも悪い？ だつたら保健室に行きなさい」

「あつ……はい」

好都合と言つてしまつたら先生に悪いし、実際に気分が悪くなつたも同意義であるため、お言葉に甘えさせてもらつてみほは車椅子を方向転換させて、一人教室から出ていった。しかし、その動きはあまりにもゆつくりで、もしもこうして座つていなかつたら倒れてしまうのではないかとクラスメイト全員が見ていた。特に、沙織と華はかなり心配そうに彼女が出て行くまで見ていた。

廊下に一人出たみほ、しかし次第にその車輪は動きを止めていく。また、手についた汗によつて車輪を持つ取つてが滑り、前に進まないのだ。何度スカートの裾で手を拭いても汗は吹き出し、前に進もうとしない。さてどうする。自分の足を動かす手がこんな調子であれば、自分はどこにも行くことができない。まるで、今の自分の気持ちのようだ。答えが出せずに前に進もうとも、後ろに進もうともしない自分がようだ。みほは、自分のことが少々みじめであるように感じてしまつた。

その時だ。突然背中に圧が感じるのと同時に車輪が回つた。

「え？」

何事かと、みほが後ろを向いた。そこにいたのは、沙織の姿だ。

「武部さん……」

「私達も一緒に行くよ」

「え？ でも、授業は？」

「仮病です」

沙織は腹痛、華は持病の癪を理由にして保健室に行く許可をもらつた。みほの様子がおかしかつたから、心配になつたのだ。そしたら案の定、彼女は廊下の真ん中で立ち往生していた。いや、座り往生か？ それはともかく。間もなくして、三人は保健室に到着した。

「今日は氣分が悪い人が多いわね。静かに休んでてね」

みほ他二名をベッドに寝かした後、そう言つて養護教諭の先生は部

屋から出て行つた。それから、もう一つベッドが膨らんでいる。どうやら先客の人がいた様子だ。船酔いで、昼ご飯を食べた後に具合が悪くなってきたのだとか。三人は、この学校でそれは珍しいなと思つたが、養護教諭曰く彼女は少し前まで本土の学校にいたらしく、都合により他の一年生たちから遅れて今日からこの大洗に住み始めたのだとか。だが、ここに来るまでの船の中で船酔いを起こし、さらに船の揺れになれていないという事と昼ご飯を食べた後という事が重なつてここまで重症になつてゐるらしい。それで三人は納得した。

そして、養護教諭が部屋を出たところを見計らつて、みほの両サイドのベッドに陣取つていた華と沙織がみほに声をかける。

「西住さん、大丈夫ですか？」

「……」

「いいよ寝てれば」

みほは、その言葉を受けて起き上がるうとするが、沙織がそれを制した。

「早退されるのであれば、カバン持つてまいります」

「ありがとう」

「生徒会長に何言われたのよ」

「よかつたら話して下さい」

どうしようか。だが、別に話してもいいようなことだ。それにむしろ話した方が……。

「……今年度から、『戦車道』が復活するんだって

「戦車道とは……乙女がたしなむ伝統的な武芸の？」

二人は、この世界にてポピュラーであるその言葉に反応した。戦車道は、古くから乙女のたしなみとして存在していた武道だ。礼節のある淑やかで慎ましく、凜々しい婦女子を育成することを目指した武芸らしく、高校戦車道の全国大会も行われるほどで、女性に人気なのである。だが、だからと言つてである。

「それとみほに何の関係があるの？」

「私に、戦車道を選択するようについて」

「え、なんで？」

選択科目なのだからどれを選んでもいいはずなのである。実際、選択科目には他にもたくさんある。茶道、書道、合気道、忍道、仙道……等々。まだ序盤は分かる。よく知られたものであるから。だが、忍道と仙道とはなんだろうか。その話はまた後で、もしくは忘れ去ろう。ともかく、どうして生徒会がそこまで言うのだろうか。

「えつと……それは……」

「何かの嫌がらせ？ あつ分かつた、生徒会の誰かと三角関係？ 恋愛のもつれ？」

「ちがつ……」

「是非戦車道を選択するようになんて、もしかしてみほさん数々の歴戦を潜り抜けてきた戦の達人なのでしょうか」

沙織のいうドラマ的展開はともかく、華の言う通り、自分は歴戦を潜り抜けてきたといえる。だが、姉や母から見れば、まだまだ自分はそれほどまでは……。

「タイマンはつたり、暴走したり、カツアゲしたり」「でもなくて……」

昼食の時から思っていたが、どうしてこの二人の想像は変な方向にばかり話が飛躍してしまうのだろうか。いや、確かに華の言う通りスケバンのような自分だつたらどれだけよかつたことだろうか。それほどまでに度胸の有るような自分だつたらどれだけよかつたとか、そんな事を少しは思ってしまう。

一方、答えにたどり着かない沙織はついに、直球で聞いてみることにした。

「じゃあ何？」

「えつと……」

みほは一瞬だけ考える。別に、言つて困るようなことでもないし、そもそももう自分と姉には全く関係のないことだ。だが、姉に黙つて彼女たちにばらしていいのだろうか。いや、別段二人だけの秘密という事柄でもないから多分大丈夫だ。

みほは、何の意味もない雑学を披露するような虚しい気持ちになりながらも、ため息をつきながら言つた。

「実は、私の家は……代々戦車乗りの家系で……」

「まあ……」

「へえ……」

「でも、あまりいい思い出がなくて……」

「では、まほさんも？」

「うん、でもお姉ちゃんは私のように戦車道が嫌いになるようなことはなくつて……でも、戦車道の試合で足が動かなくなつた私の事を心配してくれて……それで、戦車道を避けるために二人でこの学校に来たわけで……」

「そうだつたんですか……」

実質、彼女の足が動かなくなつたのは運が悪かつたとしか言いようのない物だった。しかし、それがトラウマとなつて彼女の心に傷をつけたのはまた事実。結果的に、多くの人たちの期待を裏切つて、たくさんの人間に迷惑をかけたという事もまたそれ以上に彼女の心に刻まれた事実だつた。

華は、何となくみほとまほにシンパシーを感じていた理由が分かつた。自分もまた、華道の家元の家に生まれてきた人間だ。生活のあちこちにおいても、きつい制限がなされて自分自身時には逃げ出したいという気持ちになつたことが多々ある。彼女達も自分と同じなのだろうと思う。

「そつかあ……じゃ、無理にやらなくていいじやん」

「え？」

「第一、今時戦車道なんてさあ、女子高生がやることじやないよ」「生徒会に断りになるなら、私達も付き添いますから」

そう、断ればいいのだ。ただそれだけでいいのに、自分はその最後の一歩が怖くて踏み出せないでいた。でも、どうしてだろうか、二人と一緒にならどんなことでも言えそうな気がする。二人に、たくさんの勇気をもらつているような気がする。

それに……障害を理由にしたくはないが、足が不自由という事は戦車乗りとしては不都合が多くある。特に、自分のスタイルから考えると、デメリット以外の何物でもない。生徒会からは戦略アドバイザー

としての参加でもいいとは言われたものの、あいにく姉とは違つて自分にそんな才能があるとは思えなかつた。ここは、二人の勇気を借りてきつぱり断つた方が無難だ。そう、みほは考えていた。

「二人とも、ありが……」

「う、うう……」

みほがお礼を言おうとしたとき、うめき声が聞こえた。三人は思わずその方向へと目線を向ける。そこは、自分たちが来る前から埋まつていた一つのベッドだつた。見ている内に、中にいる人間が上にかぶさつていた布団を取つて起き上がつてきた。

「だんだん良くなつてきた……」

起き上がりつてきたのは銀髪の女の子。自分達よりも年下に見える事と、先ほどの養護教諭の話から察するに一年生なのだろうが、心なしかもつと幼く見えてします。

「あの、大丈夫?」

「うん、ちょっと船によつただけ……えつと?」

「あっ、ごめんね急に話しかけちゃつて。私は武部沙織」

「五十鈴華です」

「私は……」

「え?」

その時だ。みほが自己紹介をしようとした瞬間、それを遮るかのようにチャイムが鳴り響いた。その時、みほの顔を見た少女の顔が少し変化したのには全く気がつかなかつた。

「授業が終わつてしましました。せつかくつろいでいましたのに」

「後はホームルームだけだね」

そういうえば、よく考えてみるとこつちの二人は自分のために仮病を使つて授業をする休みしてしまつたのだなど今更ながらに思つた。まあ、そのおかげで勇気を貰えたことであるし、後は家に帰つて姉と相談をしなければならない。

そう思つた矢先、彼女たちの耳をサイレンのようなものが襲つた。

「なに?」

みほの疑問もそこそこに、天井に備え付けられているスピーカーか

ら声が流れ出す。この声は確か、先ほどのバインダーを持っていた生徒会役員の声と同じだ。

『全校生徒に次ぐ、体育館に集合せよ。体育館に集合せよ』

「えつと……これって？」

「さあ？」

「うちの生徒会のやることですから」

「みんな慣れっこなんだ……」

この一人の反応から察するにどうやら、生徒会の突然の行動というのは奇行であるどころか、もはや名物になっているようだ。とにかくみほ、それからベッドの上にいる少女も一緒になつて体育館へと向かうことになった。

一方の西住姉、まほはというと一人体育館の真ん前で陣取り、みほが来るのを待っていた。

授業が終わつてすぐ、彼女はみほの教室へと急行した。すると、どうやらクラスの人間全員がどこかに行こうとしている様子だつた。見渡してみると、みほの姿、さらに沙織や華も見当たらない。一人の女子生徒を捕まえて話を聞くと、どうやら授業中に体調不良で三人とも保健室へと向かつたという。それに加えて、この喧騒は何なのかもいう事も聞くと、生徒会から放送があつて、体育館に集まるようにと指示があつたそうだ。自分は、その放送に聞き覚えはないが、多分あまりにも急いでいたため聞き逃してしまつたのだろう。

今から保健室に向かうべきかと考えたが、保健室は確かに体育館とは逆の位置に存在する。と、いう事は今から体育館に向かえば、先回りすることができる。そう考えて、体育館の扉のすぐ横に立つたのだ。こう言つては何であるが、みほは車椅子に乗つていてよく目立つ。そのうえ、常識のある人間は車椅子の少女がいれば大体の確率で道を開けてくれるものだ。さらに言えば、彼女は目がよかつた。そのため、遠くからでも車椅子に乗るみほと、その両脇にいる沙織と華の姿を見つけやすかつた。

そして、まほは自分の目を疑つた。何故彼女がみほの車椅子を押しているのか、いやそれどころか、どうして彼女がこの大洗にいるのだ

ろうか。この学校には戦車道はないはずだ。いや、百歩譲つて自分たちと同じように戦車道がないからこそ来たという事も考えよう。しかし、もしもその場合でも確か彼女はまだ年齢的に言えば中学生だったはずだ。それが、何故高校にいるのか。珍しくも動搖してしまったまほに対して、いつの間にかみほたちは近づいてきていた。

—あつ、お姉ちゃん

「みほ……保健室に行つたつて聞いたけど……大丈夫?」

うん、少し休んだら元気になつた

正言集

1

「もう武部さん」

冗談なのか、はたまた冗談じやないのかどちらともとれる発言ではあるが、それでも自分の代わりにみほの隣にいてくれて助かつたのは事実だ。

その時、車椅子を押している少女の顔を見る。やはり、間違いない。彼女に違いない。彼女もどうして自分がここにいるのかと言わんばかりの表情だ。みほは、彼女に対しても思わなかつたのだろうか。いや、彼女は次期家元がほとんど約束されている自分と違つてそう言つた物を知る心得もないだろうから、彼女の事を知らなくとも当然だろう。しかし、自分はよく知つている。何故なら、自分の家と彼女の家は双方ライバルのような物。会つたことはなくとも、写真などでよく見かける少女だつた。彼女は、彼女の名前は……。

「島田、愛里寿……」

卷之三

「え？ え？」

「……見間違えかと思いましたが……やつぱり、西住みほさんだつた

「え？・え？・え？」
「んですね……」

みほは、自分を間に挟んでの空気の変化を感じ取った。なんだろうか。険悪という雰囲気ではないが、しかし双方探りを入れているかのような感覚だ。だが、何故姉が見ず知らずの少女に對してそんな反応を示すのかよくわからなかつた。深く、重い沈黙が場の空気を支配している最中、愛里寿と名乗つた少女が言つた。

「……詳しく述べるのは後でも構いませんか？」

「……そうだな。みほ、色々とつまる話があるが……とりあえずこれが終わつてからにしよう」

「え?・う、うん……」

まほはそう言うと、愛里寿から車椅子を押す役目を代わつて、五人で一緒に体育館の中へと入つて行つた。

島田愛里寿と姉、二人の間に何があつたというのだろうか。そして、この後一体何があるというのだろうか。みほには、まるで想像もできない事であつた。

1—5 説明

体育館の中は、大洗学園中の生徒でごつた返していた。

無理もないだろう。先ほどの放送から察するに、この場所には大洗学園の全生徒が集まっているのだから。しかし、正直言えばこの学校にこれだけの人数がいたというのは驚きに値する。

無意識に耳に入ってくる言葉を統合すると、クラスごとに分かれているというわけではなく、それぞれに好きな場所に座って、生徒会役員が現れるのを待っているようだ。そのため、みほ、他四名は一番後ろで待つていていた。

それにもしても、生徒会は一体何のために全校生徒を集めたというのだろうか。百歩譲つて先生が生徒を招集するというのならまだ何となくわかるが、しかし生徒が生徒を呼び出す、並びにそれほどの権力を保持しているのは一体なぜだろうか。

「一体、何が始まるんだ？」

「さあ？」

「生徒会のやることですから」

「こんな事……前にもあつたの？」

「まあ、何度もね」

「へえ……」

と、姉は自分が保健室で言つたような言葉を吐き、愛里寿は納得したような納得していないような表情を浮かべていた。

因みに現在の並び順はと、沙織、華、みほ、愛里寿、まほの順番で座っている。生徒会の人間が来る前に、まほは少し愛里寿と話をしてみるとこにした。その際、戦車道の話になるかもしけないため、まほはみほには聞こえないように声のボリュームを小さくして話し始める。

「ところで……何故ここにいる？」

「……」

「次期島田流の家元であり……私の記憶だと確か中学生であるはずの君がどうして？」

華道に多くの流派があるように、戦車道にもいくつかの流派が存在する。中でも、二大流派と言われている物が、西住流と島田流なのだ。まほとみほは、色々あつて現在進行形で勘当同然の扱いとなつていて、が、一応西住流家元の娘。島田愛里寿は、島田流の家元の娘である。実際に会つて話したことはなかつたものの、西住流の次期家元としてはライバルとなる家の家元の顔ぐらいは覚えておかなければならぬと、写真で現家元、そしてその近くで一緒に映つていることの多かつた娘である愛里寿の顔を見たことがあつた。しかし、自分の記憶が正しければ、彼女はまだ中学生だつたはず。まほは、そんな彼女がどうして高校に、それも戦車道のない学校にいるのかが不思議でたらなかつた。

「……まほさんは、戦車道大学選抜チームの話をご存知ですか？」

「ん？当たり前だ。戦車道を嗜んでいた身としてはな……」

大学選抜チームは、文字通り古今東西日本中の大学から優秀な選手を集めて作られたチームの事である……とまほは記憶していた。

「そのチームの隊長に、私が任命されました」

「なに？だが君は……」

「私は、年齢的に言えばまだ中学生だけど、飛び級して大学生としての身分を持つて いるから……」

正直、飛び級制度が日本にあつたこと自体が驚きである。そのようなものは、アメリカなどの実力主義の国特有の文化であるという認識だつた。だが、愛里寿が大学生であるというのなら、なおさらこの高校にいるのはおかしな話だ。

「そうなのか……だが、それだつたらなおさら……」

「戦車道連盟で私が大学選抜の隊長を勤めることについて会議を行つた時……反対する人が多かつたみたいで……」

「……理由は？」

「若すぎる、人をまとめるのに力不足じゃないか……というような」「……なるほど」

もつともな意見である。確かに彼女に実力があるとしよう。しかし、彼女がまとめるのは、自分から見ても年上の大人になるギリギリ

の女性ばかり。そんな年上の少女達をまとめる力があるか、いやもし力があつても自分よりもはるかに若い愛里寿が隊長になることに反発する人間もいる事だろう。戦車道連盟の人間のように。さらに言えば、大学選抜という事は最高で九つも年の違う人間と接することとなるのだ。ジュネレーションギャップで話が合わず、意思疎通、コミュニケーションに支障をきたすという事もありうる。ともかく、若い愛里寿が力不足だと言われたのはそのような要因があつたからであると簡単に推測できた。

「それに、確かに大学に入学できるほどの学力があるとはいえ、中高六年間の人生を奪うのは、かわいそうだっていう意見も出ました」

「ああ、それは何となくわかる気がする……」

「でも、大学生の中で一番統率能力があるのは私だからどうしても隊長として置かなければならぬって話になつて……そしたら母さんが……期限を付けないで高等学校に通わせるのはどうかつて言つてくれて……」

「……どうなのか」

これは、現島田流家元の島田千代と戦車道連盟、さらに文部科学省と有識者が何日間にも及ぶ協議を行つた結果に導き出された結論であつた。

だが年上の人間と一緒にいる感覚になじませるのであれば、普通に大学に通つていればいいだけの話なのではないだろうかとまほは思つていた。確かに、彼女が思つた通りの意見が会議でも出た。しかし、多くの人間が知つている通り、大学というのはクラス制ではなく単位制である。それこそ学部学科によつては数百人という中に愛里寿は埋もれてしまう。大学生との会話について行けないであろうと予測される愛里寿にとつては、その状況は年上に慣れるという目標を達成すのには不都合なのである。そのため、所属する人数は数十人単位であるクラス制のある高等学校が一番この場合には適しているのだとある有識者からの意見があつたのだ。

さらに、高等学校に対しても島田流家元は二つの条件を付けた。

一・戦車道のない学校に通わせること。

二・女子高に通わせること。

という物だ。戦車道のない学校に通わせることを条件に入れたのは、愛里寿が敬われては意味がないと考えたことからだ。

戦車道をしている者の多くが、島田流という流派を、そして島田愛里寿という名前を知っていることだろう。それこそ、島田愛里寿は雲の上の存在に近い人間である。そんな人間が入ってきたとなると、愛里寿の事を対等の関係として見てくれる人間なんていなくなつてしまふ恐れがある。確かにこの問題の終着点が、隊長として大学生選抜をまとめ上げられるようになるであるが、敬われるとまとめ上げるという物は似て非なる物。そのため、対等に友達関係を築けるであろう戦車道のない学校に入学させるべきである、というのが島田千代等の意見であつた。

それから、女子高に通わせることという物は、共学校に行つて、変な男に引っかけられたら自分がその男を殺しに行きたくなるほどに嫌だからという、どちらかと言えば親バカに近い理由であった。

その条件に当てはまる高校はいくつもあった。楯無高校、豊琴高校、英星高校……最後には有識者の意見も交えて島田千代が決めた。その結果が……。

「大洗に来た……という事か」

「……」

愛里寿は、首を縦に振った。とりあえず、自分たちのように戦車道から逃げたくて来たわけじゃないと分かつて、少しだけ安心した。だが、戦車道がないから大洗に来たという事は、大洗の戦車道が復活するといった状況は少しまずいのではないだろうかとも思い始める。だが、どつちにしろ最後に決めるのは愛里寿なのだから、これ以上自分がどうこう言つていいわけがない。

「静かに、それではこれから必修選択科目のオリエンテーションを開始する」

いつの間にか目の前の舞台に立っていた生徒会役員の少女がそう言つた瞬間、体育館の照明は落とされ、プロジェクターが稼働し、真っ白いキャンバスに薄つすらと文字を映し出した。

それまでは、ただ単にオリエンテーションのために集められたのだなと思っていた。しかし、異様だつたのはその文字が出た後である。白地いでかでかと映し出された書道で書かれたような字体、そこには、彼女たちがよく知る言葉が記されていた。

『戦車道入門』

と。

「必修選択科目のオリエンテーションでしたよね？」

「まあ、戦車道も一応必修選択科目つていう名目らしいから」

という愛里寿とみほのやり取りも聞き流して、プロジェクターはナレーターの言葉と共に映像を映していく。

『戦車道、それは伝統的な文化であり、世界中で女子のたしなみとして受け継がれてきました』

最初に映し出されたのは富士山をバックにしてたたずむ『マークI 戦車』。イギリスが第一次世界大戦中に開発、使用した世界初の実用戦車だ。当時は、機械的信頼性の低さや操縦性が劣悪であることを始め、歩兵との連携を得られない事、さらに、稼働できたのが十八両という少なさも災いして、それに見合う戦火を残すことができなかつた。だが、このマークIからマークII、III、IVと改良開発が続けられ、兵器の研究・開発が各国で進められることになる。このマークI 戦車から、今の戦車の歴史が始まつたと断言しても良いのだ。

次に映し出されたのは、枯れた大地を進む『突撃戦車A7V』である。第一次世界大戦末期の一九一八年に実戦投入されたドイツで最初の戦車である。イギリスが前述のマークI 戦車を始めて実戦に投入したのが一九一六年なので、そのたつた二年後の事だ。あらゆる地形に適応したうえで、塹壕を突破できる能力を有することを義務付けられたこの戦車は諸説あるが、世界初の戦車戦と言われる戦いにて前述のマークI の発展形のマークIV 戦車三輌とこのA7V 三輌の間で行われたと言われている。殺伐とはしているが、これが戦車道の始まりであると指摘している歴史学者もいるのだとか。

三枚目に映し出されたのはバックに城とビルの両方が映つているという現代の写真であるということをありありと思わせる物だつた。

その戦車は、後ろからの写真ではあつた物の、イギリス陸軍の『マークA ホイペット中戦車』だ。一期一会とペイントがなされている。こちらも、先ほどまでの戦車と同じく、第一次世界大戦時の戦車であり、マークIを開発した人間によつて、戦車供給部に対してもより高速で、より安い戦車が従来の重たく遅い戦車が作る突破口を切り開くために作られなければならぬと提唱し、その後承認を得て作られた戦車だ。ホイペットは、第一次世界大戦中最も成功したイギリスの戦車と言われることもあり、戦時中のどのイギリス戦車よりも相手国に犠牲者を出したと評されている。どの戦車も、現代の戦車の歴史において重要な役割を担つてきたと言われる物ばかりだ。生徒会もそう言つたことを考えて選んだのだろうと三人は勘ぐつてしまふ。

次に場面が切り替わると、そこからは映像となつた。それは、まさしく戦車道に関連する女性たち。恐らく社会人チームだろうか。その映像が出された瞬間、みほはその映像から目線を外すかのように下を向いた。その様子は、まるでアレルギーを持つた患者のように見える。

『礼節のある、淑やかで慎ましく、そして凜々しい婦女子を育成することを目指した武芸でもあります』

カメラに一礼、続けて戦車に礼をした女性五人が、後ろにあるIII号戦車に乗り込んだ。III号戦車は、一九四一年から一九四二年までの間ドイツ戦車隊の主力であった戦車だ。こちらは、黒森峰にも長砲身を使用したJ型が存在しているので見慣れている。戦車長である女性が、サイレンントのためどう発声しているか分からぬが、前進と言つているのだろうと、口の動きから分かる。

『戦車道を学ぶことは、女子としての道を、究める事でもあります。鉄のように熱く強く、無限軌道のようにカタカタと愛らしい。そして、大砲のように情熱的で必殺命中』

大砲が火を吹く瞬間、今までサイレントであつた映像から大きな、自分にとつては聞き慣れた破裂音がした。しかし、ほとんどの生徒にとってはそう言うことではなく、隣にいる姉、それから愛里寿が無反應である以外には皆それぞれに驚いている様子が、真後ろから見て分

かつた。特に、自分だけ車椅子に乗っているため一段高い場所から生徒たちを見下ろしているため、目線を外した自分でもその様子が簡単に見て取れる。

まだ、耳の奥で大砲の音が鳴り響いている。その内、まるで自分の事を耳元であざけ笑っているのではないかというような笑い声に変化していく。笑い、罵り、そして蔑むようなそんな声。みほは、心の奥底に害虫が侵入してきたような感覚を感じた。

『戦車道を学べば必ず良き妻、良き母、良き職業婦人になれることでしょう』

ダメだ、もう耐えることができない。今すぐここから逃げ出した。戦車の映像が流れるたびに、痛みを感じることがないはずの足に電気が流れれるような痛みを感じる。奥歯を噛み締め、必死になつてその衝動を抑えてはいるものの、この身体の奥底からなだれだしてくるような感情は抑えきれない。ちょっと前までは、戦車の事が大好きで、自分自身ナレーターが言つているような人間になれるであろうと信じて疑わなかつた。でも、今となつてはそれらが甘い綺麗事にしか聞こえなくなつて、そんな自分が嫌で嫌で仕方がない。叫びたい、吐き出したい。映像は、戦勝パレードのような映像に切り替わつた。

『健康的で、優しくたくましいあなたは、多くの男性に好意を持つて受け入れるはずです』

やめて、そんな歓声欲しくない。私は、ただみんなで楽しく戦車道をしたかった。それなのに、みんなはそれを間違つてているといって、そんな感情勝負の世界に入らないといって、ただ勝つためだけの戦車道を自分に押し付けて、鳥肌が立つほどのプレッシャーを自分たちに押し付けて、心を飲み込もうとする。

車いすに座つているとはいう物の、みほに立ち眩みを起こしたかのような感覚が襲つた。めまい、頭痛、吐き気、様々な物がみほの身体を、心を蝕もうと働きかける。みほは、そこにいることが怖くなつてしまつた。

「西住さん、大丈夫ですか？」
「えッ？」

その声は、みほの心に精神安定剤を注いだかのように優しく、また自分の手の上に乗せられたそのか細い手は、彼女の身体をも優しく包んでいるように見えた。ふと気がつくと、五十鈴華が自分の手を抑えてくれていたようだ。どうやら、少し手が震えている。いや、彼女が心配してくれるのだとしたら、少しばかりではないのだろう。それに握りこぶしを開いてみると、手のひらにはくつきりと爪の跡が残されていた。無意識のうちに強く握りしめていたのだろう。痛みを感じなかつたという事が不思議でならない。

『さあ、皆さんもぜひ戦車道を学び、心身ともに健やかで美しい女性になりましょう』

最後に、『来たれ乙女達!』という書が映し出され、まるでヒーローショーのような爆発と煙を最後に、そのプロモーションビデオのようなものは終わつた。必修選択科目のオリエンテーションなのに戦車道の事しかしていないだとか、もしも乙女じやなかつたらどうするのだとかいろいろとツッコミどころがあつた物の、みほは別段そのことについて突つ込まなかつた。というよりも、突つ込む気力がなかつた。

瞬く間に終わつた戦車道についてのプロモーションビデオ。どう考へても他の選択科目のことを置き去りにしたもので、彼女たちが必死で戦車道の人を集めたいという事がありありと伝わつてくるようなクオリティで逆に驚いた。

煙が晴れて、体育館の灯りがともり始めるころ、『必修選択科目履修届』と書かれた紙が、プロジェクターで大きく映し出された。そこには、一番上にでかでかと戦車道と書かれており、その下に小さく茶道、書道、合気道、華道、弓道、仙道、香道、長刀道、忍道と書かれているという、あまりにも戦車道の自己主張の強いものが映し出されていた。

「みほ、大丈夫？」

「うん……ありがとう、五十鈴さん」

「いえ、どういたしまして」

まほは、明るくなつたタイミングを見てみほに話しかけた。本来なら、先ほど様子がおかしくなつた時に話しかけたかったが、みほと自分の間にいる愛里寿に迷惑をかけるわけにはいかなかつたため話しかけることができなかつた。しかし、どうやらさらに向こう側にいた五十鈴華がみほの手を握つて落ち着かせてくれていたようだ。

一見して大したことのないようと思えるこの行動だが、精神的に落ち込んだ時や、相手を元気つけたいときにボディタッチという物は素晴らしいほどの効果をもたらしてくれるのだ。よく、母親が子供の手を握つているという行動をよく見るが、あれは子供が迷子にならないためという事の他に、そうすることで母親の暖かさに直に触れることで子どもに無意識に安心感を与えるためであると言われている。まあ、使い方を間違えると人生を崩壊させる原因にもなりうる諸刃の剣ともいえるのだが……。

ともかく、まほは華に感謝しかなかつた。因みに、さらにその向こう側にいる沙織はというとだが。

「はあ……」

顔のゆるみから察するにすつかりと戦車道に魅了されているよう
に見える。

ともかく、まほは愛里寿と場所を交代してもらつた直後、またも生徒会三人衆が前に出てきて話を始める。

「実は、数年後に戦車道の世界大会が日本で開催されることとなつた。そのため、文科省から全国の高校、大学に戦車道に力を入れるよう要請があつたのだ」

なるほど、確かに自分も母から戦車道の世界大会開催の話を聞かされた。その時に西住流として選抜されるように精進するようになると。

戦車道は、それなりに歴史のある武道であるが、知名度で言うと華道や茶道には今一歩劣っている。そのため高校、大学で戦車道を推進することで、近くにある戦車道世界大会に向けて熱意向上を図ろうとしていると考えるべきだろうか。

ともかく、あの生徒会の話から察するに、どうやらどの学校に行つたとしても自分とみほ、それから愛里寿は戦車道から逃れることができなかつたのかもしれない。少なくとも脅迫まがいのように勧誘を受けることもなかつただろうが。

「んで、うちの学校も戦車道を復活させるからねえ、選択すると色々特典を与えちゃおうと思うだ。副会長」

と言われて、隣のポニー・テールの少女が反応した。あの眼鏡をかけたほうが副会長だと思つていたため、少々驚いてしまう。

「成績優秀者には食堂の食券百枚、遅刻見逃し二百日、さらに通常授業の三倍の単位を与えます！」

瞬間、館内はざわついた。流石のまほであつても、そのような特別待遇は聞いたことがなかつたので驚いた。

「そんなに……何故彼女たちはそこまでして戦車道履修者を集めようとする……いくら世界大会が近いと言つても、これは異常だぞ」

「うん、ただでさえ戦車道は黒森峰やグロリアーナ女学院みたいなより名門の学校が沢山ある。こんな無名校から人をかき集めても意味ないんじや……」

何をここまで必死になることがあるのだろうか。それにこの特典

の数、生徒会が用意できる範疇から逸脱している。学校側も協力しているには違はないが、ここまで大きな特典を付与させるなど、学校側が何を考えているのか理解できなかつた。

「ど、いう事でよろしく~」

かくして、必修選択科目のオリエンテーション、というより戦車道の紹介は終了した。体育館の中はまだ喧騒が支配しており、自分から外に出ようとしている者はいなかつたため、みほたちが外に出るのは容易かつた。

戦車道を知つてゐる者、知らない者をも巻き込んでそれぞれに衝撃を与えるようなプレゼンテーションだつたのだから、あそこまで騒ぎ立てるのは当然であろう。

後ろから見ても彼女たちの戦略がズバリとはまつたことは目に見えていた。あと、ここにも一人あからさまにその術中にはまつた人間がいる。

「私、戦車道履修する！」

「……」

沙織である。

「最近の男子は、強くて頼れる女の子が好きなんだつて！それに、戦車道やつたらモテモテなんですよ？」

「……」

確かに彼女の言う通り自分たちはモテモテだつたと言えよう。ラブレターもたくさん受け取つた。……女子から。

おそらくだが、戦車道をしたからと言つて、異性からモテるようになるという事は必ずしも言えないだろう。むしろ、自分とおなじ女性であるというのに、重厚で迫力のある物を動かしているという憧れや、尊敬と言つた意味合いから女性にモテるということは考えられることだ。

「みほとまほさんもやろうよ！家元でしょ！」

しかし、二人は答えなかつた。代わりと言つては何だが、その沙織からのお誘いに華が代わりに応えてくれた。

「沙織さん、お二人にはお二人の事情があるのでから、無理強いさせ

るのは申し訳ないです」

「え、そう？」

正直なところ、華は先ほどのプレゼンを見て戦車道を履修したいと心の中で思つた。しかし、それでいて先ほどのみほの手を握つた感覚が忘れられないでいた。

戦車を見た瞬間に震え始めた手、虚ろになる眼、沸騰したヤカンのようには噴き出した汗、それらが彼女が戦車道という物に対して、戦車という物に対してもトラウマを感じているという事を示していた。

自分は、戦車道には疎いもののルールも厳格に決められており、安全に十分配慮したもので、大きなケガをするような人間が出ることはないとという事を知つてゐる。だが、みほのその身体が、自分の記憶と矛盾していることをありありと示していた。果たして、安全なはずの戦車道でみほの足が動かなくなつたほどの出来事とは何なのだろう。彼女の心に傷をつけたのは何なのだろうか。

華は、彼女は戦車を避ける理由を知らなければ、戦車道を履修する氣にも、履修する資格すらもないと思つていた。

そういうえば、みほは戦車道の試合で足が動かなくなつたと話していた。練習中ならともかく、試合中の出来事が原因であるというのなら今の時代、ネットでいくつかのサイトの文献を探れば出てくるだろうか。それに、彼女の家も自分の家と同じく、その道の流派の名門であるらしいため、名前で検索すれば出てくるのかもしだれな。友達の過去を暴き立てるようで少し後ろ髪を引かれるが、しかしそれを知らないければみほの友達を続ける資格はないように思えた。そう思つたのだ。

そんな体育館から帰り際の五人の姿を少し後ろの柱の影から見ている少女がいた。

「や、やはりあれは黒森峰文学園の西住みほ殿とまほ殿です。……それからあの銀髪の方もどこかで見たことが……」

少女は筋金入りの戦車マニアであつた。無論、戦車道の事も雑誌や実際の試合をテレビで観戦したりもしていた。自分もその雑誌に載つてゐる少女たちのように戦車を乗り回したい。そう思つていた

が、この大洗には何年も前から戦車道が廃止になり、戦車が置いていなかっためその夢は叶わなかつた。ただ、それで戦車道のある学校に転校しようと思わないところが、彼女が親孝行ものであることを表しているのかもしれない。

そんなあこがれの存在であり、高嶺の花であつただけの戦車道。しかし、そんな自分に対してもよらないニュースが舞い込んできた。

『西住姉妹が、大洗学園に転校してくる』

彼女は、そのことに対する最初は大いに喜んだ。何故なら、彼女にとつて戦車道名門校の黒森峰女学園の西住姉妹は憧れの存在であつた。中でも、西住みほの事は、ある試合を見た時から、羨望の眼差しを送つていたほどだ。だが、その試合を見ていたからこそ、彼女は二人に会いに行くのを躊躇してしまつた。体育館から出て行く彼女たちの背中を見て、声をかけようと追いかけてもこのざまである。

あの試合、自分が西住みほにあこがれを持つたきつかけとなつた試合。しかし、それは同時に、彼女に、彼女たちにとつては思い返したくないほどの苦い記憶のはずである。あんなことがあつたのだから当然だ。何の関係もない自分が思い出してみても、胃がキリキリと痛み始めるほど。

確かに、あれは人間としては正しかつたのかもしれない。しかし、結果的にそれは美談となつて昇華されて、多くの人の心の中に残されることとなつてしまつた。彼女は、そんな世間の評価の事をどう思つているのだろうか。自分は、そんな彼女に対して戦車の事も関係なしに付き合うことができるのだろうか。はつきりと言おう。彼女には、そんな自信一欠けらもなかつた。だから、彼女はその美談の証としてみほが座つている車椅子を遠目から見るしかなかつたのだ。それは、彼女の心が弱すぎたからではない。彼女の知識が膨大であつたからこそ起ころるすれ違いであつた。

1—7 理由

必修選択科目のオリエンテーションがあつた次の日の朝、西住みほが沙織に見せたのは、あの必修選択科目の選択用紙だつた。ただし、戦車道ではなく香道の場所に○のついた、である。

「ごめんね……私、やっぱり……どうしても戦車道をしたくなくつてここまで来たの……」

みほは、昨晩の事を思い返す。華たちと別れ、まほと共に帰つたみほは、その選択用紙と向かい合つて、包帯を巻いた熊のぬいぐるみを抱きながら考えた。みほは、言葉の上では戦車道に未練などない、戦車道など嫌いだと言つていた。しかし、実は心の中ではしこりのように戦車という物に未練を感じていた。当然だ。何年も、産まれた時からともに歩んできたと言つても間違ひではない戦車という心の恋人に近いものを、思い出という籠から解き放つことなどそう簡単にできやしない。本当は、戦車にもう一度乗りたい。大地を踏みしめ、あらゆる障害をも乗り越えて進む履帯の感覚、戦車の中だからこそ嗅げるあの鉄のなんとも言えない匂い。そう簡単に忘れられるわけがない。この学校で初めてできた友達の沙織にも誘われたこともあって、彼女の心はかなり揺らいでいた。

だが、同時に今の自分が戦車に乗つたところでどうなるというのだろうという疑問もわいていた。確かに、座つてしまえば、黒森峰の時はほとんど変わらないだろう。だが、足の踏ん張りがきかないため、少しの揺れで倒れてしまう恐れが多分にある。それに、戦車という物は中から見る分には視界が狭くてよく見えないため、立ち上がって入口となる場所から上半身を出して周囲の様子を見る必要がある。しかし、立てない自分がそんな事、できるはずがない。それに、戦略アドバイザーというのも……。

だから、彼女は完全に思考の迷路へと迷い込んでいた。

「みほ

そんな時、まほが後ろから声をかけてきた。手には、ホットミルクの入ったコップが握られている。

「お姉ちゃん、ありがとう……」

みほは、そのホットミルクを受け取つて、少しだけ飲んだ。濃厚で、優しい味が口の中に広がっていく。それは、元々のホットミルクの味もあつただろうが、姉が淹れてくれたという事も相まっての事であることは簡単に想像できた。

「……みほ」

「え？」

心が静まつてきた頃、意を決したようにまほはみほに対して言った。

「……私が戦車道を選択する」

「え……」

その言葉に驚いたみほは、危うく手に持つたコップを落としそうになつた。さらにまほは続けて言う。

「あの生徒会の様子だと、たとえ断つたとしてもどうせみほや私……もしかしたら愛里寿の事もしつこく勧誘してくるはず。だから、私がみほの事を守る」

「お姉ちゃん……」

みほは、姉に対して申し訳なくなる一方で、その反面嬉しくなる気持ちも少しはあつた。姉が、誰よりも戦車の事が好きであるという事を知っていたから。その戦車にもう一度触れてくれることが嬉しかつたのだ。

そして、彼女は一人になつて一晩考えた。ただ、やっぱりあの時のがフラツシユバツクしてしまい、彼女の手は戦車道の項目に伸びることをためらつてしまつた。だが、本当はそれでいいのだ。何故なら、最初から彼女は戦車道をするためにこの学校に来たわけじやなかつたのだから。戦車道から離れて、心を癒すために、この学校に來たのだから。

だから、ただ一つ懸念事項があつたとしたら、沙織の事だ。あの沙織の嬉しそうな顔、あのはつらつとした笑顔。それは、まるで戦車道を楽しいものだと信じていた頃の自分そのままだつた。だから、自分が戦車道を履修しないと知つたら、彼女はどう思うのだろうか、それ

が心配でならなかつた。そして、その沙織の反応は……。

「分かつた。ごめんね、悩ませちゃつて」

そう言つて、沙織はじぶんの必修選択科目の用紙を取り出すと、戦車道の項目に入れていた○を×で消して、香道の場所に○を入れた。

「え？」

「私も、みほのと一緒のにする」

「そんな、沙織さんは戦車道を選んで……」

「いいよ、だつて一緒にいいじやん。それにさ……私が戦車道をやると思いついたくないようなことを、思い出しちゃうかもだし」

「私は……平気だから……」

しかし、机の上におかれたその手は小刻みな震えを起こしていた。流石の沙織でもそれにはすぐに気がつく。沙織は、その震えを止めるようにはみほの手を持つと言つた。

「みほが平氣でも、私が嫌なの。みほが辛い顔をするの、私は見たくなりから」

「沙織さん……でも、昨日は」

「ああえつと……私は好きになつた彼氏の趣味に合わせる方だから丈夫！」

「沙織さん……」

沙織は、まだ見知らぬ愛情よりも、今日の前にある友情を取つた。将来的にどちらを取つていた方がよかつたのか、それを考えるのはその時だ。今は目の前の少女の幸せを取つたそのことに、沙織は悔いはなかつた。

「いい友達ができてよかつたなみほ」

一方その様子を教室の外から見るまほは、妹に真によき友ができたという事に、うつすらと喜びを感じていた。良き友といえばもう一人、華はどこに言つたのだろうか。

「まほさん、一つよろしいですか？」

すぐ後ろにいた。

「何の用かな？」

「……みほさんの事、失礼ですけれど調べさせていただきました」

まほは表情を変えないし、むしろやはりかと思つていた。

「どうして、みほの事を調べたの？」

「……みほさんがあまりにも戦車道を嫌つてゐるのが気になつたんです。私も、戦車道を履修しようとしていたのですが、その前にみほさんに何があつたのか知つておかなければ、みほさんに嫌な思いをさせかねませんから」

「それで、どうだつた？」

「……第62回戦車道全国大会決勝戦の悲劇」

「……」

「みほさんの足が動かなくなつた原因となつた試合……戦車道の事がトラウマとなつてしまつたのは、当然だと思いました」

「あれは……不幸な事故だつたんだ。戦車道は、本当は安全でけが人なんて……ましてや試合での死傷者なんて出ることはなかつた……だが……」

思い出そうとするだけで自分の不甲斐なさを思い知る。いや、当時まほは別動隊を率いて崖からは遠い場所から相手の本隊を探していき。そのため、みほを力づくで止めることも不可能だつた。しかし、自分がみほにフラッグ車を任せるような真似をしなければみほがみんなことをすることはなかつた。その事実だけが、彼女を苦しめていた。

「昨年度の戦車道全国大会……試合が始まつた時から大雨で、最初は試合の中止も検討されていましたが日程の問題や、前例から試合は可能であると判断されて、決勝戦は行われた。その最中、雨で地盤が緩んでいた道を走つていたことが災いして、一輛の戦車が受け下に転落。その戦車に乗つていた仲間を助けようとみほさんは飛び出して……指揮する人がいなくなつたフラッグ車……というのは、よく分かりませんが……」

まほからしてみれば、初歩中の初歩の話ではあるが、知らない人間からして見れば戦車道のルールを知らないのは当然の事だろう。まほは華に教鞭をとるように語る。

「戦車道の試合は、主に殲滅戦とフラッグ戦の式種類がある。殲滅戦

は、文字通り相手の車両を全て全滅させることを目標とする試合形式、フラッグ戦は、双方のチームに一台づつ目印となる旗を立てた車輌を仕立て、その旗を持つ車輌を倒せば勝利となる形式の事だ。戦車道全国大会は、公平を期すために主にフラッグ戦で行われる。私は……一番信頼のおけるみほを、フラッグ車の戦車長に任命した。そして……」

フラッグ車は、みほの最後の指示に従い随伴していたティーガーと一緒に後退した。しかし、みほから指揮を代わったまほとの距離があまりにも空いていて、結果ほとんどどうにもすることができずに、そのまま黒森峰は敗退。がけ下に落ちた戦車はその後回収、乗っていた人員5名は、多少のかすり傷はあつたものの重症と言われるほどのケガではなかった。

しかし、その戦車を助けに行つたみほ本人は、激流によつて勢いが増した川の上流から流されて来た流木に激突したり、川底や岩肌に身体をぶつけ、脊髄を損傷してしまい、下半身不随や排尿障害と言つた物も負つてしまつた。そしてみほに残つたのは、戦車に対する恐怖と、自分のせいで十連覇ができなかつた先輩達への慚愧の念、それから二度と歩くことができないという悲しみだけだつた。

「みほさんは、現西住流家元である西住しほさんから怒りを買ひ、さらにおみほさんをかばつたまほさんまでも黒森峰から退学となつた……それが、記事に乗つていたことの顛末でした」

「……大体はあつてる。そして、後は知つての通り私たち戦車道のない大洗に來た……はずだつたのにな」

瞬間、華は腕を組んでいたまほの手に力が入つたのを感じた。本当に悔しくてたまらないのだろう。自分たちは、戦車道とは何ら関係のない大洗に來たはずだつたのに、まさかそこで戦車道履修を強制させられるとは思わなかつた。みほのトラウマを軽減させるためにここまで來たというのに、これでは本末転倒ではないか。ふとその時、まほは思つた。

「……五十鈴さんは、どうするの？」

そう聞かれた華は、一瞬微笑んでまほの前を横切り、そして教室の

中にいるみほと沙織を見て言つた。

「私も沙織さんと同じ……これ以上みほさんが苦しむ姿は見たくありません」

「そう……ごめんね」

「……いいんです」

まほは思う。自分が卒業しても、こんなにいい子たちが友達であるのなら、みほも安心して学園生活を送れることであろうと。それが、一番うれしかつた。色々あつた物の、結局のところこの大洗に来てよかつた。それが、彼女の中の結論であつた。

次の授業があるため、まほはその場から離れていった。しかし、本当にこれでよかつたのだろうか。それに、華には一つ気がかりなことがあつた。それは、昨年度の戦車道全国大会の記録を探つていた時の事、ふと見えた関連項目、それは十年近くも前のある事故の事を記していた記事で、もちろんみほには何の関係もない記事のはずだつた。しかし、どうにもその記事の事が気になつてしまふがなかつたのだ。その事故とは……。

『第53回戦車道全国大会決勝戦の惨劇』

1—8 懸念

まほたちが、自分たちの行く先を決めていたそのころ、一人島田愛里寿は悩みうなされていた。

「うう……」

保健室で。いまだに大洗での生活に慣れることのない愛里寿は、今日も今日とて気分を害してしまったのだ。気分が悪くなるというのは昨日と同じではある物の今日のそれは一段と酷い。やはり、この悩み事がストレスとなってしまっているのかもしれない。

みほたちは、同じ学年で一緒に悩んでくれるような友達がいたため、幾分かはましではあったが、愛里寿はまだ友達も作れていないため簡単に相談できるような人間がいなかつた。それに、みほが戦車道にトラウマを持っていることも、その理由も知っているためこれ以上みほに負担をかけたくないから彼女たちに相談するのもはばかられる。そのため、一人で自分の行く先を決めなければならない。

昨晩、彼女は実家に連絡を入れた。大洗学園で戦車道が復活すること、自分が戦車道の授業を取るか悩んでいるという事。それを、母に相談した。そして、母からの返事はやはり、自分で決めろという物だつた。だからこそ、彼女は悩んでいた。そんな時、保健室の扉を開く音が聞こえる。養護教諭が帰ってきたのだろうか。

「愛里寿、気分どう？」

「えつと……澤さん」

「梓でいいよ。年は違つても同じ学年でしょ」

保健室に来たのは、教室で自分の隣の席で授業を受けていた澤梓だつた。もともと、愛里寿の異変に一日連続で気づいて、保健室に行くように促したのは彼女であつた。そういえば、もう休み時間だつたか、時計を見るような余裕など彼女にはなかつたため、そこまで時間が経つてていることに若干の驚きを感じる。

「……うん」

名前で呼んでいい。その梓の提案に対しても彼女はそう小さく返答した。だが、彼女にそう言われたものの、愛里寿は名前を呼ぶという

事になれていた。ここまで自分に對して笑顔を向けて、同じ目線で話してくれる人間にそうそう会えて来なかつたことも災いしているのだろうか。この大洗で生活するうちに、徐々にこの感覺に慣れていいくだろうとは思うのだが、すぐに愛称で呼び合う仲になる人間が現れるとは思えなかつた。

「あ、そうだ……」

そう言いながら、梓はスカートについているポケットの中から折りたたまれた紙を取り出した。それは、今まさに自分が行先を迷つてゐる必修選択科目の選択用紙であつた。梓の紙にはすでに、戦車道の項目に○が付けられていた。

「愛里寿はどれにしたの？」

「え？……えっと、まだ決めてません……」

「そ、うなんだ……それじゃあ、私達と一緒に戦車道取らない？他にも何人が戦車道を取るつもりの人人がいるの？」

「え？でも……」

「でも？」

「……正直強くできる自信がありません」

一見して、みほのように戦車にトラウマがなく、母から許可のような物も取れたため愛里寿が戦車道を履修するにあたつての障害はないように思える。しかし、一番の問題は素人ばかりが来るであろう戦車道履修者の生徒たちを強くできる自信が皆無なのだ。

確かに彼女は島田流の後継者として、門下生に交じつて戦車に乗つていた、母に代わつて指揮を執つた経験も多分にある。だからと云つて、まるつきりの素人を相手にしたことなんて全くと言つていいほどない。野球で例えれば、リトルリーグにプロのキヤツチヤーが一人混じるような物か。それで強いチームを作れるほど戦車道は甘くない。だからこそ愛里寿は迷つていたのだが、その答えに對して梓は笑いながら言つた。

「なにそれ、愛里寿まるで監督みたい」

「え？」

「強くなるとか、強くするとか……そう言うのの前に私は、なんだかお

もしろそしうだなつて思つて戦車道を選んだの」

「面白そう?」

「うん、私も最初は華道を取ろうかなつて思つてた……でも、なんてい
うのかな……昨日のオリエンテーションの映像を見ていると、ちょつ
と怖いけど、でも興味ができたつていうか……」

「……」

「確かに、ちよつと生徒会の人達が胡散臭かつたけれど……戦車道の
授業を取るのも……楽しそうかなつて」

「楽しそう……」

面白そしうだから、楽しそうだから、そんな気持ち考えたこともなかつた。自分にとつて戦車を操るという事は、もはや義務であり、勝つことが絶対だつた自分にとつて、楽しい、面白いという感情が湧いたことはなかつた。

コロンブスの卵的な発想とはこのことなのだろう。愛里寿にとつて梓の言つた言葉は、自分の今までの戦車道の概念を超えたものだつたと言えるだろう。なにも、勝とうと思わなくともいい。実家の時のように勝ちにこだわるのではなく、ただ楽しく戦車道をすればいい。そんな戦車道をしたことがなかつたら、思い付かなかつただけで、至極当然なこと。愛里寿は、そんな戦車道もいいかなと思つた。

「そうだよね……楽しく、戦車道ができれば……それも悪くないかも」

「愛里寿?」

「うん、大丈夫。私も、戦車道履修することに決めたから」

「本当、よかつた」

「よかつた?」

「うん……愛里寿と友達になれるきつかけができたもの」

「友……達……」

「うん!」

友達。いい響きである。今まで自分に友達という物ができた記憶がない。名門の家に生まれた天才というのは、みな孤独なのだ。家柄という物のために、人生のレールを轢かれて、夢はもちろん結婚相手を親に勝手に決められることがある。そして何よりも周りの人間が

家柄に委縮してしまい、英才教育によつてさまざまな面で天才と評された愛里寿には、友達を作るチャンスすらもなかつた。西住姉妹のように姉妹がいたら、まだ幾分かはマシだつたのかもしれないが、それがない彼女には、その孤独感で言えば彼女達以上であろう。だからこそ……。

「友達……友達になつてくれるの？」

「もちろんだよ、愛里寿」

「友達……ありがとう澤さん」

「じゃなくつて」

「……うん、梓」

この時感じた一生モノの暖かな心は、二度と忘れる事はないだろう。

「思つたより集まりませんでしたね」

「十七人です。私達を入れて二十人」

放課後、生徒会室にて集合した生徒会三人衆は、生徒から集められた履修選択の用紙を眺めていた。全部合わせて十七枚、自分達三人を合わせても二十人。これは、確実に少ないと見えようか。あれだけの特典を付けた上に、非人道的なことも行つて履修者を集めては見たものの、ふたを開けてみればこの人数である。この大洗学園の全生徒の数から割ると、かなり少数なのだ。恐らく、特典を大量に付けたがために警戒されたり、怪しまれてしまつたという事もあるのかもしれない。だが、この人数は彼女たちのある懸念事項をも左右してしまう。自分たちが出る予定である戦車道全国大会の公式ルールでは、参加できる車輛は、一回戦から準々決勝までは十輛、準決勝は十五輛、決勝は二十輛。さらに、最低参加車輛数は五輛である。調べたところ、自分たちが見つけた戦車は乗員四名である。まだ、他の戦車を見つけてもいないが、これを基準とするならば二十人はギリギリの数字と言えよう。欲を言えば、あともう十人程は欲しかつたというのが、彼女たちの希望的観測だつた。

「まつ何とかなるでしょ」

だが、まだ出られないと決まつたわけじゃない。最悪、三人乗りの戦車が五台あれば、15人で事足りるのだ。二人乗りの小さな戦車が複数あればなおいい。杏のある知り合いのいる学校では、二人乗りの小さな戦車が九割ほどで、大きな戦車は数えるぐらいしか（数えられなかつたらそれはそれで問題があるのだが）ない状況でも戦車道をしているというのだから、いざとなつたら彼女たちをまねるぐらいのことはできるかもしね。

人数の問題については一応何とかなる。そう杏は思っていた。しかし、今彼女の目の前にいる一人はさらにもう一つの問題について頭を抱えていた。

「しかし、もう一つ懸念事項があります」

「西住みほさん、彼女に戦車道を選択してもらえませんでした……」
西住みほ。昨日オリエンテーション前に杏自らスカウトしに行つた少女。戦車に疎い彼女たちにとつて、前の学校で戦車道をたしなんでいた西住流家元の娘である西住みほの加入は、今後戦い抜くにおいては重要なメンバーであつた。だが、自分たちが彼女に交渉しに行つたときにはいい返事をもらうことができなかつた。無理もない、自分の足が動かなくなつた原因の一端である戦車道というトラウマを引き出してしまつたのだから。聞くところによると、その後の授業では彼女は体調不良のために保健室に向かつたのだとか。

「どうしますか？ いつそのこと、彼女を呼び出して……」

「いいんじやないそんなことしなくても？」

「ですが……」

「姉ちゃんと、島田ちゃんは履修してくれるんでしょ？ なら、それでもういいじやん」

「……」

確かに、戦車道経験者三名が履修するという一番理想的な目標は達成できなかつたものの、みほの姉である西住まほ、島田流家元の娘である島田愛里寿は引き入れることができた。普通の学校なら十分すぎるほどの戦力である。

「それにさ……」

「それに？」

「いや、まつこれもこれで結果オーライ」

「……分かりました」

みほの一件はこれで終わりとして残る問題、というよりも現在の所議論しなければいけないようなことは残り一つ。それが、名前だけ書かれてどこにも○のついていない一枚の用紙。

「最後に……この少女はどうしますか？」

「ああ、この子ね……」

○のついていない。それだけでは記載不備という事になるのだが、実はこの用紙の一番下には小さく※2、※3と表記して注意事項が書かれているのだ。注意事項は以下の通り。

※2 希望がない生徒は自動的に「戦車道」の選択になる。
※3 記載不備、または提出期限を守れなかつた生徒は「戦車道」の選択になる

因みに※1は戦車道選択に当たつての特典についてである。この注意事項から判断するに彼女は戦車道履修という事になるのだが、実際にその注意事項に当てはまる生徒が現れると困る物だ。

この学園の生徒は全員がまじめな人間であることを彼女は自信を持つて言える。しかし、もしも、この少女が冷やかしとして無記載で出した場合という事も考えると、戦車道履修者のモチベーションにも影響を及ぼす恐れがある。

「まつ、ちよつくらその子の所に行つてくるわ。河嶋、後のこと頼んだ」

「分かりました」

正直一握りを除いて素人ばかりが集まることが確定的である戦車道において、モチベーションやらなんやらというのは無関係な気もあるが、それでも一応どんな人物であるのかだけは確認しておきたい。杏は、そう思つて生徒会室の扉を開き、件の少女の下へと向かつた。

そして次の日、その少女は集合場所に姿を見せなかつた。

1—9 逃避

多分、夢は見ていなかつただろう。もしも見ていたとすれば、それは絶対悪夢であつて、自分の記憶にトラウマとして刻み込まれているはずだから。だから、その時夢は見なかつたと断言できる。ただ、これだけは覚えている。目が覚める前、一瞬のうちの出来事。

そう、それはあまりにも一瞬で、夢であると言えるか不明である。妄想に近い物だつたのかもしれない。自分と、姉、そして母が一緒の戦車に乗る夢。それも、彼女が見たこともないような笑顔を自分に見せる母の顔は、姉の顔は、例え妄想だつたとしてもそれを受け入れて生きていきたいと言つてしまえるほどの物だつた。

けど、その妄想も、終わりを迎えた。

「うう……」

最初に彼女の中に入ってきたのは、メトロノームのように正確に鳴る何かの機械の音だつた。聞いているだけで心地の良いその音は、耐えることなく、彼女の耳からまるで初めて音という物を聞いたかのように純粹なハーモニーを彼女の心に送り込んでいた。

そして、彼女は重りのよう重い目をゆつくりと開けた。当たり前だが、その眼に最初に飛び込んできた物は光だつた。光線銃を当てられたかのように眩しいその光は、雑に並べられた彼女の心を一つにまとめるかのように神々しく輝いていた。

ここはどこなのだろうか。家ではないことは確かだ。自分の家は、木製で、天井はこの純白とは程遠い木の色をしている。また、ベッドの周りにをカーテンが囲い視界を純白によつて遮つており、それでいて、においもなんだか不純物が少ないかのように無臭であり、それがより彼女の心を不安にさせた。

「こ、こは……？」

その言葉を発すると同時に、まずは自分の記憶をたどつてみることにした。確かに自分は、先ほどまでティーガーに乗つていたはずだ。初めてフラツグ車を任されて、不安だつたものの、姉から『フラツグ車を任せられる人間であると判断した』という言葉を聞いて、嬉しくな

り、不安なんて吹き飛んでしまった。

そして試合当日、天気は大荒れで土砂降りの雨が降り続いて、全然止む気配がなく一時は延期という事も戦車道連盟は考えていた。しかし、結局は十年前の大会の決勝の事を引き合いに出し、試合は予定通りに開始されてしまった。

それから……それから……。

「みほ！」

その時だ。カーテンを勢いよく開けて入ってきた人物。それは、自分がよく知る人物だった。その顔を見ただけで、彼女の心の中から不安要素が飛んで消え去ってしまった。

「お姉ちゃん」

姉、まほはすぐ彼女の枕元に駆け寄ると言つた。

「その……大丈夫か、みほ？ 痛むところはないか？」

「痛み……ううん、そんなのないよ」

「あつ……いや、そう……よかつた」

まほは、何かを言いだそうとしたところで、一瞬ためらつて別の言葉を吐き出した。しかし、それはみほにとつては何かを隠しているという事を伝えることにしかならなかつたのだ。一体、姉が何を隠しているのだろうか。みほにはまだそれが分かつていなかつた。彼女の苦しみも。自分の苦しみでさえも、分かつていなかつたのだ。

ともかく、まずはここがどこなのかはつきりさせた方がいい。そう考えたみほは、まほに言つた。

「……ねえ、ここはどこなの？」

「……ここは、病院だよ。みほは三日間眠りっぱなしになつたんだ」「病院……あつ」

その時、みほはようやく思い出した。そうだ、確かに自分は崖から落ちて言つたティーガーIの乗員を助けるために激流の川に飛び込んでいたではないか。そして、確か結局ティーガーに接触することすらもできずに、水に飲み込まれて……そして……。そこで、気を失つたのだ。

「お姉ちゃん、ティーガーIに乗つっていた人たちは？」

「……大丈夫、誰もケガなんてしていなかつた」

「そう、よかつた……」

現状はともかく、みほにとつてはティーガーIに乗っていた人たちが無事であったという事はいい報告であつた。結局自分の行動は無駄骨となつてしまつたのだが、たとえそうだとしても、無事であることは喜ばしいという以外になかつた。

まほは、そんな彼女の言葉を聞いて、唇を噛み締める。そうだ、確かに激流に流されたティーガーIに乗つていた少女たちは無事だつた。機材に体をぶつけるという事も、水が戦車内に侵入して溺れ死ぬという事は回避された。だが……。

「……ねえ、試合はどうなつたの？」

「えっ……」

その言葉に、まほは一瞬答えるのと躊躇した。だが、結局はいずれ知ることとなることだ。左手を握りしめたまほは、意を決して真実を話した。

「……負けたよ。がけが崩れた後、すぐにプラウダ高校の戦車が現れて……」

「そう……なんだ……」

みほは、心の中で謝罪した。その相手は、今は三年生になる先輩達。前の大會まで九連覇であった彼女たちにとつて、今年は最上級生として十連覇に挑む年だつた。だからこそ、練習に練習を重ね、相手の学校の研究もして、あらゆる準備をして臨んだはずだつた。だが、結局負けてしまつた。それは、全て自分の責任だ。もしも、自分があの時、フラッグ車での任務を放棄していなかつたら……。

「……」

「みほっ！」

とにもかくにも、今すぐ三年生の先輩たちに謝罪をしなければならない。彼女たちにとつて戦車道ラストイヤーを、こんな形で終わらせてしまつた責任を取らなければならぬ。そう思つたみほは、すぐさま起き上がりうとした。それに対して、まるでまほが焦つているかのような声が一瞬だけ聞こえた。しかし、みほはそれに構わずに自分の

上にかぶさつている布団を取り除く。その時、彼女はようやく自分自身の身体の異変に気がついた。

「え……？」

自分の下半身から、何かの管が伸びている。中を黄色い液体が流れていることから、これはおそらく尿道留置カテーテルという物であろう。

いや、それがあるのは問題ではない。この姉の反応からして、自分が何日間かは昏睡状態にあつたのだろう。それならば尿道留置カテーテルという物が入れられてもおかしくはない。だが、最も問題なのは、自分がそれを実際に目視するまで自分の体内にそれが挿入されているという事に気がつかなかつたことだ。大きな手術なんて一度もしたことのないみほにとって、尿道留置カテーテルなどという物を使用するなんて初めてである。だが、少なくとも自分の体内に異物が淹れられているのだから、何かしらの違和感がなくてはいけないはずだ。

それに、もう一つ不思議なことがある。さきほどから彼女は何度も起き上がるうとしている。しかし、いくら昏睡状態から目覚めたばかりと言つても、ここまで起き上がるのに失敗する者なのだろうか。まるで、自分の背中とベッドが磁石のS極とN極になつてているかのようだ。

これだけだろうか。いや、まだおかしなことがあつた。自分は、確かに自分の身体の上にあつた布団を取り除いた。しかし、どうしてだろうか。足が布団の質感を捕らえなかつたのだ。もう一度、みほは布団を自分の身体に被せる。やはりそうだ。木工用ボンドか何かでコーティングされたかのように布団の質感を足が捉えてくれない。そして……。

「ねえ、お姉ちゃん……」

「みほ」

みほは、自分の心がどうにかなりそうだつた。だから、唯一今日の前にいるまほに助けを求めてかつた。

「私、まだ悪い夢でも見ているのかな？」

「みほ」

「あのね、起き上がるがれないの。何度も力を入れて起き上がるうとして
も、すぐにまた倒れちゃう」

「みほ」

「それとこのカテーテルも……なんだろう、まるでこれが私の一部にな
なつているみたい」

「みほ」

「それからね、足の感覚もないの。ねえ、これって本当に私の足なの?
誰か、別人の足をつけられているんじゃないの?」

「みほ」

「それから、それからね……それから……」

みほは、その先が言えなかつた。ただ、怖いのだ。自分がその事実
を認めてしまうという事が、その現実を直視してしまうという事が、
その真実が、自分自身の人生を変えてしまうのが。

できれば、見て見ぬふりをしていたい。悪い夢だと思いたい。もし
も、これが悪夢で、目を覚ましたら、あの決勝戦の日の朝で、姉から
叱られたり、チームメイトから叱責を受けたり、作戦の最終確認をし
て、戦車に乗つて、でも自分の戦車道ができないという事にストレス
を感じて、そんないつもの日常を夢に見たい。

違う、これが夢だ。これが現実であるわけがない。現実だなんて認
めたくない。みほの声は、徐々に小さくなつていく。弱々しく、霞の
空に消えてしまいそうなその声をしかし、まほは一文字一文字を聞き
逃さないように耳の神経をとがらせる。だがそのみほの弱気な発言
は、彼女をも苦しめるのには十分すぎる物であつた。

「それから、それから、それから……それから……それから、
それ……からね……」

だから……。

「みほ……」

「ツ！」

まほは、ただ彼女の身体を抱きしめてあげる事しかできなかつた。
それでしか、彼女の心をつなぎとめることができないと、そう感じた

からだ。

だが、それでみほは確信した。姉の人肌が、その暖かい心が、優しさが、これが現実の事なのだと証明したのだ。だから、時期尚早だったのかもしれないが、みほはその現実を受け入れるしかほかなかつたのだ。その運命がたとえどれだけ辛いことであつたとしても、例えどれだけ受け入れがたい真実であつたとしても、胸の中に宝物のように仕舞い続けるわけにはいかないのだ。

みほは、その言葉を言つた。言つてしまえば、それを認めることになる。しかし、これ以上無視するなどできなかつた。だから、彼女は勇気を出して言つた。

「……動かないよお……足が、動かないよお、お姉ちゃん……」

「みほ……」

「痛くない、痛くないけど、つらいよ……お姉ちゃん」

その日、彼女は大事な物を二つ失つた。

「……ほさん、みほさん」

「……」

「起きてよみほ」

「……え？」

その二人の自分を呼ぶ声に、みほの意識は完全に覚醒した。目の前にいるのは華と沙織である。嫌な夢だつた。いや、もはやあの日の再現VTRを見ている気分だつた。ここ何日か、また戦車について考へる時間が多くなつたために見たのだろうか。しかし、今思い出しても心が痛む。あの後、医者から自分の現在の状態や、リハビリのメニューについての説明があつて、母とも会つて、父とも会つて、それから黒森峰の同級生たちもお見舞いに來た。だが、どれだけの人間に会つても彼女の心が救わることはなかつた。多分、一生付き合つていくことになる悪夢だ。果たして、この心の傷がいつ癒えることになるのか、それを知る物は自分も含めて誰もいない。

それにしても、何故二人がこのような朝早くに自分の部屋にいるのだろうか。

「どうして華さんと沙織さんが……」

「はい、実はまほさんに呼ばれまして」

「お姉ちゃんに？」

「うん、ほら選択必修科目の授業って今日からじやん。だから、みほに少しでもいいから辛い記憶を思い出してもらいたくないって、朝早くに出るつて言つてたの」

「それで、私たちがまほさんの代わりにみほさんの朝ご飯を作りにきました」

「そ、うなんだ……」

別に、一人でも料理はできるし、一人で学校にも行けるからいらぬおせつかいだつたのかもしない。それに、姉の心遣いも、少々度が行き過ぎていて気がする。

例え今日の朝に出会わなくとも、放課後にも、明日にも、明後日にも、いつかは会う時が来るのだ。なんだかまた自分と姉の距離が離れて行つてしまつたようにも感じる。このスレ違いは、あの黒森峰時代を彷彿とさせる出来事なのだ。なんだか、みほの心は寂しかつた。

二人が中に入つたのちしばらくして、彼女たちは西住みほと一緒に出てきた。姉の方は、どうやらいないらしいが、どうしたのだろうか。いや、そういうえば二人が来る少し前に一人の女性とすれ違つていたか。暗くて顔をよく見ていなかつたから分からぬが、もしかしたらあれが西住みほだったのかもしれない。

ともかく、学校へと向かう三人の後ろから、彼女もまた電信柱等に隠れながら追つていく。しかし、追つてどうなるわけでもあるまい。そもそも自分が臆病であるばかりに、このようにストーカーまがいの行動をしてしまつてているのだから。仲良くなりたい、しかもしも自分が仲良くなろうものなら、自分も彼女も嫌な気持ちになつてしまふかもしぬれない。だから、自分は彼女の側にいる資格はない。

「にしても、もう少し学校に近いところに寮はなかつたの？」

「えつと、何個かはあつただけれど、バリアフリー化がされているのがここぐらいしかなくつて……」

「やはり、みほさんのように車椅子の方のためには、スロープがどの施

設でも必要なのですね」

あの子たちのように、楽しげに話せるようになる自信がないのだ。戦車以外を話題に話している自分が想像できない。だから、自分はここから、後ろからただ眺めていればそれだけでいい。彼女の姿を見ているだけ、それだけで満足なのだ。

だから、もういい。そう彼女は思う。次第に、彼女と三人の距離が離れ始め、三人はある角を曲がつて行つた。いけない、見失つてはならない。そう、彼女は思い、大急ぎでその角を曲がつた。直角ともいえるターンで、その道を見た時、彼女の心はまるでシンバルを目の前で叩かれたかのように跳ね上がつた。

「私に、何か用ですか？」

西住みほが、確かにそこにいたのだ。

「見たところ、私達を入れて十九人ですか」

「少ない……が、仕方がないか」

朝早くに出ていたまほは、学校近くのコンビニで二、三時間暇をつぶしたのち、集合場所となつている倉庫の前にまで来ていた。

そこには、愛里寿を含めた戦車道履修者が集まつており、皆それぞれ知り合いと話し込んでいる様子だ。しかし、どういうわけか、制服を着ていない面々もいる。体操服や、何かのスポーツのユニフォームを着ている者が四人、それから一応は制服を着ている物の、何らかのコスプレに身を包んでいる者が四人。

果たして、ここまでバラバラのチームがまとまるだろうか。いや、メンバーの質など最初からあきらめていたようなものだ。そもそも戦車道のない学校で戦車道を復活させるのだから、戦車の事を理解している人間など少ないはずだ。その中で、自分や愛里寿、さらにみほがこの学校にいるなどは奇跡にも近いものなのだ。

「みほ……」

今頃、華や沙織と一緒に香道の授業に出ているのだろうか。今朝は、少しでもみほに戦車道の事を思い出させたくないから、一人勝手に家を出て行つてしまつたが、ちゃんと学校に来ているのかも心配だ。こうなつてしまつては、黒森峰にてすれ違つていた時と何ら変わらない。西住流として、隊長として、妹であるからと言つて甘やかしてはいけない。そう思つたからこそ自分は黒森峰では素つ気ない態度をとつていた。だから、その分この大洗では自分は姉らしいことをしてやろう、そう思つたのだが実際には姉らしいことをした結果またすれ違いが起こつてしまつた。まつたくもつて前途多難な始まりである。

そんな、まほのことなど露も知らない生徒会三人衆はまた別のことについて論議していた。実は、昨日杏が出向いた用紙の未提出の少女ばかりでなく、普通に選択履修用紙も提出していた二年の生徒がまだ来ていないのだ。用紙未提出である少女に関しては、自分はそも

そもそも『道』と名のつく物が好かないという理由のためどの授業も選択しなかつたらしい。授業を取らなければ単位を取得できないため、名前だけは戦車道履修者として登録はしているが、来るか来ないかに関しては保留している最中なのだとか。

「どうします？」

「いいんじやない？ 風邪とかで休んでるだけかもしんないし」

「分かりました。では、これより戦車道の授業を開始する」

「質問があります」

「何、愛里寿ちゃん？」

「この学校で戦車道が廃止になつて久しいらしいですが、そもそも戦車はあるのですか？」

「当時使用していた戦車が、どこにあるはずだ。いや、必ずある」

「……つまり、新しい戦車じやないという事ですか」

「保存状態が良ければいいのだがな……」

戦車道が廃止になつて何年になるのかは正確には不明であるが、経年劣化という物がある。雨風に晒されている場合は鉄等が腐食して脆くなつてしまふのだ。そのため、大昔に使用されていた戦車を使うというのは、かなりリスクがいるようを感じる。

「一応、今一輛はあるんだけど、見てみる？」

そう言うと、倉庫の重厚な扉が開かれた。もはや懐かしいとすら感じてしまう。この鉄のなんとも言えない香り、鏽の香りもする。やはり、かなりの年月が経っているのだろう。実際に近くで見てみないと分からぬが、まるで戦後に敗戦した国の基地に置かれている戦車のように遠くからでも鏽が見える。

まほ、そして愛里寿はゆっくりと戦車に近づいていく。だが、見れば見るほどに鏽がいたるところについており、履帶に至つては片一方はちぎれており、片一方は紛失しているようだ。なるほど、先ほど自分が敗戦国の戦車と思ったのはこれが原因だろうか。推測ではあるものの、この戦車は戦車道の試合の後にしかるべき修理をされずに放置され続けてきたのだろう。そうでなければ、履帯紛失等という事にはならないはずだ。だが……。

「装甲も、転輪も問題なさそうだな」

「ええ、履帯も右のは新しくしないといけないでしようが、こっちのほうは繋げれば……」

「鋸取りをして、古い塗装を剥がして……」

「行けそうですね」

「ああ……後はエンジンや車内の確認もしなければならないが、なんとかなるはずだ」

確かに見た目では廃棄同然ではある。しかし、その実装甲には大きな穴もなく、転輪も軸から折れているというところは見当たらない。整備をすれば、動かすことができるはずだ。それに、まほは感じるのだ。この戦車の心を。まだ、自分はやれる。まだ自分は走ることができる。そう言っているように感じるのだ。それは、単なる想像に過ぎなかつたのかかもしれない。しかし、戦車と長い間一緒にいたまほにとって、愛里寿にとって、その想像は真実であると、そう思つてしまふべく事であると思つていた。

「この戦車、何て名前だっけ？」

まほは、杏の言葉に振り向いた。

「ああ、これは……」

その時だ。彼女はその人物の姿を捉え、そして固まつた。

「まほさん？……あ

愛里寿も振り向いた。そして、同じく彼女の姿を見て固まつた。

「ん？」

そして他の戦車道履修者もまた振り向いた。しかし、その者を知っているのは、三人しかいなかつた。それは、この場所に来ることはないと思つていた少女。来ないで欲しいと思つていた少女。そして覚悟を決めた少女だつた。

この学校に来た時から感じていた。自分の事を凝視するような視線を、それから人の気配を。けど、悪意のような物じやない。背筋が凍るほどの気持ち悪い目線などではない。果たして、いつたい何者なのだろうか。

今日もこんなに朝早くから誰かの視線を感じる。こつそりと後ろを見ると電信柱に隠れながらこちらに目線を向けている少女がいる。おそらく、あの少女がそれなのだろう。

「みほさん、どうしましたか？」

後ろを気にしているみほの事を心配したのか、車椅子を押してくれている華がそう言ってくれる。みほは、後ろの少女に気がつかれていないことを確認すると小声で「一人に言つた。

「しつ……誰かが後ろの電信柱から見ている」

「え？ 何それストーカー！？」

「違うと思うな……でも、ちょっと話ををしてみる。そこの角を曲がつて、二人はちょっと離れてて」

「大丈夫ですか？」

「うん、多分大丈夫」

そして、みほの言う通り、三人は曲がると、そこで華と沙織は離れる。

「みほ、何か変なことされたら大声で助けを呼んでね」

「大丈夫だつて」

「お気を付けて」

「うん」

その言葉の後、二人は物陰に隠れ、その姿は見えなくなつた。みほは、一人で車椅子を回転させ、その少女をの事を待つ。そして数秒後、やはり少女は現れた。

「私に、何か用ですか？」

シフォンショートヘアの少女、身長から察するに同じ二年生であろうか。曲がり角を曲がつて、もつと先にいるであろう自分がこのように近くにいるのだから、その驚いた表情を見せるのは無理ないだろう。みほは、その顔から彼女が人畜無害であることを察した。

「え、あ、あの……」

まるでハムスターのようにおどおどとして、これを小動物系というのだろうか。みほは、その少女に何かシンパシーを感じてしまう。まるで自分に自信がないような、そんな風に見える。

「貴方、名前は？」

「わ、私は普通二科、二年C組の秋山優花里といいます！」

「秋山、優花里さん？」

「はい！え、えつと……私は……その……」

明るかつたはずの少女はしかし、しだいにろうそくの炎が小さくなつていくように小声となつていった。そして言う。

「去年の戦車道全国大会を、見ました」

「え？」

「私は元々戦車というか、ミリタリーオタクで、それで戦車道にも憧れていて、試合もよく見ていたんです。それで、西住姉妹殿が大洗に来るつて聞いて、私にとつてまほ殿もみほ殿も……憧れの存在で、でも私……私が話しかけると、みほ殿にいやな記憶を思い出させてしまうかもしれませんくて、だから……私は……」

「……」

それだけ聞いて、みほは察した。この少女は、嫌われることが怖いのだろう。ミリタリーマニアという物は、男性の人数は多いものの、女性の人数は少ないのだ。特に戦車道の授業のなかつたこの学校において、彼女の孤独もまた人一倍であつたと考えられる。その中で、自分の事を受け入れてくれる可能性を持つた自分が転校してきたり。しかし、その自分は戦車に、戦車道に対してトラウマを持つている。あの試合を見ていたからこそ、彼女は自分と話すことができなかつたのだろうと思う。けど……。

「ありがとうございます。気を使つてくれて……」

「え？あ、はい……」

「でも、それは理由になりません」

「え？」

思えば、あの試合で自分はどれだけの人を悲しませたことだろう。戦車道を愛している人達、戦車道をしたいと思つている人達、戦車道にあこがれを抱いている人達。それら全ての人たちの心に、決して消えることのないであろう不安を残してしまつた。そして、自分はその一番の中心にいる人物であるというのに、たつた一人逃げ出してし

まつた。いや、逃げ出して当然であつたのだ。逃げても誰も文句は言わない。ただ一人、自分の中にいるソレだけしか文句を言う資格はないのだ。自分が自分の心の中に眠つてゐる、戦車が好きであるという、楽しい思い出があるというこの気持ちだけが。

「確かに、私は……戦車の事を考えるだけでも、戦車のエンジン音を聞いただけでも、今でも身体が身震いするほどだけど……でも……。何か行動を起こさないと、誰も何も言つてくれない。逃げてばかりじや、一步も前に進めないんです」

「みほ殿……」

「確かに、怖いのかもしれない。傷つけてしまうのかもしれない。でも、それでも私と友達になりたいという気持ちが本当の事なんだつたら、怖いとか、恐れとか、そんなの乗り越えてでも前に進むべきです」

「……」

みほは忘れていた。自分にはもう一度戦車に乗る義務があるのだ。戦車道が楽しいものであるという事をもう一度証明する義務があるのだ。だが、確かにそれは義務ではあるが強制されている物ではない。だから、無視して逃げ続けてもいい。自らの足で逃げ出せばいい。人はどうしても立ち止まってしまうようなことがある。恐れや恐怖で立ち止まることがある。だが、本当はそれで正しいのだ。痛む足で歩んでも悪化するだけ。骨折した手で殴り続けても、自分の心が痛いだけ。ならば、一度立ち止まろう。立ち止まつてしまえば、そこで休むことができるのだから。だが、立ち止まつたのならもう一度歩き始めなければだめだ。立ち止まつたまま、一歩も歩こうとしないのは、それは逃げることと同じなのだ。顔を上げろ、前を向け、立ち上がり、例え足が動かなくても、例え歩くことができないほどにズタボロにされたとしても、足がなかつたら腕がある。腕がなかつたら身体がある。心がある。前に進むという気持ちを持つていなければ、人は生きる意味も価値も失つてしまうのだ。だから、歩く。歩いていく。今を生きていく。それは、同意義でなければならないのだ。死なない限り、人は自らの心の足で歩むことができるのだ。

「優花里さん、一緒に来てください」

「え？」

「……五十鈴さん、武部さんもういいですよ」

かくれんぼで遊んでいるかのように、みほは二人の名前を呼んだ。すると、二人はすぐに現れた。そして、みほは言つた。

「五十鈴さん、武部さん、優花里さん……私は……」

そして、場面はあの倉庫内部に移つた。まほや愛里寿達の眼に映つた物、それは車椅子に乗るみほと、それから五十鈴華、武部沙織、そして秋山優花里の姿があつた。みほは、一人車椅子を漕いで、戦車の目前、まほの目の前にまでやつてくると言つた。

「IV号D型……まだ走れそう」

「みほ……」

「お姉ちゃん。私、もう立ち止まりたくない。自分に負けたくない。私のために、私のせいで大勢の人たちに与えてしまつた戦車道の悪いイメージを払いたいの」

「……」

「戦車道は、人を傷つける物なんかじゃない。人を育てる物だから、楽しむものだから、それをみんなに教えたいために、それができるのは、戦車道を傷つけた私の役目だから」

「みほ……」

思えば、どうして戦車をトラウマとしてしまつたのだろう。確かに、自分は戦車に乗っていた生徒たちを助けるために川に飛び込んで、こんな大怪我を負つてしまつた。けど、戦車は関係ないのだ。あれは、ただ単に運が悪かつただけなのだ。タイミングが悪かつただけ。もしも、もう少し時間がずれていたら、流木に当たることはなかつた。それに、自分はあの事によつて二つの物を失つた。身体の機能、それと戦車道を楽しいと思う気持ちだ。身体の機能はどうあつても取り戻すことはできない。しかし、戦車道は取り戻すことができる。自分の心持一つだけで、取り戻すことができる物なのだ。

人の心の中のトラウマは、他人が介入しただけで解くことのできない大きな傷だ。例え、九十九%取り除いたとしても、たつた一%残つ

た物によつてどれだけでも傷を広める結果になつてしまふ。その一
%は、決して取り除くことはできないなぜならば、トラウマとは所詮
記憶なのだから。記憶は決して消えることのない、思い出と同じだ。
忘れたと思つても決して忘れることのない鍵のかかつた部屋。それ
が記憶、思い出、トラウマなのだ。なら、どうすればいい。決まつて
いる。トラウマもかすむほどにいい思い出を作ればいい。誰にも文
句を言わることのないまごうことなき思い出を作ればいい。逃げ
たらトラウマはより大きくなつていくだけ。向かえば、トラウマは小
さくなる。それが、人の記憶なのだ。それに……。

「私は、作りたい。トラウマもかすむほどの思い出を、みんなと……お
姉ちゃんと」

「みほ……ああ」

まほは、みほから差し出された手を取つた。その手は、暖かかった。
太陽をその手で掴んだかのように暖かく、気持ちよかつたのだ。それ
は、まるで幼い頃のようだ。幼い頃、ただ戦車道を楽しんでいたころ
のようだ。そうだ、もしかしたら自分は戻りたかったのかもしれない
。戦車道がない姉妹ではなく、戦車道と一緒に楽しんでいたあの
幼い頃の自分たちに。西住流として等関係ない、二人で楽しく戦車道
をしたかったのだ。この学校だつたらそれができる。勝利にこだわ
らない西住流じやない、西住まほとしての西住みほとしての戦車道が
できるかもしねれない。

ここは大洗学園艦。たくさんの人の思いを、未来を運んで大海原を
突き進むたくさんある学園艦の一つ。この船で人は、数々の知識を得
る、数々の人々と出会う、そして数々の思い出を持つて生きていくの
だ。

戦車、乗ります

2—1 謝辞

「そう言つわけで、西住みほ。戦車道を履修します」

「同じく、みほさんと戦車道を履修することになった五十鈴華です」「武部沙織です！よろしくお願ひします！」

元々、香道を選択していた彼女達ではあつたが、しかし最終的にはこの戦車道に腰を下ろすこととなつた。一度選択した授業を変えることができるのかと疑問に思うが、しかしこの学校はかなり自由な校風らしく、そのようなことは造作もない事らしい。こうして、彼女たちも含めて合計二十四名（内一名無断欠席）にて戦車道の授業は進められることとなつた。

「よろしく。んじゃ、これから何をするんだつけ？」

「……、これから、自身の乗る戦車を探しにいってもらう」

杏の言葉に、桃がそう答えた。どうやら、本当に戦車を探しに行かせる気らしい。しかし、本当に戦車はあるのだろうか。それが一番の心配だ。すでに愛里寿が聞いたことではあるが、まほはもう一度聞いてみることにした。

「戦車があるという保証はあるのか？」

「前の学校で戦車道をしていたお前なら知つてているだろうが、戦車を廃棄する際にはそのための書類が必要となる」

「ああ……そうだな」

「しかし、戦車道が廃止となつた当時に、その旨の書類が提出されたといふ記録は残されていない」

「なるほど、だからこの学園艦のどこかに戦車が隠されている。そういうのだと考へるのだな」

「そういうことだ」

戦争に使われないとはいゝ、戦車が危険なものであるという事は変わらない。そのため、戦車を破棄、もしくは売却する際にはその旨を記した書類を戦車道連盟に提出する必要がある。だがその記録が残

されていないとするならば、彼女たちの言う通りこの学校のどこかに戦車が隠されている可能性が浮かんでくるのだ。その書類を制作する担当者がものぐさだつたというだけという可能性も残されてしまうものの、しかしこれは有力な手掛かりとなりうる。

「それに、実は戦車を見たっていう目撃証言も生徒会に入っているの」「だつたらその場所に案内してもらえば」

「でも、正確な場所は覚えていないって」

「あつ、そなんだ……」

柚子の言葉に沙織が反応したものの、返す刀での即答がさく裂した。だが、少なくとも一輛はどこかにあるという事は分かつた。最悪、足りなければ母から資金提供してもらえば戦車はなんとかなるかもしれない、と愛里寿達は思っていた。

「そんじやま、皆頑張つて探ってきてね」

「明後日までに戦車道の教官がお見えになるので、それまでに四輪探し出すこと……では、捜索開始」

「ほら、行こう愛里寿」

「うん、梓」

という桃の言葉で、しぶしぶ外に出て行く戦車道履修者たち。愛里寿もまた、梓と呼んだ少女に連れられて出て行つた。愛里寿の友達らしきところを見ると、おそらく一年生なのだろう。

倉庫には、みほやまほ、みほの友人二人と、生徒会三人衆のみが残された。と、ここで沙織が言う。

「聞いてたのとなんか話が違う」「ん？」

「戦車道やるとモテるんじゃなかつたの？どうして戦車を探すつていう話になつてんの？」

はつきり言うと、戦車道を履修するだけでモテるのだったら、世の中の女性たちは皆戦車道をしている。あと、もしかしたら男子も無理やりしている可能性すらもあるだが、そんながつかりしている沙織に向かつて杏が言う。

「明後日かつこいい教官が来るから」

「本当ですか?！」

「ほんとほんと、紹介するから」

「行つてきまーす！」

と、沙織は嬉しそうに走つて出て行つた。だがそれでいいのだろうか。第一、先ほどの杏の言葉は男性にだけ当てはまる言葉じやないことにまだ沙織は気がついていない様子だ。いや、というか戦車道は女性のみが行う武道である。そのため、来る教官というのは十中八九……。この事実は、伏せておくべきだろうと、まほは判断した。

「お姉ちゃん、私達も行こう

「ん?……ああ、そうだな、みほ」

みほに促され、まほもまた外に出ようとしたその時だつた。後ろから、生徒会長の杏の声が聞こえる。

「あつ、妹ちゃんは残つてて」

「え?」

「はい?」

妹ちゃん、というのはおそらくみほの事である。杏はさうに言う。「妹ちゃんは、戦略アドバイザージゃなくて、戦車に乗つてくれるつてことでいいんだよね?」

「え? あ、はい」

「ならば、それなりに戦車内部の構造を変えなければならない」

その桃の言葉に、まほは納得した。足が不自由なため踏ん張ることができず、少しの衝撃でどこに飛ばされるのか分からぬみほの身体を固定するための機材等を取り付けたり、他様々なオプションを付けなければ満足に戦車道を行うことはできないだろう。彼女たちもまたそう考えていたようだ。

「とりあえず大まかな設計は工学部や自動車部の人たちでできているから、あとはみほさんに合わせた微調整が残つてるの」

「それと、時間短縮のためその機材は現在見つかっているこの戦車に合わせた物しか作れなかつたため、お前には必ずこの戦車に乗つてもらう」

「と、言うわけでちょっと一緒に来てくれる?」

「わかりました。お姉ちゃん、お姉ちゃんは武部さん達と戦車を探してもらつてきてもいいかな？」

「わかつた、すぐに戻つてくるから」

「うん」

みほの安全を考えるとしようがないことなのだ。そうまほは思つていたし、それに自分達はこれからどこにあるのかもわからない戦車を探しにいくのだ。もしかしたら車イスでは不便な場所にあるのかかもしれない。その危険性を考えたら、みほは一緒につれていくべきではないだろう。まほは、生徒会三人衆にみほを預けると一人、倉庫のそこで待つている沙織たちのもとに向かつた。

「んじや、河島たちはここで連絡待ちね。私は妹ちゃんと一緒に自動車部のところにいつてくるから」

「わかりました」

「んじや、いこうか妹ちゃん」

「あ、はい」

みほは杏にそう返事をした。それと同時に、杏はみほの後ろに回り込み、車イスのハンドルを持ち、ゆっくりと押し始める。

「結構重いねこれ？妹ちゃんつてもしかして……」

「ち、違います。元々車イスが重たいだけで別に太つてる訳じやありません！」

「そつかそつか、いや私はてつきりお腹に子供でもいるのかと」

「そつちですかって、そつちの方が失礼ですしありえないですよ！」

車椅子は、軽い物であれば 10 kg ほどの物があるが、みほの使用している車椅子は 15 kg ほどの物。少々重いかなと思えるぐらいの重さはある物の、そこに人の重さが加わると、動き始めるときに少しだけ強い力で押さなければ動かない。動き始めれば後は楽であるのだが、やはり押し始める時には安全性に対しても注意を払わなければ乗つている人間に危害が及ぶ可能性がある。そう考へると、杏はかなり簡単に車椅子を押しているような気がするというのが、みほの簡単な感想であつた。

二人は、倉庫から少しだけ離れた場所いる自動車部の下に向かうた

めの廊下に入っていた。そこには人の影はなく、広い廊下であるというのに一人だけあるため、少しだけ寂しく感じてしまう。そんな中であった。

「……妹ちゃん」

「？……何ですか？」

ゆっくりと停止し、ブレーキをかけた杏は、みほの目の前に回つたのだ。一体どうしたというのだろうか。

「え？」

みほが何かしらの理由を考え出そうとした瞬間、杏子は無言でみほの身体を抱きしめた。その身体は、何となく暖かかく感じた。サツマイモらしき、ちょっと甘い匂いを感じる。

「生徒会長？」

「……戦車道を履修してくれて、ありがとうね」

「え？」

杏は、それだけを言うとみほから離れる。今の言葉、ただ戦車道を履修してくれたことに対するお礼というわけじやなさそうだ。嬉しかった、ただ自分が戦車道を取つてくれたことに対して本当に嬉しかったというような、そんな感情が見て取れた。それほど自分が戦車道を履修したことが嬉しかったのだろうか。しかし、自分の他にも黒森峰の隊長だつたまほや、島田流家元の娘である愛里寿もいるのに、どうして自分にそんな感情を向けてくるのか、今のみほにはよくわかつていなかつた。

「さつ、行こつか……自動車部の作業場までもう少しだから」

「は、はい……つて連れて行つてくださいよ！一人残されても困ります！」

「ああ、ごめんごめん」

そしてまた二人は歩き出した。みほが、この時の杏の行動の真意を知ることになるのは、もうちょっと先の事となつた。

2—2 戦友

「探せと言われたものの……」

「……」

「ど、にあるつていうのよおおおお!!!!」

テニスコート脇にある駐車場、沙織の叫び声は大きく響き渡つていった。だが、確かに沙織が叫びたい気持ちもわかる。なにせ学園艦はかなり広いのだ。黒森峰に比べればまだ小さいが、それでも全長約七・六キロ、横幅は約一・七キロ、そこに船底も加えればさらに搜索範囲は広がってしまう。その中から明後日までに戦車を見つけろなど、あまりにも無茶苦茶な話だ。

「駐車場に戦車は停まつてないかと……」

「だつて一応は車でしょ？あつてもおかしくはないじゃん」

いや、目撃情報がないという事から、そのような目立つ場所に置かれているとは考えられない。駐車場などという多くの人間が見ることができるような場所に置いてあるのだとすれば、最初から生徒会役員たちがあの倉庫にまで持つてきてるはずだ。そのためまほは、十中八九駐車場に戦車は停まつていなかろうという確信を持ちながら彼女たちについてきた。ならば何故止めなかつたか、と言われてしまえば、正直この学校の事をあまりしならないため、学校内の見学もしたいと考えていたからだ。それにして、駐車場の横にはテニスコートがあるのだが、ここから勢いよくボールが飛び出して車が傷ついてしまうという事はないのだろうか。もちろん高さのある網によつてそれなりの工夫はできてはいるだろうが、それでも自分のように素人がボールを打つたとしたら、かなりの高さまでボールは飛んでしまう。とまあ、ある意味どうでもいいことを考えていた時であった。優花里が声をかけてきた。

「あのまほ殿」

「ん、なに？」

「いえ、そのまほ殿は、どこに戦車があると思いますか？」

「……そうだな」

まほは考える。人目に付かない所に戦車があるとすれば、まず学生が使うような道路や施設の近くにはないだろう。つまり、学内や街中のほとんどの場所が候補から外れることになる。となると残るのは船底かもしくは学校の裏手にある森の中という事だろうか。

まほは、倉庫の中にあつた戦車の外観を思い出した。確かにあの戦車はかなり傷ついていた。まるで試合の後に廃棄されたかのように。もしも、戦車道がなくなつた年に試合が始まる前から戦車道が無くなるという事が決定されていて、そして最後の戦車道の試合がこの大洗学園艦の上で行われていたとするならば戦車を乗り捨てた、もしくは乗り捨てざるを得なかつたという状況を仮定したらどうだろうか。すでにいらなくなるという事が決まつてているのだから、学校側が戦車を運んでくれるよう手配してくれていなかつたため、帰つてこれらの車輛だけが倉庫に帰つてきて、残つた車輛が森に撃ち捨てられてしまつているという事も考えられるのではないか。ならば、今自分たちにできることは、最も可能性の高い場所を探つてみる事だけだ。

「森に行こう。そこに戦車があるのかもしれない」

「そうだね、何とかを隠すには森の中つていうしね」

「それは同類の物を隠す場合の言葉です」

まほたち一行がそんなこんな理由で森に向かつて行つたそのころ、愛里寿達一年生組はと、アグレッシブルな他のチームとは違つて図書館で戦車道に関連する資料を探すことから始めていた。

「使つていた戦車の記録見つかつた？」

大量の本を抱えた梓がそう言つた。しかし、その場にいる面々の顔から察するに結果は思わしくないものようだ。

「戦車の『せ』の字もないよ」

「家の学校が戦車道辞めた時からさっぱり」

「これは、探すのに手間がかかりそうですね」

と、眼鏡をかけたツインテールの少女大野あや、茶髪のショートヘアの少女阪口桂利奈、そして愛里寿がそう答えた。やはりこの学校は長年戦車道から離れていたために、それに関係していた図書も建物の奥底に眠つてしまつてゐるのだろう。あやは、戦車に関する記述が

内とは言っていた物の、少しは戦車道について記述の有る資料はあった。しかし、今回戦車を探すにあたっては必要のないものばかりで、有効に活用できうるものは存在していなかつた。

「なんで突然戦車道止めちゃつたのかな？」

「やっぱ人気なくなつたんでしょ昔っぽいから」

「そつか～」

と、宇津木優季と山郷あゆみは言つた。昔っぽい、まさにその通りだ。なにせ戦車道で使つてゐる車輛は、主に第二次世界大戦中かそれ以前に使用していた兵器であるのだからそう言われてしまうのも仕方がない。母も言つていた。現在のレギュレーションでは第二次世界大戦末期、つまり1945年までの戦車が戦車道の試合で使用できるという事になつてゐる。これは、戦車の性能が後年上がり続けるため、それ以降の戦車までも参加が可能になつてしまふと金銭面で潤いのないチームには不利となつてしまふからという問題に繋がるからだ。1945年までは、それなりに性能の差はある物の、それは些細なものである場合が多く、知略と策略を用いればどうとなる差であるから1945年までの戦車での参加は認められているのだ。

だが、この終戦までの戦車という規定を作つてしまつたことにより戦車の種類が頭打ちとなり、結果的に日新らしいものが無くなつてしまつてゐるのだとか。

「もう少し探して何も出なかつたら、外に……」

「……」

「え？」

その時、なにやら漫画らしきものを見ていた丸山紗希に袖を引っ張られる。そういえば、いまだにこの少女の声を聞いていないが、無口なのだろうか。

「何ですか？」

「……」

紗希は、何も言葉を喋らずに一枚のノートの切れ端らしきものを愛里寿に手渡す。どうやら、紗希が見ていた漫画のページに挟まれていたようだ。このタイミングで渡してくるのだから、なにか重要な手が

かりでも書いていたのであろうか。愛里寿は、ゆっくりと中を開いてみてみる。

「何々？何が書いてあるの？」

「愛里寿？」

「……どうやら、日記の一ページみたいです。読みますね」
上から下まで、愛里寿はゆっくりと読み進める。

『〇月×日 今日、私たちの戦車とお別れになつた。ゴメン、最後の試合に勝てなかつた上に、この場所に連れて帰れたのはあなたと、もう一輛だけ。他の子たちは、離ればなれになつちやつた。廃部が決まつちやつて、もう皆を車庫に戻すお金も使わせてくれないんだつて。私達が弱かつたから、もしも私たちが強かつたらこんなことにはならなかつたのかな。もつと、あなたたちと、皆と一緒に戦車道をしたかつた。私達がいなくなると、あなたもきっと寂しくなるよね。大丈夫、あなたは、私達での子たちの所に連れて行くから。だから寂しくないよ。あの子たちのように死んじやう、なんてことはないと思うけど、それでも私は心配だから。私はこの大洗を離れちやうけど、またいつか戻つてくるから、それまでさようなら……』

愛里寿は、すこしだけホツとした。少なくともこの日記を書いた人は、戦車に愛着を持つたまま戦車から離れてくれたのだ。戦車道が無くなつてしまふことに對して、誰もが賛同したわけではないのだ。最後まで抵抗して、最後まで戦車道を愛してくれたまま離れてくれて、それだけで何となく愛里寿は救われたような気がした。

「連れて帰れたのはあなたと、もう一輛だけ……つまり帰れた戦車は二輛つてことだよね」

「でもさでもさ、車庫には戦車一輛しかなかつたよね」

「だよね……この人が乗つっていた戦車はどこに行つちやつたんだろう

……

確かに、それもその一輪はかなりボロボロとなつていた。この日記から察するには、やはり最後の試合が終わつた後にそのまま放棄されてしまつたようだ。それを車庫に戻すお金も使わせてもらえないかつたという事は、つまりは移動させるためのお金がなかつたという事、

大洗学園艦から外に出そうとするのならば撃破された場所から移動させなければならない。つまりそれぞれ撃破された場所にそのままになつてゐる可能性が高い。それに……。愛里寿は言う。

「これは私の想像ですが、車庫にあつたIV号D戦車はボロボロでした。という事は、この人が搭乗していた戦車もまた、IV号Dと同じように満身創痍で帰つてきた可能性が高い……その状態で遠くに戦車を自力で移動させるのは無理がある。つまり、もう一輛の戦車は、この学校の敷地内、もしくは学校に近い場所に隠してあるのではないでしょうか？」

「そつか！」

「愛里寿ちゃん頭いい！」

「それほどでもありません」

愛里寿は、今まであまり母親以外に褒められたことがなかつた。と いうよりも、褒められるとは感じていなかつた。そのため、彼女たちに自分の考えを褒められ、少し嬉しかつた。

「でも、一体どこにあるのかな……」

「この日記によると『あの子たち』の所にいるつて書いているから、何かが複数個はある場所なんだよ。多分命のある……それにこの文面からすると、この子が帰つてくるまで待つててくれる場所、つまり長い時間置いておける場所かな……となると、候補はかなり絞られてくるはず。この学校の地図つてどこにあつたっけ」

「確かに、生徒手帳にありましたよね？」

梓の言葉に、愛里寿は胸ポケットにしまつていた生徒手帳のページを開く。そこには、この学校の最新版の案内図が書いてあつた。改めて見るとかなり大きな学校だが、果たしてこの学校のどこに戦車があるというのだろうか。

「うわっ、広ーい……」

「しらみつぶしに探すにしても時間がかかるよ……」

「見かたを変えてみるの。まず、車庫や校舎の中にはない。それに校門裏門周辺は人通りも多いから、もしあつたとしても目撃証言が出てるはず。それにこの子は戦車の事を友達、ううん戦友のように考えて

いたんだと思う。なら、雨風に晒されるような屋外には置かないだろうし……」

「……」

愛里寿は思わず感心してしまった。梓の判断能力、発想力は自分に迫る物がある。いや、磨けば自分すらも超えて行ってしまう可能性すらある。それに、優しさもある。彼女は戦車長に向いているだろう。恐らく、自分や西住流の二人がいなかつたら、彼女を中心にチームが動かせるほどに成長することができる。その片鱗を少し、のぞかせていた。

「ねえ、愛里寿はどう思う？」

「え？……そうですね。でも学内だと部活動や掃除などで、生徒は必ず立ち寄りはするだろうから、学内での目撃証言がないのは変……周囲の景色に同化して目立たなくなつた？」

「そつか、あまりにも自然に置いてあるから、誰も不自然に思わなくなつたんだ。でも、もしもそうなならなおさら見つけ出すのは難しいな……」

「ええ、嘘お……」

「ここまできて最初から出直し？」

梓、愛里寿、そしてもう一名以外はその梓の言葉にため息をついた。最初から出直し？本当にそうだろうか。少なくともこの学校内にあるという可能性があるのだ。最終的には虱潰しを探すという手もあるが、他になにか見過ごとしているようなことはないだろうか。

いや、なにか必ずあるはずだ。この日記の中に手がかりが、その場所のヒントがあるはずだ。日記の中出てくる登場人物は、『私』『あなた』『他の子たち』『皆』それから『あの子たち』である。『私』はもちろん日記の執筆者であろう。『あなた』は、この日記の執筆者の搭乗していた戦車。『他の子たち』それから、『皆』というのは、『あなた』以外の戦車であろう。ならば、『あの子たち』とは何なのだろうか。他に戦車道をしていた人達だろうか。いや、そうであれば『あの子たち』ではない。『私』は、『あなた』に愛着を持つていたはずだ。それならば、側に置いておけるのならば自分のすぐそばに置いておくだろう。

それに『あの子たち』のように死ぬというのは一体どういうことか。まるで、なにか惨劇のようなものがあつたかのような言い分である。そう、それこそ十年前にあつたあの惨劇のような何かが。だが、もしそんなものがあるとするならばどこかに痕跡があつたり、母からそのような話が転校前にあるはず。では一体何なのだ、この死ぬという一文は……。

「……」

「え？」

その時だ、隣にいた紗希が愛里寿の肩をツンツンと指で触れた。愛里寿が紗希の方を向くと、彼女は何も言わずにただ生徒手帳の地図のある場所を指さした。

「紗希さん、ここが気になるんですか？」

「……」

「え、でもここって……」

「ほぼ毎日誰かが一度は見てている……つていうか、絶対に中に入つたりしているじやん、ありえないでしょ」

「……ううん、可能性はあるかも」

「え？」

「愛里寿が言つたでしょ。あまりにも周囲の風景に同化しきっている可能性があるつて。ここだつたら暗がりで、傍から見てもオブジェや置物のように自然に溶け込んじやつていたつて可能性も……」

「ええ、それにこつだつたら、日記の気になつていた一文にも納得がいきます。もしも『あの子たち』がこの子たちだつたとすれば、こんな書き方をしたのにも合点が付く……」

「行こう皆……この子の友達を迎えて！」

「「「うん！」」」

「はい」

「……」

「それじゃ、まずはこの山積みになつた本を元あつた場所に返そう

「はい」

「紗希その本借りるの？」

「……」

愛里寿達は本を元にあつた場所に返却し、紗希は呼んでいた漫画、恐らく戦車に関する漫画であろう物を借りると、図書館を出てその目的地へと向かっていった。

2—3 難解

「ついたよ~」

「ここが……自動車部の工場ですか？」

みほは、自動車部の使っている工場であるのだから、てっきり車屋さんにあるようなこじんまりとしたものであろうと思つていた。しかし、来てみると三階建ての建物で、まるで一つの大きな工場であるように思える。こんな大きな工場、本物の自動車を組み立てるような工場であればあっても分かる気もするが、ただの学校の一つが持つには少々手に余るような気がする。

「そう、でも調べたところによると、この学校に戦車道の授業があつたころには、ここで戦車の大掛かりな整備をしていたらしいよ」

「そつか……」

いらなくなつた工場がそのまま自動車部に送られたという事が。それにしても、車庫を外から見た時も思ったが、この学校に戦車道があつた時は、学園艦全体で戦車道をサポートしていたのではないだろうか。巨大な車庫が五つに、ここまで巨大な整備工場を持たせてくれるのだから。この施設だけ見れば、中堅校よりもすこし待遇がいいぐらいの規模だろう。ここまで施設があるのだから、それを受け継いだ自動車部はさぞかし嬉しかつただろう。

「その子が西住みほちゃん?」

「あなたは?」

「私は、自動車部三年、中嶋悟子。よろしくね」

オレンジのツナギを着た黒髪のショートヘアの女性が工場の奥から現れた。なるほど、見た感じ工場で働いている人間のように見える。彼女が、戦車の整備や補助具の制作を一手に引き受けてくれるのだろう。

「そんじや、妹ちゃんを置いていくから、後はよろしく。他の戦車が見つかつたらこっちから連絡するから」

「了解。それじゃ、手はず通りにね」

「じゃあね、妹ちゃん。またあとで」

「はい」

そう言つて、杏はもと来た道を帰つていった。中嶋はそれを見送つた後、みほの背中に手を当て言う。

「それじゃ、補助具の大体の設計図は工学部からもらっているから、あとは身長とか体重とか測つて微調整したり、工学部の人にも追加で頼まないといけないものがあるかもしれないから、それについても聞かないとね」

「はい」

そして、中嶋はみほの車椅子の取つ手を持つて進みだす。その途中、そういうえばと中嶋がみほに言う。

「ねえ、みほちゃんの足つて……川に落ちてそうなつたんだってね」「え……はい……」

生徒会から聞いていたのだろうか。まあ、車椅子の少女のために戦車道の部品を取り付けなければならぬとなるのだから、何故みほが車椅子生活をしているのかについての説明をした可能性がある。中嶋は、それだけ言うと後ろからみほに抱き着いて明るく言つた。

「ねつ、車椅子の改造案があるんだけれど、試してみない？」

「え？いや、その……」

「いつ川に落ちても大丈夫なように色々と取り付けて」

「いや、その前に落ちない方法とかは……」

「ほら、車とかにもエアバッグとかあるじやん。ああいうのを付けてさ」

「あの、私はこれでも十分ですか。というか、話を聞いてください！」

自分の事を色々と考えてくれる先輩で、頼もしくはある。しかし結局、車椅子の改造は自動車部の範疇を越えてしまつてはいるではないかというツッコミができたのは、かなり先の事となってしまった。

一方そのころ、山へと続くであろう森の中で、地図を確認しながらまほたちは進んでいた。しかし、森というのは学内よりも入り組んでいるうえに視界が悪い。そのため、戦車探しは困難を極めていた。

「これは、かなり手こずるな……」

「はい。せめて何か目印になるようなものがあれば……」

そう、優花里が言つたその時、華が突然立ち止まつた。

「どうかした？」

「……」

華は、沙織の言葉を耳にしながら、何かの臭いをかぎ分ける犬のように鼻を動かす。

「あつちからかすかに匂いがします……」

「匂いで分かるんですか？」

「花の香りに交じつて鉄と油のにおいが……」

「華道やつているとそんなに敏感になるの？」

「私だけかもしませんけど……」

そういうえば、彼女は華道の家元の娘であるとみほから聞いた。分野は違う物の、彼女もまた自分たちと同じようなものなのだろう。だからわかる。自分たちも彼女と同じように戦車に関連したことには急に敏感になり、荒野を進む戦車のエンジン音や履帯の音で戦車の種類が分かるようになつてきているのだから。彼女もまた、長年花の匂いを嗅いでいたので、逆に花以外の臭いがあるのに違和感があるのだろう。

優花里は、一度まほに目配りをした後に華のいる方向を指さして言った。

「ようし、パンツァー・フォー！」

「パンツのあほお!?」

あまりにもテンポのいいボケに、自分と優花里はよろけてコケかけた。

「パンツァー・フォー……戦車前進という意味のドイツ語で、まあ戦車用語の内の一つだ」

「へえ、そなんだ……」

思えば、この子たちはこういった戦車道をする者にとって基本的なことできえも知らないのだ。今後戦つていく上でこのような戦車道の用語は少しづつ覚え、使つて行つた方が作戦の立案や指揮が円滑に進むので、これもまた今後の課題になるだろう。

ともかく、華の指示する方向へと四人は歩を進めた。やはり道はどんどんと険しくなっていく。みほを連れてこなくて正解だつただろう。どうしてだろうか、戦車から離れたくて大洗に来たというのに、戦車がすぐ近くにあるというだけでここまで嬉しくなつてしまふのは。やはり、自分はどれだけの綺麗事を言つたとしても戦車を捨てきれないのだろう。みほと暮らすにあたつて、戦車から一切離れた生活をしたもの、少しばかりの虚無感を感じていた。それは自分の消失。戦車というアイデンティティを消失してしまつたために自分の中に去來した空っぽのプラスコ。自分の中では、それをみほという最愛の妹によつて満たしたと考えていた。しかし、改めて戦車と接したことで、それがただの自己満足であり、戦車が切つても切り離せない存在であることを思い知らされた。戦車だけが我が人生、戦車だけがわが命、戦車だけが、我が樂しみ。いや違う。きっと時間が足りなかつただけだ。もつともつと、みほど一緒にいる時間があつたら、自分にとつてみほは戦車以上の存在にできたはずだ。それが普通なのだから。それが、姉妹として圧倒的に通常な関わり方なのだから。それに気がつくのが、ただ遅すぎているだけなのだ。きっと。

「あ、ありました！」

優花里のその言葉にまほの意識は現在の彼女の身体へと戻つてくる。前を見ると、少し広まつた場所に一輛の戦車が鎮座している姿が見える。四人は、すぐにそれに駆け寄つた。

「38(t)……B/C型のハイブリッドか……」

「何かさつきより小さい、ビスだらけでゴツゴツしてるし」

「そう侮るほどでもないぞ。38(t)はボーランド侵攻からバルバロッサ作戦の初期まで、戦車が送られなかつたアフリカ戦線以外のすべての戦場でドイツ軍の主力として活躍していたからな」

「はい！38(t)はロンメル将軍の第7装甲師団でも主力を勤めるほどの初期のドイツ電撃戦を支えた重要な戦車なんです！軽快で操作性も高くて……あつ、tつていうのはチエコスロバキア製つてことで、重さの事じやないんですよ！」

「ああ、ロンメル将軍はナポレオン以来の戦術家とまで言われたほど

巧みな戦略・戦術によつて戦力的に圧倒的優秀なイギリス軍をたびたび壊滅させるほどの人間で、そんな人間が使用していた戦車なのだから、頼りがいのある戦車なのは間違いない」

と、まほは現在進行形で戦車に頬をこすりつけている優花里の意見に同意する。だが、流石に優花里の行動には華と沙織は引いてしまった様子だ。まほもまたドン引きとまではいかないものの、自分もあまり戦車に接していなかつたらああなつていたのだろうかと、もはや同業者のように優花里のことを見ていた。というより、戦車を近くになると血がたぎつてくるのだからもはや同類なのだろうか。

「了解、それじゃ直に取りに行きます」

「どうしたんですか？」

「戦車が一輛見つかったんだって」

「そうですか、よかつた……」

身体計測を受けているみほは、中嶋からのその言葉を受けてホツ、と一安心する。やはり現在ある戦車一輛だけでは戦車道の試合をすることは不可能であるため、少しでも多く戦車を見つけてもらわなければいけない。自分がその手助けになることができていないと不安だったが、戦車発見の報告を受けて胸をなでおろすことができた。

「それじゃあホシノ、戦車の運搬頼んだよ」

「了解！」

自動車部の一員である三年生のホシノは、中嶋から戦車の大体の場所が書かれた紙を受け取ると、すぐさま外に向かつて走つていった。他の戦車が見つかつたら頼むというのは、整備という事だけじゃなく、見つけた戦車の運搬の事も言つていたのだ。

「すみません、自動車部の皆さんにこんなに迷惑をかけて」

「いって、それよりもあと少しで身体計測も終わるから、その後私が倉庫前まで送つてあげるよ」

「何から何までありがとうございます。私にできることがあつたら、なんでも言つてください」

「だからといって礼なんて……そうだな、それじゃあみほちゃん専用

車椅子に付ける機材なんだけれど……」

「え？ またそれなんですか……」

「まず、水に落ちたらすぐに開くエアバックとか、ゴムボードが開くつていうのもいいかも……推進装置を背中に付けるつて手も……」

「いや、あのだから……」

「せつかくだから、水陸両用車ならぬ、水陸両用車椅子とか！」

「……もういいです」

みほはいろいろと諦めてしまった。

「あつ！ 本当にあつた!!」

「すつごーい、戦車だ！」

そして、一年生七人組はというと、ようやくとある場所で戦車を見つけることができた。その場所とは……。

「まさか、本当にウサギ小屋にあるなんて……」

「ごめんね、邪魔しちゃつて」

愛里寿は、ウサギの一匹を持ち上げるとそう話しかけた。

あの日記には、『寂しくない』『あの子たちのように死んじやう』という文面があった。これは、ウサギは寂しいと死んでしまうという迷信に基づいた文章であると彼女たちは考えた。ウサギは自然界で生き残るために、病気になつていても敵に察知されないように平穀を装うという習性がある。そのため、もしもペットとして飼われているウサギであつてもその習性のために病気であることを隠してしまい、飼い主が病気に気がつかずに遠出している間に死んでしまうことが多いあつたのだとか。そのため、ウサギ一匹になつてしまふ死ぬ。つまり、寂しいと死んでしまうという迷信につながったのだとか。

「この戦車、一体なんて名前かな？」

「M3中戦車リーですね。ここにいるみんなで乗ることができる戦車です」

「そりなんだ、よかつた……」

「でもさ……」

「だよね……」

宇津木、大野は小屋の中を見渡して苦笑いを浮かべる。戦車のあらゆる隙間に藁が敷き詰められており、内部も敷き詰められている。恐らく、この戦車の中はウサギのすみかとして機能しているのだろう。と、いう事はこの戦車を出すためにはこのウサギ達には一端お引越ししてもらわなければならない。これは、かなり骨のいる作業になりそうだ。と、いうか……。

「どうやつてこの戦車を小屋の中に入れたのかな？」

「あと、どうやつて出そう」

トタンで作られた小屋で、さらに入口は金網で作られており、どう考へてもその入り口から戦車を入れることはできない。これでは戦車を入れることも、出すこともできないだろう。

「鶏が先か、卵が先かですね」

「何言つてゐる愛里寿？ここにいるのはウサギだよ？」

「いえ、そうではなく」

「愛里寿が言つてゐるのは、ウサギ小屋が先なのか、それとも戦車のためにウサギ小屋を作つたのか……ってことじやない？」

「そうです。この内装から考えると、後者ではないかと」

確かに、そう考へると戦車をどうやつて入れたのか分かる。いや、入れたというよりも戦車の周りに小屋を作つたと言つた方が早いか。とにかく、すでに小屋はボロボロとなつており、いつ崩れてもおかしくない。これは、戦車を出す作業と同時に小屋の立て直しも検討しなければならない。

それから十数分後、池の底と、崖の中腹にある洞穴で戦車を見つけて、という別チームからの報告があり、これにて全五輛の戦車がそろつた。

『つてことで、運搬よろしく』

「……あのさ、森の中とウサギ小屋はまだしも、崖と池の底つて、最後の戦車道の試合どんなものだつたの？というか、当時の戦車道履修者はどうやつてそんなところまで戦車を移動させたの？というか、どうやって見つけたの？」

『ん？細かいことは気にしない気にしない』

ナカジマは、どうやってそんなところから戦車を移動させようか頭を悩ませることとなつた。

2—4 感情

「みほ、大丈夫？」

「なんだか、午前中に見た時よりもやつれてらっしゃるような……」

「あはは、大丈夫。心配しないで」

結局あの後身体中隅から隅まで調べられた拳句に車椅子のアイデアも提出させられるなど、身心的にやつれるような事をした後、みほがようやく解放させられたのは放課後、日が落ちかけた頃であった。

「それより、38(t)を見つけたって聞いたけど？」

「はい！少し整備をしたらすぐに走れるようになるかと！」

「経年劣化もそれほどみられなかつたから大幅な、装甲全部を取り替えないといけないほどの整備も必要ない」

「そうなんだ……」

優花里、まほの言葉を聞き、みほは一安心する。38(t)は外で見つかつたと聞いたので、雨風に晒されてのさび付きが気になつていたのだ。だが、よく考えるとここは学園艦。その上にずっとある戦車なのであるから、潮風によつてさびるという事も考えられるため、それなりのコーディングが装甲や塗装にて元々なされていたのだろう。戦車道履修者全員が車庫前に集まつてきたころ、生徒会の河嶋桃が前に出て話し始める。

「静かに！皆、聞いてくれ。ノルマであつた全五輛の戦車が見つかり、運搬については自動車部に一任している。もう日が暮れてきたため、今日の所はこれで解散となる。明日は戦車を洗車するため、体操服を持参して集合してくれ」

「では、解散！」

柚子のその一声で、みな雑談を始めながら帰り始める。

「私達も帰ろうか、みほ」

「うん……あれ？」

「どうしたんです？」

「うん、ちょっと」

まほの声と共に動き出そうとした車椅子であるが、その前に、みほ

が何かが気になるような声を上げた。そして、みほが自分で車椅子の車輪を漕いで向かったのは、まだ一人たりとも動こうとしていない愛里寿を含めた一年生七人であつた。

「愛里寿ちゃん、どうしましたか？」

「あつ、みほさん……いえ、実は私達にはまだやることがあつて……」「え？」

「ウサギ小屋を立て直すんです」

「ウサギ小屋？」

「はい、私たちが戦車を見つけたのがウサギ小屋の中で、でも戦車を出そうとしたら小屋を壊すしかなかつたんです」

「だから、この後皆でウサギ小屋を立て直そつて話になつてるんですけど」

と、愛里寿の隣にいた少女が言つた。見たところ愛里寿を除けば一番しつかりしていそうだ。と言つても、愛里寿は年齢的には中学生なのに大学生の学籍もあるのに高校生であるという考えてみると訳の分からぬことになつていて精神年齢場にも歳不相応となつてている氣もしなくはない。

「そうなんだ……なら、私も手伝うよ。いいでしょお姉ちゃん」

「ああ、もちろん私もだ」

「なになに？ 何をするつて？」

沙織と華、それから優花里もまたみほの元に駆け寄る。

「ウサギ小屋の立て直しだつて」

「まあ、ウサギですか、ふわふわして可愛らしいですよね」

「不肖ながら、秋山優花里も全力でお手伝いさせていただきます！」

「ほんとうですか？ ありがとうございます！」

「けど、暗くなつたら作業もおぼつかなくなるし、今日の所は完成しないかな？」

「はい、でもこれだけの人数がいるのですから、予想よりも早くに終わるかもしれません」

「よし、それじゃ行こう！ あつそうだ。私澤梓です！」

「私は西住みほ。よろしくね」

「はい！」

そしてそれから数時間後、結局その日の内には終わらなかつたものの、必要最低限でウサギが逃げないような建物は作り直せたため、今日の所はお開きにしてまた明日という事となつた。正直言えば愛里寿は嬉しかつた。戦車以外でも自分が人と関われるようになつていくように変化していくことが。それに、戦車以外の話もまた楽しい物だつた。小屋を立て直したらどこに行こうかとか、休日にこの街の事を案内してあげるとか、色々と話してくれた。そして今、彼女たちは学校帰りのアイス屋さんに立ち寄つてゐる。

「んんく、やつぱりここのアイスはいつ食べてもおいしい！」

「うん、こつちの期間限定の完熟ミカン味もおいしいよ」

もちろん、こうやつて大人数でアイス屋に來ることも初めて、というかアイス屋に立ち寄るという事も初めてだ。アイスはいつも家のお手伝いさんが作つてくれるものばかりだつたから、別の人気が作るアイスクリームは初めてであるし、いつもと違つた味もおいしい。

「ねえ、愛里寿のアイスも一口食べさせてよ」

「え？ あ、はい」

「ありがとう……んくおいしい！」

もちろん友達にアイスを一口分けるという事も初めてだ。こんな気持ちとなるのか。自分がおいしいと思う物をまた、誰かがおいしいと思つてくれるという事。

「あゆみのも食べていいですか？」

「うん、もちろん！」

愛里寿は山郷あゆみのスパークリングなんとかという味を一口食べた。口の中で花火が弾けたような痛みが口の中を襲う。こんな味、感触も初めてだがしかし、なかなかに刺激があつておいしい。誰かと何かを分けあうことの嬉しさも楽しさも、共有できることの素晴らしさも、自分は今まで知らなかつた。こんな当たり前の感情を知らなかつたなど、自分が本当に人間だつたのか疑わしくなつてくる。喜怒哀楽、人にはその四つの感情があるという。しかし、自分はそのどれも持ち合わせていかなかつた。喜ぶことも、怒ることも、悲しむことも、

楽しむことも知らなかつたと思う。いや、楽しむことはあの子達のおかげで知つていたのかもしない。しかしそれも一時の感情であり、それだけがあつたとしても人間は生きていけないのかもしない。喜怒哀楽のどれかひとつでもかけた人間は、人間なのだろうか。それは、ロボットと同じなのではないだろうか。喜ぶこともない、怒ることもない、悲しむこともない、楽しむこともない、そんなものは人間じやない。けど、自分はもつとひどかつた。自分は、それらを望むこともしなかつた。人間として素晴らしいものである感情を欲しがることはなかつた。多分それは、なくとも人は生きていけるだろうと思つていたから。でも、自分は知らなかつたのだ。感情のすばらしさを。元々楽しいという感情を知つていたから、あの子たちのおかげで知つていたから、だから自分は気がつくことができた。他の三つの感情もまた、人間を人間にするのには必要不可欠なのだと。

「あれ？ そういうえば、もう一人いませんでした？」

「ああ、優季なら彼氏の家に」

「えつ！ 彼氏いんの！」

「は、はい……」

「うう……後輩に先を越された……」

彼氏、恋、自分にも恋をする時が来るのだろうか。誰かを好きになるという事ができるのだろうか。人に恋をして恋をされ、愛を知り、愛を育み、未来を夢見ることがができるのだろうか。島田流の家元として、いや島田愛里寿という一個人としてたくさんの人たちを導いていくことだけが夢であるのだろうか。もしかしたらもつと違う未来もあるのかもしれない。島田流を率いていくにしても、それと並行して別の仕事に就くという事もできるはずだ。たつた二日三日でここにいる人達は自分の価値観を大きく変えてくれた。自己の存在意義を見直すチャンスを与えてくれた。自分はもつと変わることができることかもしれない。自分はもつと大きな人間になるのかもしない。

「どうしたの、愛里寿？」

「いえ、何でもありません」

愛里寿は嬉しそうに言つた。自分自身が想像もしていなかつた島

田愛里寿という人間は、ここで作られていくのだ。

「もしもし、大洗女子学園の角谷です」

『あら、角谷さん？ 試合ができる人数と戦車は集まつたかしら？』

『ええ、なんとか……明後日はよろしくお願ひします』

杏は、生徒会室から電話をかけていた。明後日くる予定の日本戦車道連盟の強化委員である教官だ。そこには、いつものようにおちやられけた雰囲気の少女の姿はなかつた。

『それでどうかしら？ 今集まつている子たちで優勝できる日星はついた？』

「ええ、思つていたよりも凄い子たちが集まつてくれました。もしかしたら……いえ、優勝できます」

『そう、よかつたわね』

そう言つて、電話口の相手はクスリと笑う。それはそんな事出来るわけがないだろうという嘲るような笑いではない。彼女がそこまで言うのだから、本当にできるのだろうなという確信に近い笑みであった。

「……どんな子たちが来たのか聞かないんですか？」

『楽しみは、最後まで取つておきたいもの……明後日行つたときに目にするわ』

「分かりました……」

『……？』

教官は少し不思議に思つた。杏の声色が少し前に電話した時よりも弱々しい氣がするのだ。珍しいことだ。礼節をわきまえており、いつも元気で、その声は頗もしくもありたくましくもある、そんな少女だつたはずなのに、なんだか今日はおかしい。

『どうかしたの？』

「蝶野さん、私の事……嫌いになるかもしけないけどさ、大洗学園の事は嫌いにならないでね」

『……嫌われるようなことでもしたの？』

「世間一般的に考えたらね……」

『……何ヶ月、貴方とやり取りしていたと思つてゐるの？あなたの性格
だつて分かつてゐるわ。例え、誰が何と言おうとも、私はあなたの事を
嫌いません』

「……ありがとうございます」

『それじや、また明後日』

「はい』

それだけ言うと、杏は受話器を置き、横に置いてあるいつもの干し
イモの入つてゐる袋を取るとイスに座り、干しイモをかじる。不安が
るだなど、いつもの自分のキャラクターではない事は分かつてゐる。
それに、そもそもそのことを覚悟して彼女達を戦車道に誘つたのだ。
何も考へていなかつたわけじやない。多分、あまりにもいい結果に事
が運びすぎて不安になつてゐるだけだ。本当に、バカげたことを言つ
てゐると自分でも思う。

「会長」

「河嶋……」

同じ生徒会の河嶋桃が、大量の同じような薬の入つたビンを杏の机
の上に置いた。

「河嶋はほんと、変なところで頼りになるね！」

「いえ、それが私の役目なので」

杏は、ビンの蓋を開けると、中に入つてゐる薬を二つぶとつて飲み
込む。正直水と一緒に飲み込んだ方がいいのではないかと思うのだが、
あいにく今手元にない。桃はやはりどこかで抜けているようだ。
水無に飲み込むと、なんだか喉元で薬が残つてゐるような感じがして
気持ちが悪いのだが、文句を言うほどの事ではないため彼女はそのまま
飲み込んだ。

「ねえ、河嶋」

「何でしよう？」

「私さ、この期に及んでまだ自分の心配をしていてるよ。ほんと、自分勝
手だよね」

杏は、笑つてそう言つた。どうして自分の事ばかり心配してしまふ
のだろうか。本当につらいのは、真に傷つかなければならぬのは彼

女達であるというのに。その覚悟もないで事を運んだわけではない
というのに、まだ自分の心配をしようとしている自分が心の中にいる。
なんとも自分勝手な女であろうか。

「会長、人はどれだけ見繕つたとしても、どれだけ覚悟をしたとしても
まず自分の事を一番に考える生き物です。会長は間違っています」

「ありがとう、河嶋……ゴメンね、地獄の道連れをお願いして」

「いえ、この学校のためだったら、私は鬼になる覚悟はすでにできてい
ますので」

「……そう」

とは言つているものの、杏は柚子を通して知つていて。この一件の
結果自分たちに待ち受けていたであろう物について説明したその夜、
桃が泣いていたという事を。その時も今も、彼女は本当の自分を押し
殺して自分に接している。ある意味役者だ。柚子も柚子で、他人がい
る場所では平然を装つてはいるものの、一人だけで部屋にいるときは
いつもの彼女の様子とは全く違う暗い姿を見せているのを見た。結
局のところ、自分たちのしていることは、まだ彼女のような人間を完
全な意味で受け入れてくれていない世間にとつては悪者のする行動
なのだろう。

「妹ちゃんが……みほちゃんが戦車道を取るつて決めてくれた時、本
当に嬉しかった……その気持ちは本当だから……」

「分かっています会長。絶対に、この学校を優勝させましょう」

「当たり前じやん。ここまでして、優勝できなかつたら……」

「……」

「……こから見る月は、やっぱり綺麗だねえ……」

「はい、私もそう思います」

学園艦はいつも、常に動いている。しかし、そこから見える景色は
ほとんど変わらなかつた。そして、月の輝きも変わらなかつた。こ
の、自分の慣れ親しんだこの景色を守るためにだつたら、自分はどう
なつたつてかまわない。だから彼女には、これ以上の試練を与えない
でくれ。せめてこの学校にいる間だけでもいい。彼女の平穀を壊し
たのが自分であるのだから、彼女の安らぎを願つてもいいだろう。そ

れぐらいのわがままは許してもらつても構わないだろう。

2—5 割当

明朝、戦車道履修者は昨日と同じようにまた、車庫の前に集められていた。そのころにはすでに車庫にあつたIV号Dも含めた五輛全てが車庫の前に並べられていた。こうしてみてみると、なんとも統一感の欠片もないものである。

「まるで、多国籍連合軍のようだな……」

「うん、八九式中戦車甲型、38(t)軽戦車、M3中戦車リー、III号突撃砲F型、それとIV号中戦車D型……ここまでバラバラだとそろつた動きができないかな……」

黒森峰もそうだが、強豪校という物は切り札と呼べるような戦車を除けば、大体の戦車の種類をそろえている。少なくとも、作られた国はそろえている。戦車という物は、製造された国によつて戦車の基本スペックがそれぞれ違うため、国籍が違えば、全速で出せる速度がバラバラとなってしまうのだ。だから戦車道の試合に置いて、戦車の種類に統一感を持たせた方が安定した戦車運用ができる。そのため、今現在の編成では素早い動きと攻撃は望めないだろう。だが、その点は知力と策略で何とかしていけばよいのだ。西住みほはそう考えるしかなかつた。

「なんとか五輛、集まりましたね」

「ああ、自動車部の諸君。ご苦労だつた」

「いやいや、もう大変だつたよ。特に崖の所にあつたのとか……」

生徒会のねぎらいに対してナカジマはそう答えた。だが、どうやってそんなところにある戦車を持つてくることができたのか皆目見当もつかない。ナカジマ曰く。それは企業秘密であるから教えられないのだとか。まあ、別に教えられても使い道がないと言つちやないし、なんだか聞くのも怖いのである。

「では、どう振り分けますか？」

「見つけたもんが見つけた戦車に乗ればいいんじゃない？」

「そんな事でいいんですか？」

「みんな自分が見つけた戦車に愛着を持ち始めているみたいなので、

それでいいのでは?」

捨てられた子犬を見つけた時の心境に似ているだろうか。特に一年生組はM3中戦車を見つけた経緯から、かなりの愛着を持つているようだ。

「では、最初に言つた通り西住のチームがIV号に、私たちはお前たちが見つけた38(t)に乗らせてもらう」

「分かりました」

元々、足の不自由なみほのための機材はIV号戦車の座席を元に制作しているため、どの戦車が見つかったとしてもみほたちが乗る戦車は変わらなかつた。だから、まほたちが戦車を探しに行く必要性はなかつたのだが、残る一チームである生徒会の三人が乗る戦車が必要だつた。三人は昨日まほたちのように戦車を探しに出ではいなかつた物の、もとをただせばIV号Dを見つけたという意味ではすでに彼女たちの戦車道探索という役割は済んでいた。そう言う意味で言うならば、まほたちはIV号Dと交換できる戦車を探しに出ていたと言つてもいいだろう。なんにしても、四人乗りで生徒会の三人でも操縦することのできる38(t)をまほたちが見つけてきたのは運がよかつた。この戦車であれば、操縦はそんなに難しくはない。万が一にも二種類の操作方法があるクリステイー式の戦車でなくてよかつたとみほは考えていた。

「その事なんだが、少しいいか?」

だが、桃がそう言つた瞬間にまほが手を挙げた。

「なんだ、西住」

「ああ、戦車道履修者の中で、戦車道を経験者は私とみほ、それと愛里寿だけだ。その内の二名が同じ戦車に乗つてその戦車が撃破されるようなことがあつたら一気に総崩れする恐れがある。そのため、38(t)には私も乗車したい」

これは、昨晩から考えていたことだ。ほとんどが戦車道素人であるこの学校の中で、自分、みほ、そして愛里寿の三人の担う役割は大きなものとなるだろう。だが、五輪しかない戦車の内、自分とみほがIV号D戦車に乗つて撃破された際、残つた愛里寿一人に重荷を全て背を

わせてしまうという事を危惧した。

愛里寿は一年生、しかも実年齢で言えば中学生であるから、このメンバーでは一番年下。いくら近い将来に大学選抜の隊長を努めることが内定していたとしても、素人ばかりのチームの年上の少女達をまとめて上げる心の強さがあるのか実際に見てみるまでは不安だった。だから、まほとみほの二人が別々の戦車に乗り込み、一方が撃墜されても戦線を維持できる形を取つたのだ。

「なるほど、そう言う事なら……いいですね、会長？」

「いいんじやない？一年生と三年生のチームで区別もできるし。こつちとしても元黒森峰の隊長さんがおなじ車輌に乗つていたら心強いし」

「フツ、本当にそう思つて いるのか？」

「まつ、ちよこつとだけだけどね」

実は言うと、まほは少しばかり杏に一目を置いていた。初めて会つた時から感じている彼女のずるがしこさの中にある緻密な計算や、自分のプレッシャーにも動じない精神力。そして、自由奔放がゆえに何物にもとらわれることのないその発想、判断力。まほは、杏がもつと成長し、戦車道に真摯に取り組んでくれれば、大会で上位に食い込むことができる、いや将来的には社会人チームで隊長を努めることもできるのではないかと考えていた。そのため、先ほどまほ自身が言った、戦車道経験者の分散というのも真実ではあるが、もう一つの目的として杏の成長という物もまた彼女の思惑の中にあつたのだ。さらに言えば、杏もまた最初からまほには自分たちのチームに入つてもらおうと考えていた。理由はほとんどまほが言つたことと同じである。それを杏自身が言わなかつたのは、彼女が言わなくとも聰明なまほであつたら、自分からそう持ち掛けるのではないかという考え方の下だ。もしかしたら、杏はまほが思つて いるよりもしたたかなのかもしれない。

「すまないみほ、そう言うことだから同じ戦車には……」

「ううん、心配しないでお姉ちゃん。私も、同じ三年生の会長さん達と一緒に乗つた方がいいんじやないかって思つていたから」

「そう、ありがとう」

「では改めて。IV号Aチーム」

Aチームは、みほ・沙織・華・優花里の四人の事である。IV号戦車は、第二次世界大戦中のドイツが持つていた中戦車である。装甲部隊の創設者であるハインツ・グデーリアンによつて求められた二種類の戦車のひとつである。ベグライトヴァーゲンと呼ばれ、75mm砲搭載の20トン級の「支援戦車」として開発された経緯を持つ。ドイツ戦車の中で最も生産数が高く、大戦中期ごろには改良が限界に達していた物の、敗戦時まで使用され続けたのだから、安定性した強さはあつたものと考えられる。IV号は、四社による競作が行われた結果、複数のバリエーションを持つまでに至り、1939年には今この場にあるD型が本格的に量産された。因みに、D型は当初の戦車よりも装甲厚が強化されているそつだが、防御力は不十分であつたそつだ。

「八九式、Bチーム」

Bチームは、磯辺典子、近藤紗子、河西忍、佐々木あけびの四人である。バレーボールのユニフォームを着ていることが特徴だ。といふか、元々バレーボール部だつたそつだ。しかし、部員不足のために廃部となつてしまい、バレーボール部復活を生徒会との交渉条件にして戦車道を履修しているのだと。唯一の二年の磯辺のみ体操服姿で、そのほかの一年生三人がユニフォーム姿であるため、一番学年の区別がつきやすいメンバーである。

蛇足だが、三人のユニフォーム姿を見る限り、ズボンは今や懐かしいと言えてしまうブルマーであると思われる。ブルマー、あるいはブルマもしくはブルーマ、ブルーマーは20世紀に世界的に広く普及した衣類の一つである。戦前の日本でもんべに代わつて標準の運動着として採用されたブルマーは、ずり落ちたりひきつつたりせず軽量で、動きに対しても身体に密着するため、オリンピックや国際競技の場で公式に使用されたことで女子体操服の代名詞として認知されることになり、小中高と幅広い間で指定体操着として採用されることとなつた。なお、主に女子限定の体操着として着用されていたが、場所や時期によつては男女共通の体操着として着用されていたのだと。

また、水着としての着用例もあつたりと、使用方法にはかなりの自由度があつたと考えられる。しかし、1987年にある高校から端を発した反対運動によつて衰退を始め、公立校では2004年を最後に、私立では2005年を最後としてブルマーを女子の体操着として指定する学校は消滅した。現代では、男性の性的欲求を満たすためだけに存在していると言われるが、遡つてみるとかなり歴史のある伝統的な服装であつたことが垣間見える。

話を戻すが八九式中戦車は、1920年代後期に日本初の国産制式戦車として開発・量産された大日本帝国陸軍の戦車である。第一次世界大戦に並行して、大日本帝国陸軍において戦車部隊を保有するべしとの機運が高まり、10トン以下の軽戦車としてフランスのルノーF17、10トンから20トンまでの中戦車としてイギリスのマークA・ホイペットをそろえた戦車隊が創設された。それに加えて、当時の戦車開発の流れを鑑みた日本も、自力でこれに追随すべきであるとの判断から戦車の国产化計画を推し進めた。その結果として1927年に、作り上げられた試製一号戦車を得て、一応の国产戦車配備をこの八九式中戦車で成し遂げたのだ。1931年から勃発した満州事変から、第二次世界大戦の序盤のフィリピン攻略戦でもアメリカ軍のM3軽戦車と戦つた。しかし、開発期間に十年の開きがあつたために八九式は様々な面で劣つており……。そんな戦車まで前線に持つてこなければいけなかつたという事を考えれば、当時の日本軍がどれほど危機的状況の中にあつたのか分かるだろうか。因みにこれは余談であるが、1937年に勃発した日中戦争に置いて八九式の戦車長として多くの激戦を戦つた軍人がいた。その男はその功績をたたえられ、軍部が初めて公式に『軍神』の異名を死後与えた。その男の名前は、『西住』小次郎だという。

なお、例の崖から戦車を見つけたチームというのがこのBチームである。果たして、どうやつてそんなところに戦車があつたのを見つけていたのか、そして自動車部はどうやつてそんなところから戦車を持つてくることができたのか、永遠の謎としてこの大洗戦車道内で語り継がれることになるかもしない。

「III突、Cチーム」

Cチームは鈴木貴子（カエサル）、松本里子（エルヴィン）、杉山清美（左衛門佐）、野上武子（おりょう）の四人のチームである。歴史上の軍人らしきもののコスプレをしている四人組だ。それぞれを歴史上でも有名な軍人の名前で呼び合うというちよつと変わった人間で組まれているチームで、全員が歴史全般についての知識をそれなりに持っているようだ。

彼女たちの乗ることとなるIII号突撃砲は第二次世界大戦中にドイツで開発された突撃砲だ。因みに、突撃砲という名前が付いている通り、この車輌は厳密的に言えば戦車ではない。実はドイツが製造したIV号戦車が一番生産されていていたというのは戦車に限つてのことであり、装甲戦闘車両というくくりで見れば、一番生産されていたのがこのIII号突撃砲だつたそうだ。つまり、それほど重宝されていたという事であろう。突撃砲は車軸が回らず、狭い射界で攻撃範囲を制限されるのに比べ、戦車は回転式の砲台を持ち、全周囲に対する砲の指向を行ながらの機動が可能である。という違いがあり、そのため、突撃砲は目標を迂回しながら突破しつつ攻撃を仕掛けるというまさに突撃砲の名に恥じない戦い方をしていたらしい。Cチームの使う三突はF型と呼ばれるもので、主砲を長砲身にしたという違いがあるらしい。そのため、今回見つかった戦車五輌の中でも一番の高火力なのだとか。

なお、彼女たちは池の底からこの戦車を見つけたらしく、水蜘蛛という道具を使つたり、すいとんの術に似た忍術で見つけたそうだ。どうやら、彼女たちは一年生の時には忍道を履修していたらしく、それで身に付けた技なのだと。ただ、どうやらそれは彼女たちが思つた授業ではなかつたらしく、戸隠流やら真田十勇士やらがあると思つたらしいが、行つてみれば近代スペイの情報収集術などというリアリティある物だつたらしく、ちよつとお気に召さなかつたらしい。

「M3、Dチーム」

Dチームはウサギ小屋で戦車を見つけた七人、澤梓、山郷あゆみ、丸山紗希、阪口桂利奈、宇津木優季、大野あや、そして島田愛里寿であ

る。

M 3 中戦車、リーとはイギリス軍で当時使用されていた愛称で、他にもグラントという愛称もある戦車もあるそうだ。アメリカ軍向けの仕様のままでイギリス軍に配備されたものを、南軍の将軍の名前を取つてジェネラル・リー、イギリス向けの仕様で生産されたものを南北戦争時の北軍将軍の名前を取つてジェネラル・グラントというらしい。北アフリカの砂漠に配備されたM 3 中戦車は、強力な榴弾（爆発することによつて弾丸の破片が広範囲に飛散するよう）に設計されてる砲弾の事）を発射でき、かつ対戦車戦闘でも有効な75mm砲を装備しているため、当時のイギリス軍からはかなり喜ばれ、同時期に導入されていた戦車の中でも機械的信頼性が高かつたらしい。その後、M 4 中戦車がイギリス軍に配備されるようになつたが、ドイツ軍やオーストラリア軍、ソビエト連邦やアメリカ軍等々数多くの軍隊で使われていたそうだ。1944年のビルマ戦線では、イギリス軍の反攻に投入され、まともな対戦車火器を持たなかつた日本軍相手に威力を發揮したらしい。

「38(t)、Eチーム」

Eチームは、生徒会三人衆である角谷杏、小山柚子、河嶋桃。そして、西住まほの四人である。

38(t)は第二次世界大戦前にチエコの会社がチエコスロヴァキア陸軍に向けて開発・製作した軽戦車である。しかし、1939年にはあつたミュンヘン会談の結果、ナチス・ドイツによりチエコスロヴァキアが併合され、チエコ陸軍向けとして発注されていた車両のすべてに当たる150輌がドイツ国防軍向けとして完成させられた。しかし、ドイツ軍向けに納入された戦車である物の、元々チエコ製であることを示す名残が残つている。それが、38(t)のtである、といふのはすでに優花里が言つてゐたことであるが。ドイツ軍は開戦時から多くの38(t)を実戦投入し、1939年のポーランド侵攻では、第3軽師団に100輌ほど配備されていたらしい。そして、これも優花里やまほが言つていたが、第二次世界大戦中の西方戦役で、エルヴィン・ロンメル将軍が指揮した第7機甲師団で有名なのだそう

だ。ちなみに、この38(t)は数あるバリエーションの内B/C型と呼ばれるものであるらしく、この戦車は……。

実は、38(t)の戦車はA型、B型、C/D型、E/F型、S型、G/H型、K/L/M型があり、B/C型という物は史実ではない。と、いう事でこの戦車は38(t)B型をこの学園艦内で改造した車輌であると考えられる。一応、今現在自動車部が使用しているどかい倉庫は元々戦車道履修者が使用していたらしいし、あそこでかなりの改造を行つたのだと考えられる。と、言うのは戦車素人の考え方であるため聞き流してもらつても結構である。

車輌の割り当てが決められた後、戦車を洗車することになつたのだが、これと言つた盛り上がりもない為、以下戦車洗車ダイジェスト。「ちょっと沙織さん……」

「だ、誰ですか!?」

「高松城を水攻めじや！」

「ペリーの黒船来航ぜよ！」

「戦車と水と言えば、ノルマンディーのDD戦車でしょ！」

「「それだ!!」」

「もうびしょ濡れ……」

「恵の雨だあ！」

「ブラン透けちやうよお……」

「……」

「愛里寿もその内ブラ付けるぐらいに大きくなるから
「別に気にしてません」

「今日は戦車を洗車すると言つたろ」

「上手いねえ、座布団一枚」

「決してそう言う意味で言つたわけじやありません」

「それより二人もまほちゃんみたいに手伝つてくださいよお……」

「それよりも、柚子が水着を着ているの何故だ?」

因みに、高松城というのは現在の香川県にある城で、水攻めというのは1582年の備中高松城の戦いにおいて羽柴秀吉の家臣である黒田官兵衛が立案し、毛利氏の配下であつた清水宗治相手に使用した

戦術である。長さ三キロ、高さ七m、幅二十二mにも及ぶ大きな堤防を僅か十二日で作り上げ、近くにあつた川の水を城の周囲に流し込み、備中高松城を湖に浮かぶ小島とし、孤立させた作戦である。因みに、この戦の最後は清水宗治の切腹という形で幕を閉じるのだが、その時の切腹の姿が見事なものであつたため、その後の時代を生きる武士は、切腹が武士として名誉なことであるという認識となつたらしい。

ペリーの黒船来航は、1853年、1854年に当時東インド艦隊司令長官であつたアメリカ海軍代将のマシュー・ペリーが1639年から鎖国して朝鮮王国、琉球王国、中国そしてオランダ以外と関係を経つていた鎖国を行つて日本に開国を求めた一件である。

ノルマンディーのDD戦車とは、第二次世界大戦中に開発された水陸両用戦車を使用したノルマンディー上陸作戦の事だ。この作戦では、特にオマハ・ビーチでの戦いがよく知られており、およそ3000の死傷者を出したという。惨劇とも言われている。DD戦車はオマハ・ビーチの岸からはるか遠くの沖合で会場に降ろされたのだが、荒波にもまれてしまいほとんどが沈んでしまったそうだ。

それはともかくとして。洗車は、夕刻にまで及び、新品同様とまでは行かない物の、最初に比べればかなり綺麗となつた。

「よし、いいだろう。後の整備は、自動車部の部員に今晚中にやらせる

それでは、本日は解散

その言葉を聞いた瞬間、全員が全員、自動車部の部員を憐れに思つてしまつた。確かに、自動車部は昨晩から今朝に至るまでにここにある戦車を色々な所からこの場所に移動させたのだとか。と、いう事は昨日は徹夜だつたという事になるので、このままいくと二徹という事になる。果たして、ちゃんとした睡眠時間は取れているのだろうか。特に、自動車部とも接したことがあるみほがそう思つていた。さて、解散と言われたもののみほ達にはまだ学校でやるべきことがあつた。

「それじゃ行こつか」

「はい、今日中にウサギ小屋が完成すればいいですね」

「うん」

そう、まだウサギ小屋を建てるという仕事が残っている。みほたちAチーム、愛里寿たちDチームの面々、それからまほは昨日と同じように戸内小屋に向かおうとした。その時である。

「あつ、ちょっと待つて」

「え？」

彼女を呼び止めたのは、Bチームの磯辺典子だつた。

「Dチームの人たちから聞いたけど、戸内小屋を建てるんだつてね」「私達もお手伝いします！」

「え、いいの？」

「はい！ まだまだ身体を動かしたいんです！」

「さすが元バレー部ですね」

「まあね」

さすが体育会系の部活動出身である。あれほど身体を動かしていったというのに、まだ動かしたりないという。まあ、洗車して身体中に水を浴びたから身体が冷えてしまっているのかも知れないが。

そして、流石にチーム三つが集合しているので気になつたCチーム四人も集まる。

「何ぜよ、この集まりは」

「みんなで内緒話か？」

「いや、実は先日M3リリーを出すために戸内小屋を壊してしまってな。それを直そうという話を……」

「ほう、修繕か。戦争で修繕と言つたら第二次世界大戦の首里城だな」「いや、ポーランドの街ポズナンじやないか？」

「ウサギの城である小屋から出すのだから、三方ヶ原の戦いの徳川家康じやないか？」

「「それだ!!」」

「どれだ？」

首里城は、かつての沖縄にあった琉球王国の王城であつた場所で、沖縄県内最大規模の城である。その堅牢さからか、第二次世界大戦中の沖縄戦に置いて日本軍が首里城の下に陸軍第32軍総司令部を置いていた。しかし、それが原因となり、アメリカ軍艦から三日間に

渡つて攻撃を受け続け消失し、首里城へと続く階段のみが残された。今現在ある首里城は、1979年に琉球大学が首里城跡から移転した後に始まつた復元によつて生まれ変わつたと言つても過言ではない首里城である。ただ、元々の色が分からぬ場所、資料が消失しているという事もあつて、完全に戦前の姿が戻つているというわけではないらしい。

続いてポズナンとは、ポーランドの西部に位置している都市で、中世ポーランド最古の都市のひとつである。第二次世界大戦ではドイツ軍とソ連軍の激しい戦闘により、ポズナン市街地全体の55%が、旧市街は90%以上が破壊され、壊滅状態となつてしまつた。しかし、戦後残された資料を基にしてポーランド人、ポズナンの街が好きな人たちによつて完全に復元された。因みに、ドイツ軍の元歩兵大将であるエーリヒ・フリードリヒ・ヴィルヘルム・ルーデンドルフはこの街の旧ポーゼン管区と言われるところの出身である。

最後に三方ヶ原の戦いの徳川家康であるが、これは1573年1月25日に起こつた武田信玄と徳川家康・織田信長連合軍との戦いである。正確に言えば、織田信長は自身の包囲網への対処のために忙しく、戦場には赴いていないが。上洛を前提としたとされている武田信玄が、甲斐の国から進行する途中、徳川領であつた三方ヶ原を侵攻する際にあつた戦い。その際、徳川家康は浜松城にて籠城の構えを見せており、本来なら戦が起くるなどという事はなかつた。しかし、それを読んでいた武田は、わざと浜松城を素通りしてその先にある城を目指すような動きを見せる。これを知つた家康は、坂を下つて移動中の武田信玄の首を取れるという可能性を見出し、平手汎秀ら織田からの援軍を加えた徳川・織田連合軍で信玄の後を追つた。しかし、それは武田信玄の用いた作戦。武田信玄は坂を下つてはおらず、魚鱗の陣にて徳川を迎撃つた。結果、家康は敗北し、数多くの家臣、そして織田軍の平手汎秀等を失つた。浜松城へと数少ない取り巻きと共に敗走した家康ではあつた物の、空城の計という作戦を用いて何とか武田の軍勢を退けることに成功し、その命を失うこととはなかつた。

「とにかく、そう言う事だつたら私達も参加しよう」

「そうか、助かる」

「これだけ人数がいるなら、すぐ終わりますね」

「はい、もしかしたら前の小屋よりも豪華なものができるかもせんね」

「ともかく善は急げ、すぐにその小屋へと向かうとするぜよ」「はい！」

「そんなこんなで、生徒会チーム以外の面々が参加することになったのだが、一方でその生徒会チームはというと。」

「私達も行こうか？」

「ダメです。まだ仕事が山積みなのですから、そんな事をしている暇はありません。それに、戦車道連盟に提出する書類もまだありますし……」

「あ～そうだつたね」

「そのやり取りが耳に聞こえたまほは、首をかしげながら杏に話しかける。

「そのような書類は、普通は学校のトップに任せるべきものなのでは？」

普通はそうだ。黒森峰でもそうであつた。特に戦車という特殊な車輛を使うのであるから、学校のトップの承認もなければならぬはずなのだ。しかし杏は苦笑いしながら言う。

「いやあ～うちつて放任主義でね、学校は全然協力してくれなくつて」「え？」

その言葉に、まほは何か違和感を感じた。協力してくれないというのならば、あの戦車道履修者に対する大量の特典は何だというのだ。いくら放任主義とはいえ、あれほどまでに学生生活に関係するような事柄を、一生徒会の一存で設定することなどできない。そのため、自分は学校全体での協力があるのだと思い込んでいた。だが、蓋を開けてみれば学校の協力はないという。ならば、どうやってあれほどまでの特典を用意できたのか。まさか、虚偽だとでもいうのだろうか。

「杏、聞きたいことが……」

「あの特典は嘘じやないよ。それだけは用意して、後は全部生徒会に

お任せすることだから」

「……そうか」

だが、それで安心できるほどではない。むしろ心配の種が一つ増えたという事だ。戦車道の試合一つをするにも、安全に配慮するといった誓約書や、戦車の砲弾使用の許可や認可、さらには砲弾や燃料、火薬と言つた物品の手配等々たくさんの職務がある。それを戦車道に関係するたくさんの人たちで分担してそれぞれを終わらせていくような作業だ。それを、子供である生徒会三人が勉強の合間を縫つてやるなど、辛いことこの上ないだろう。まほは、一度目をつぶり少し考えてから言つた。

「分かった。何か私にも手伝えることがあつたら言つてくれ。これでも、母の手伝いで似た書類を書いたこともあるからな」「感謝する。しかし、今のところは何ら問題はない。だから、安心してほしい」

「……分かった」

杏と話している中ではあるが、突然現れた桃の言葉を聞き、まほはただ一言だけ答えるとみほたちの元にお向かつた。しかし、その途中一度だけ振り向き、言つた。

「一つだけ言いたいことがある。桃」

「なんだ?」

「……嘘をつくときは、手に力を入れない方がいい」

「ツ!」

「それに、少しメイクをした方が隈も隠せる。……チームメイトなのだから、少し位は頼つてくれ、ではまた明日」

それだけを言うと、まほはまたみほたちの元へと帰つていった。まほは見た。バインダーを握つて、震えている桃の手を。彼女は何かを隠している。恐らく自分自身の許容範囲を超えるような大きなことを。それに自分と杏の話に無理やりかのように割り込んできた姿も不自然だ。何かがある。この大洗学園戦車道には、何か裏がある。そう、確信にも近い何かを持ちながら、まほは仲間たちと共にウサギ小屋へと向かつた。

「やつぱただもんじゃないね」

「……すみません会長、隠し通せると思ったのですが

「いいよ河嶋……まほちゃんだつたらしようがないって。それにさ

……」

「え？」

「何でもない。さつさと仕事終わらせちゃおう」

「はい……」

そして、二人は生徒会室に帰つていった。

「待つてくださいよ会長～桃ちゃん～～～」

と、言うわけにはいかなかつた。実は戦車を洗車した時、38(t)を洗車していたのは

まほと柚子の二人だけであつた。桃は全体の管理をしなければならないために洗車に加わることはできなかつた。それは分かる。しかし、杏は何故かいつも通りに干しイモを食べながら洗車する履修者たちを眺めていただけ。つまりさぼつていたのだ。だから二人で洗車するしかなかつた。しかし、ここで体力差による疲労感の違いが出てしまう。元々黒森峰で戦車道を行つていたまほは、もはや体力は有り余つていると言えるほどに余裕をもつて洗車していた。しかし、ほとんどデスクワークしかしてこなかつた柚子はあまり体力がなく、結果として終わつたころには今のようにモップにもたれかかつてなければ立つていられないほどにヘトヘトとなつてしまつたのだ。主に戦車内部で雑巾を使用していたのと、外部で大きなモップを持って水をかけるという事も並行していくことも差がでた要因なのかもしないが。

「やつぱり私も手伝つた方がいいと思うのだが?」

「……頼む」

「あはは、さつそくだね」

結局まほも生徒会の仕事を少しばかり手伝うという結論となつた。見て分かる通り、ウサギ小屋の方はすでに人数が足りてゐる。自分が抜けたところで、別段問題はないだろうとまほもまた判断したのだ。

こうして、今日もまた一日が過ぎていく。誰もが想像していた通りに過ぎていく。だが、それでいい。何もない平和な毎日という物が続くのであれば、それでいい。何物にも縛られないという毎日という、どんな物にも代えがたい物、それがあるだけでいい。ただ、それだけがあればいい。

ウサギ小屋づくりは、人数をかけたおかげもあつてかスムーズに終わりを迎えることができ、ウサギ達は綺麗に、前よりも多少豪華となつた新しい家に住み着き始めた。途中、家の外装を西洋の城にするか、日本風の城にするかでチームがもめるというハプニングがあつた物の、そのほかは何の問題もなく終わつて何よりであつた。

それから間もなく解散して、一時間が経つた頃、みほは、沙織達三人と一緒に自分の家に帰宅していた。大洗学園艦の治安がいいと言つても、もしかしてという事もある。車椅子のみほ一人で帰らせるわけにはいかないというのが彼女たちの意見であつた。そして理由がもう一つ。

「みほ殿！ご飯は何合炊きましょうか！」

「飯盒で作るの……？」

「痛ッ！すみませんみほさん、手を切つてしまつて……」

「大変！絆創膏どこにしまつたつけ……」

「皆意外と使えない……」

生徒会の仕事を手伝つてているまほだが、その仕事の量が多く、晩御飯時までに帰つてくることができないという連絡があつたのだ。そのため、みほが一人で晩御飯を作るという話を聞いた沙織達は、皆で一緒に作つて食べたほうがもつとおいしくなるし楽しいという話になつて今に至つた。しかし、優花里は軍用のレーシヨンや飯盒での料理しかしたことがないようなお嬢様であつたことが災いし、包丁でジヤガイモを切ろうとして指を切る始末。なので普通の料理を作るという点で言えば戦力になるのが四人中二人という状況にあつた。

とにかく、華には包丁を使わせてはいけないと判断した沙織は、ピーラーで皮を向くように指示を出し、優花里にはしようがないから飯盒でご飯を炊くという事を許可してそちらを任して、自分とみほの二人を中心として料理をしていこうという事となつた。と、その時沙織があることに気が付いた。昨日の朝にもみほの家に來ていた沙織。

その時は気にも止めなかつたが、よく考えるとこの寮の台所は少しだけ低く設計されているようと思える。料理をするためには中腰にならなければならぬいため、長時間料理をするというのはかなり辛くなる。

「……めんね、車椅子の私に合わせて寮母さんに用意してもらつたから。もしも立つての辛くなつたら椅子用意するから」

「あつそつか……ううん、大丈夫。もうそろそろ足腰も鍛えないとなつて思つていたから」

みほの言葉を聞いた沙織は、なるほどと思つた。確かによく考えればこの高さは、座つていれば高さもちょうどくなる。普段自分が使つてているような台所では高すぎて、車椅子に座つているみほだつたら高すぎて料理をするのがしんどいだろう。それ用に椅子を買ってきて料理をするということもできなくはないが、料理によつては台所中を右往左往するような場合もあるため、車椅子で移動したほうがスマートであるに決まつていて。

みほの言葉に納得した沙織は、料理を続ける。みほもまた、華が皮を向いたジャガイモをまな板の上に置くと、手慣れた手つきで乱切りに切つていく。

「すばやいねみほ、料理上手なの？」

「はい……戦車道は良妻賢母を育成するための武道だから、そのためには炊事洗濯、とにかく家の事は一通りできるようにつて、お母さんとか、お手伝いさん……お姉ちゃんにも教わつたの」

「へえ……」

「それに、もともとこつちで一人で暮らす予定だつたし……」

「……」

そう、みほは元々こつちに一人で来る予定だつた。まほも付いてくるなど想像もしていなかつたのだ。だからこそこの台所であり、バリアフリーなのだから。ふと、沙織は思つた。みほの母親が一体何を考えているのかと。

「ねえ、みほの家つて三人姉妹だつたりする？」

「え？ ううん、私とお姉ちゃんの二人だけだよ」

「そう……」

「？」

その言葉を聞いた沙織は、ますますみほの母親が分からなくなつた。みほを勘当するのは、西住流として不甲斐ない結果をもたらしたからという理由で、分かりたくもないが分からなくもない。しかし、まほもまた勘当してしまつたら、西住流を継ぐ者がいなくなつてしまふではないか。ここ二、三日の間にネットで見たところによると、西住まほの能力はかなり高く、それこそ将来的には現家元のしほよりも強くなるのではないか。とも言われている。そんなまほまでも家から追い出すなんて、一体何を考えているのだろうか。はつきり言つてしまえばやりすぎであるし失格である。西住流家元としても、みほとまほの母親としても。

それから數十分後。

「「「いただきまーす！」」」

食卓には肉じやがと、グラタン、酢豚らしきもの、刺身の盛り合わせ、みそ汁等とかなり豪華な食卓になつていた。因みに、これらのおかずは全て沙織の監修の元に作られた物である。まず手始めに、みほは肉じやがに箸を伸ばした。口の中、舌で簡単に崩れるほどにジャガイモは柔らかく、さらに中にまで汁がしみ込んでいる。

「おいしい……」

「いやあ、男を落とすにはやつぱ肉じやがだからね」

なるほど、これもまた沙織にとつては持てるための一つの道具だという事だ。

「落としたことあるんですか？」

しかし、ここで華が痛烈な一言。

「何事も練習でしょ！」

「どうか、男子つて本当に肉じやが好きなんでしょうかね？」

「都市伝説じやないですか？」

「そんなことないもん！ちゃんと雑誌のアンケートにも書いてあつたし！」

みほは苦笑いするしかなかつた。そもそも人の好き嫌いなど人々

れぞれであるため、万が一その雑誌のランキングで肉じゃがが一位だつたからと言つて、全ての男子が肉じゃがが好きであるとは限らない。仮に肉じゃがが好きであるとしても、それを作つた人間にもより可能性がある。特に肉じゃがという物は家庭によつて味付けが違うおかずの一つである。肉じゃがが好きという物も、自分の母親が作る肉じゃがが好きといふ落ちが付いている可能性すらもある。果たして真相は、いや別にこの真相など知らなくてもよいであろう。特に、雑誌の記事を信じて疑わない沙織にとつては。とその時、みほは花瓶に刺さつてゐる白い花に注目した。

「お花も素敵……」の花は五十鈴さんが？」

「御免なさい、こんな事しかできなくて」

華は指を切つてみほから絆創膏を貰つた後は、料理ができる自分がいても仕方がないという事で、少し外の方に出て花を探したのだ。もちろんのことだがそれは他人の花壇から引っこ抜いてきたようなものではない。たまたま近くの空き地に自生していた物である。しかし、それでも綺麗な花であることには変わりはない。みほは、謝罪する華に向かつて言つた。

「ううん、お花があると部屋がすぐ明るくなる。この部屋も少しだけ、殺風景かなつて思つていたし……」

「ありがとうございます」

「殺風景つていうかさ……」

「はい……」

みほの殺風景という言葉に対して顔を曇らせたのは沙織と優花里である。確かに、みほの部屋にはある物以外何もないなとは思つていたが、しかしこの部屋の内装を見る限り殺風景という言葉は似合つていない気がする。むしろ……。

「殺伐としているような……」

「なんで熊のぬいぐるみが包帯巻いてたり眼帯したりしてるので？」

「え?! ボコられグマだよ! 知らないの!」

「え?」

みほと出会つて史上、一番であろうテンションを浴びた沙織と優花

里は椅子に座っているため実際には動きでは見えない物の、心の中では一歩だけ下がってしまう。というか、一見しておとなしなしそうだった少女が、ここまで声色高くなると、そりやそうなるだろう。沙織は、みほの言つたボコられグマという言葉にどこか聞き覚えがあつた。はてどこであつただろうか。

「ボコられグマ」というと、確かに昔アニメ化もされていましたよね」「うん、ボコはね、世界一可愛くてどれだけボコボコになつても立ち上がる強い子なの!!」

「ボコ……ああ、そういうえばそんなアニメが昔あつたよな……」

ギリギリではあつた物の知つていた華のアシストのおかげでようやく沙織も思い出すことができた。そういうえば、自分がまだ幼かつたころに、そんなぬいぐるみが爆発のように流行して、脱兎のように流行りが過ぎ去つていつた覚えがある。正直身体中のいたるところを汚しているあまりにも痛々しい見た目は、何故当時ちよつとだけブームとなつたのかという果てしない疑問へと彼女たちをいざなつてくれるのかもしれない。

「そう!そして今もお昼16時30分からアニメが放送されているの!知らない?」

「え、ツ」

「まあ、そうだつたのですか」

「知りませんでした……」

このみほの発言に三人ともある意味で驚いた。一昔前にブームが過ぎ去つたアニメが、まさかまだ放送され続けているとは。いや、もしかすると再放送であるという可能性もある。しかし、もしもそだつたとしても再放送という物はかつての人気番組を中心に放送する物。数多ある番組の中から選ばれるのだ。その中に、ちよつと流行つただけのボコのアニメが食い込んでくる等想像もできなかつた。「それでね、ボコの何がいいのかっていうとね!」

「うわあ、長くなりそう……」

「私、家に帰りが遅くなるつて電話してきます」

みほの状況から、沙織と優花里は何かを察した。優花里にとつて、

今日の前にいるみほの表情その他が、まるで戦車を目の前にした自分そのもの、つまりマニアの表情であると言つても過言ではない。そう感じ取つた優花里は、実家の理髪店に自分が幾分か帰るのが遅くなることを伝えに外に出ようとした。しかし、ドアを開けようとしたその時、ドアノブが回り、外開きのドアが開いていく。

「優花里さん、来ていたんだ」

「まほ殿、はい！お邪魔しています！」

「私達もいます。今、晩御飯を食べ始めたところなんですよ」

「へえ、そうなんだ」

まほは、そう言いながら食卓へと来た。そして、その雰囲気をみて、姉妹二人での食事もいいが、やはり大人数での食事という物もいいのかもしれないと思った。

「あ、お姉ちゃんお帰りなさい。生徒会のお仕事どうだつた？」

「ん？ ああ……」

まほは、みほにそう聞かれて思い返してみる。だがしかし、どうだつたかと聞かれれば一般的に考えればかなり大変だつたと言わざるを得ないような仕事の量だつた。まほは要領よく仕事をこなし、少しだけ自動車部の仕事を手伝つて帰つてきた。どちらかというと自動車部の仕事のほうが肉体労働があるので疲れたが、しかし体中が疲れ果てるほどに働いたとは思えなかつた。

「まあ、滯りなく終わつたよ」

「そうなんだ、今ねツ！」

「まほさんに質問があります!!」

「ん？」

みほがまほに向かつて何かを喋ろうとしたその刹那、沙織がみほ以上の大聲を出しながら手を挙げた。沙織は、まほが帰つてきて話が少しだけ中断した今しか話を変える時間はないと思ったのだ。まほは、そんな沙織の様子を見てもしかしてとボコの方を一瞬だけ見て察し、沙織の話を聞くことにした。

「なにかな？」

「あ、明日戦車に乗るじゃないですか。だから、えつと……コツみたい

なものを教えてもらいたいです！」

「コツ……か」

まほはそう言われて考える。コツと言われても自分やみほは戦車長として戦車に乗つっていたわけで運転の経験は、一切とまでは行かないがほとんどしたことがない。他の役割に関しても自分が教鞭をとれるほどに強く言えるほどエキスパートであるわけでもない。それにもしもそのようなことで沙織達に伝えたいことがあるというのならば、その現場で指揮を取ればいい。ならば、とまほは心構えについて説くことにした。

「そうだな……では一つだけ忠告したい」

「忠告？」

「ああ、それは……」

「絶対に逃げるなつて……それがコツなの？」

「はい、そうです」

まほが沙織達に話しているころ、一年生チームでも同じく戦車に乗る際の心構えについて愛里寿が語つていた。なお、こちらもまたみほ達と同じように愛里寿の家で晩御飯中である。因みにメニューはスタンダードなオムライスだ。

「でも、そんなの当たり前じゃない？」

「うん、逃げてたら勝てないもんね」

そう、彼女たちも知つている。戦車道だけじやない、何事においても逃げていれば、絶対に勝てるはずがないという事を。だが、愛里寿は知つている。洗車に乗るときのあの感覚を。今ではもう忘れてしまっている。もう慣れてしまつていて。生まれたころから戦車に乗つていた自分にとつて、戦車という物は自分の友達も同じ。だから、恐れなんてものはなかつた。だが、彼女たちはどうだ。自分とは違い、戦車とは縁遠い生活を送つていた彼女たちにとつて、戦車はどう映つてしまふのだろうか。そう考えた時、愛里寿はこの答えを無意識に出していた。

「そうかもしれません。しかし、実際に戦車に乗つてみた時を考えて

みてください

「戦車に？」

「はい……戦車の中は、普通の車のように広々としているわけありません。それに、クツシヨン性のある車とは違つて、戦車は履帯から直に移動するときの揺れや衝撃が中に伝わってくる。M3リーの最大時速は39km……軽自動車よりも遅いですが、それでも中に伝わる衝撃はあります。それに、弾が当たつた衝撃、いや当たらなくて地面に弾が当たつただけで内部にも衝撃が来る。私はもう慣れてしまっていますが、狭い車内でそんな怖い目にあつたら……きっと、逃げ出しちゃくなるかもしません……」

「でも、戦車道で使う戦車つて特殊なカーボンで守られているんじや……」

現在戦車道の試合に使われる戦車は、特殊なカーボンによつて装甲がコーティングされて乗員の安全が確保されている。それに、砲弾が命中して、装甲が貫通したと判断されて行動不能となれば、それ以上攻撃をしてはならないというルールもあり、安全性には留意しているのだ。

「確かにそうです。私の言う逃げるというのは、戦車の外に出て逃げないでくださいという事です」

「戦車の外……」

「はい……戦車道の歴史の中で、重傷者や死者が出ることがあつたんです。でも、それは全部戦車の外に出ていた時……みほさんも大怪我を負つたのは……」

「……」

みほもまた、激流の中に落ちた戦車を追つて川に飛び込んだが故にあのような大怪我を負つてしまつた。みほも知つていたはずだ。外部からの衝撃については大丈夫だという事を、彼女が危惧したのは、内部にある機材によるケガであつた。しかし、結果的にあの出来事は、戦車の中は安全であり、戦車の外はより危険であるという事を証明しただけにすぎなくなつてしまつた。

「戦車は、確かに今では戦車道にのみ使われるようになつています。

でも、元をただせば、人を傷つけるためだけの道具、それを忘れないでください」

「……」

そう、結局はそれだ。戦車は元々、人を殺すために作られた道具。守るために建前を使って使っていたこともあつたがしかし、結局は人殺しの道具としてしか使われたことはなかつた。本当の意味で誰かを助けるために使つたという記録は、ごくまれにしか文献に登場することはないだろう。よしなば、そんな出来事があつたとしても、数多くの人殺しの歴史の中に紛れて消えてしまつてゐるだろう。多くの善行であつたとしても、たつたひとつ残虐な殺戮に優るものはないのだから。

愛里寿の言葉は、その場にいる六人の心に大きく響いた。そう、これから自分達が乗ることになる戦車は、たくさん負の歴史の積み重ねの先にあるものなのだ。愛里寿の言葉は、それを自分達の心に刻み付けるためのものだつたのだと、彼女たちは思つた。

「では、晩御飯も食べ終えたところで……」

「え？」

愛里寿は、オムライスの乗つていた皿を片付けると、どこからか長い箱を二つ持つてくる。そして、それを梓たちの目の前に置くと、一枚のDVDのパッケージを箱から取り出すと言う。

「ボコのアニメの全話を見ましょう」

「え……」

愛里寿は、今までに彼女たちが見たこともないほどの純粹な笑顔でそう言つた。実は、愛里寿もまたみほと同じようにボコのファンであつた。しかし、みほにとつてのまほとは違い、愛里寿の周りにはボコについて聞いてくれる者はいなかつた。けど、人間の習性なのだろうか、自分が好きな物を他の人にも知つてもらいたいという抑えることができない欲求なのだろうか、愛里寿は自分の部屋に友達を連れてきたその時から、ボコの話をしようと思つていたのだ。

他の一年生六人は、明日は授業がないとはいえた初めて戦車に乗るために家に帰つて寝たかった。だが、その愛里寿の笑顔と、樂

しそうな姿を見ると、断る気にもなれなかつた。かくして、愛里寿の部屋でボコのアニメ上映会が始まつた。

そして……。

「頑張れー！ボコーッ！」

「結局、アニメを全話見ることになつてしまつた……」

「ハア、家に今夜は帰れないと言つたら母に『赤飯を炊こうか』と言われてしまつた」

「まあ、しかしそれは確か初めて……」

「ごめんね、みほはボコの事となつたら私にも止めることができないから……」

「いえ、良いんです。高校生になつて徹夜で勉強することが多かつたから、慣れて いますし」

「それになんだか、あんなに楽しそうなみほを見るのも、楽しいし」

「ありがとうございます……」

こうして、二つの寮の部屋で同じアニメを見ることになつた。結論から言えれば、この二組にとつていい夜を過ごせたという事は確かである。

翌朝、彼女たちにとつて運命の日がやつてきた。大洗学園戦車道の歴史、その真の再始動の日だ。並びに、それは戦車道の歴史において煌々たる光をもたらし、下火になつて戦車道という文化の灯りを明るく照らし出した記念すべき始まりの日であつたのだ。後の歴史学者は言つてゐる。一時期は戦車の種類が頭打ちの限界に達し、マイナーな文化にまで落ちぶれた戦車道が、どのようにして華道、茶道、に並ぶメジヤーな伝統文化と言われるようになつたのか。それは紛れもなく、この大洗学園の功績があつてこそなのだと。だが、当の本人たちはまだ知らない。自分たちがこの先どのような歴史を刻んでいくのかを。彼女達はまだ知らない。どれだけ多くの友人と巡り会つていくのかを。彼女達はまだ知らない。道路の真ん中に今にも倒れそうな少女がいるなど。彼女達はまだ知らない。自分たちのおかげであるアニメが世界的に爆発的人気のカルチャーになるなどという事実を、まだ知る由もなかつたのだ。

「ふああああ……結局徹夜しちゃつた……」

「それでもまだ全シーズンの半分も見ていないなんて、驚きです……」

「人気が無くなつたと聞いていたのですが、まさか十数年間連続して放送されていたなんて……」

「それがボコだから」

みほの車椅子を押している華の言葉ももつともであつた。人気が下火になつたと聞いていたが、まさか最初の放送から現在進行形で放送が続いているなど思いもよらなかつた。みほが言つていた現在でもお昼16時30分からアニメが放送しているというのは、再放送でもなんでもなく、新規のアニメーションとして放送中という事だつたのだ。その後、結局ボコられグマシーズン1の半分、それと劇場版まで連続して見させられ、気がついたら朝になつてしまつていた。しかし、それでもみほとまほはそれほど辛い様子を見せていなかつた。「御免、本当なら昨日はゆっくり寝てもらつて、万全の状態で戦車に乗つてもらいたかつたのに……」

戦車はどれも、中がかなり狭くて空気が薄く重い。それに加えて揺れも直に身体に伝わってくる。そのため、寝不足の状態で戦車に乗り込めば恐らく車酔いならぬ戦車酔いするだろうとまほは考えていた。しかし、両手が塞がつている沙織は、華と自分のカバンを持つている方の手を上げて言う。

「まあ心配しなくとも、学園艦に乗っているだけで揺れには強くなっているし、徹夜すんのもテスト前はしょっちゅうだから慣れっこ慣れっこ」

「はい、それにボコられグマも意外に面白かったですし！」

「でしょ！だからみんなも武部さんみたいに……あれ？」

「ん？」

その時である。彼女達は歩道を右往左往しながら歩く少女を見つけた。制服は自分たちと同じものだから大洗学園の生徒なのは間違いないが、今にも倒れそうで見えていて危なつかしい。道路側にはガードパイプがあるため道路に倒れて車に轢かれるという事はないだろうが、それでも頭を地面にぶつけてしまう恐れがある。そんな危なつかしい少女をみた武部がため息をついてから、カバン二つをみほに預けて近づい言う。

「もう、麻子しつかり歩いてよ」

「沙織か、こんなところでどうした？」

「それはこつちのセリフ。また朝起きれなかつたの？」

「それはお前もだ沙織」

「うつ……」

沙織は、少女に痛いところを突かれ一瞬顔がこわばつた。正直に言うと、今現在彼女たちは遅刻ギリギリなのだ。ボコの映画を見終わつた後、睡魔に襲われてしまつた五人は、仲良く眠り込んでしまい、起きた時にはすでにみほとまほが登校する時間を過ぎてしまつていた。いわゆる寝坊である。結果、朝食も取らずに学校に向かっている最中であるのだ。とりあえず途中にあるコンビニで朝ご飯とお昼ご飯、それから眠気覚ましの清涼菓子を買って、早歩きで学校に向かっている最中だつたのだ。本当なら、走つて確実に登校時間に間に合わ

せたかつたのだが、みほが車椅子であるため安全に配慮するかたちで歩幅を合わせているのだ。なお、まほとみほがそれほど眠たそうに見えなかつたのは眠り込んだことに関係がある。

ショートスリーパーという物を知つてゐるだろうか。人間の平均睡眠時間は7時間から8時間と言われているが、時々6時間以下でも問題なく生活することのできる人間がいる。かの有名なフランスの軍人であるナポレオン・ボナパルトは、三時間しか眠らなかつたと言われている。これには諸説あるらしいのだが、今この時に真偽を問うのは無駄な行為であるためやめておこう。ともかく、ナポレオンの睡眠時間が通常の人間よりも短かつたというのはかなりピュラーナ逸話の部類である。このナポレオンが短時間睡眠者、いわゆるショートスリーパーと言われているのだ。多少横道にそれてしまつたが、みほとまほもまたこのショートスリーパーと呼ばれる部類の人間なのだ。黒森峰時代まほは、西住流として作戦の立案や勉強を並行して行つていたために、睡眠時間が短くなる傾向が多かつた。それは、たとえ次の日に大事な試合が控えていたとしても同じ、いやむしろ試合がある前日にこそ睡眠時間が短くなる傾向にあつた。だが、そんなときでもまほは何ら苦痛を感じず、むしろ清々しい気持ちで戦車道に臨めていた。みほは、まほのように作戦立案に毎日駆り出されるという事はなかつたが、しかしショートスリーパーという物は遺伝的なものであるためか、みほもまた短時間の睡眠でも平氣であるのだ。

「武部さん、知つてゐる人？」

顔がこわばり、固まつてゐる沙織にみほたちは近寄つてそう聞いた。沙織は、表情を元に戻して言う。

「う、うん。幼馴染」

「冷泉麻子だ、よろしくな」

「はい。私は西住みほです」

「私はまほ。武部さん、また朝起きれなかつたつて……」

「ああうん、実は麻子つて低血圧で朝に弱くつて……それで何度も遅刻しまくつて進級も危ないつて言われてて」

つまり、西住姉妹とは真逆の人間であると言つても過言ではない。

それにしても、この早い段階すでに進級が危ないと言われるとは、いったい麻子はどれだけ遅刻しているのだろうか。結局、麻子は支えていなければ立つていられないほどにフラフラしているため、沙織が右肩を、まほが左肩を支えながら歩くこととなつた。この時点で遅刻は確定的であるがしかし、遅刻を理由にして目の前で困っている人間を放つておけるほど彼女たちは非情ではなかつた。

「もうこれで、遅刻は確定的ですね」

「でもいいじゃん『寝坊遅刻も皆ですれば怖くない』っていうし」

「それを言うなら、『赤信号、皆で渡れば怖くない』じゃないかな？」

「そうそう、それそれ」

群衆心理を一言で表した言葉として有名なこのセリフ、実は元々は漫才のネタであつたという事はご存知であろうか。今では、映画監督して世界中で有名であつたある漫才師のコンビが漫才で言つた言葉であるそうだ。一人でやつたら悪いことであると批判されるようなことも、大勢やつたらやつてもいいようなことのように見えてしまうということである。もちろん赤信号の時に道路を渡るとどうなつてしまふのかは、想像しなくとも分かり切つているだろうが、重ね重ねそのようなことしないように。

そんなこんながあつて、みほたちはようやく学校にたどり着くことができた。時間的にはすでに遅刻、みほとまほにとつて黒森峰時代も含めて初めての遅刻となつた。だが、なにも嫌な気持ちにならなかつたのはどうしてだろうか。すでに遅刻しないという事は諦めていたからだろうか。それとも、人助けをしたという優越感があつたからだろうか。いや、多分前者であるだろう。そうでなければ困る。もしも後者であつたならば、それは偽善なのだから。世の中は報酬なしに回ることがない。会社で働くのも、お金という働いた分に見合う報酬があるから。その報酬がなかつたら、世の中でよいことと呼ばれている募金活動もボランティアもできない。結局社会という歯車は報酬という物がなければ動くことができない。さらに言えば、ボランティアや募金を人を助けたいといつ一心で行つてゐる者が何人いる事だろうか。もしかしたら、何人かは人を助けているという優越感を得たい

と思って行っている者がいるのではないだろうか。無欲の勝利という言葉があるが、無欲というのは、もはや無我の境地といつても過言ではないのではない。人は、褒められたいという欲求を捨てることができない生き物だ。誰かに褒められたいから勉強するし、誰かに褒められたいから道端のゴミを拾うし、誰かに褒められたいから愛というものに盲目になる。だから、私は世の中で天然と呼ばれる人たちがうらやましいのだ。何も考えず、目の前に辛い顔をしている人がいれば、助けを求める人がいれば、迷わず何の疑いもなしに手を伸ばせる人達に憧れているのだ。優越感という人間にとつて切つても切り離せない感情、しかしたとえ否定したとしてもそれが人間の心の中から完全に消え去ることはない。だが、ちょっとずつでいい。ちょっとずつ、報酬を求めない生き方をしてもいいのではないか。一度でいいから、自分は報酬なんてもの欲しくない。そんな醜い物のためにこんな事をしたわけじゃない、だからそんなものは欲しくないです。そんなことを言つてみたい。報酬があるからこそ人は何かをする努力がある。だが、報酬がなくても愛がそこにあるのなら、一步づつ一歩づつ歩み寄つていけばいい。人間がたどり着くことのできない領域である無欲という大きな壁に。

「冷泉さん、これで連続245日の遅刻よ」

校門の前に立っていたおかつぱ頭の生徒が、まほたちに向かってそう言つた。というよりも、沙織とまほの間にいる麻子に向かつて言った。腕に付けていた腕章か察するに風紀委員なのだろう。だが、それよりももつと気になることが一つある。

「245日? 一年は確か365日で、長期休みを引いても……高校入学からずつと遅刻していることになりますん?」

そう、夏休みが大体で40日、冬休みは14日、春休みも14日と仮定して、国民の祝日が16日で、その内学生に関係のあまりない元旦や山の日等を除いて13日程として、土日の休み云々を引いて高校二年生となつてからの日数を足すと、それぐらいになる。というかむしろ遅刻日数の方が多い。

「まあ、単位が足りてれば何とか進級できますし」

「それに、これでも麻子つて学年トップの成績だしね」

「でも、学校の規則での出席日数から換算すると、ギリギリなの」

一応、出席日数が何日なければならないというちゃんとした法律などはないが、しかし学校の規則でそれぞれに決まっている日数という物がざらにある。どうやら、大洗の学校の規則から風紀委員の彼女が計算したところ、実際麻子の出席日数から遅刻した時間を引いていくと、かなりギリギリであるというのだ。

「大丈夫なんですか？」

「知らん。そど子に聞け」

「そど子さん？」

「だから、そど子つて呼ばない。さつきから言っているけど、今でも進級できるかギリギリだから、明日からは遅刻しないように」

「朝は何故来るのだろう」

「あさは必ず来るものなの……それで、二年生の武部沙織さん。道端で冷泉さんを見て無視して登校するようについていたはずよね」

「アハハ、でも放つて置けなくて」

「全く、貴方までそんなものも持ち込もうとして……規則は守るためにあるの。学業に関係のない物は持ち込まないことってちゃんと規則に書いてあるでしょ」

「？」

沙織は、そど子のその言葉の意味が分からなかつた。一体自分が何を持ちこもうとしているというのだろうか。別に風紀委員に何か言われるような物は持ち込もうとしていない気がするが。その時、沙織に肩を貸してもらつてている状態の麻子が思い出したかのように沙織に言つた。

「そういうえば 沙織。お前は不思議系にでも乗り返したのか？ 痛いクマのぬいぐるみなんて持つて、彼氏が寄つてくるとでも思つているのか？」

「え？……あ、っ！」

その時になつてようやく気がついた。自分自身が持つてている者について。彼女は、別に不思議系になつたわけではないのだ。ただ、忘

れていただけなのだ。忘れていたというか、無意識の中持つてきてしまっていただけなのだ。それを今の今まで気がつかなかつたというだけの話。そう、沙織にとつてもそれは青天の霹靂と言うべきものだつた。

「ボコ!?え、私いつから!？」

「寮を出た時からずっと持つていましたよ」

「はい。だからみほ殿の車椅子を押すがかりを五十鈴殿に任せたじやありませんか」

「そ、そ、うだつたんだ……」

全く気がつかなかつた。思い返してみると、確かに自分はアニメの第五話を見ていたぐらいにボコのぬいぐるみに触れていた記憶がある。それからずつとぬいぐるみを膝の上に乗せてアニメを見て、うた寝して、起きてすぐにカバンを持つてみほの部屋を出た。確かに、ぬいぐるみを置いた記憶はなかつた。そういうえば、通学路の途中でボコの話になつた時にみほが自分みたいに……、というような話をしようとしていた。結局麻子の発見によりその話が続けられるることはなかつたが、よく考えるとあれは、自分のようにぬいぐるみを持つて行つてもよかつたという事を言おうとしていたのかもしれない。

「ち、違うからね！私、別に不思議系なんてものになろうとしているわけじや……」

といいながら、沙織はボコの目を凝視した。昨晩から思つていたが、よく見ると可愛いものだ。片耳に巻かれている包帯や、ところどころに貼られている絆創膏その他諸々、普通のぬいぐるみにはないであろう魅力を感じてしまう。たしかに、ちょっと痛々しい見た目をしているのは間違いないが、むしろそれがアクセントとなつて可愛さを増強させていくように見える。そう考えると、なんだかボコの目がキラキラと輝いているかのように幻視してきた。何なのだろう、この気持ちちは。まるで恋でもしてしまつたかのように胸がときめきだす。そう、沙織は恋をしてしまつた。というのは大げさではあつた物の、実際ボコというキャラクターが好きになつてしまつていた。

「とにかく、学業に関係のない物は没収よ」

「な、なんですよ！良いでしょ別に！ゲームとか漫画とは違つて誰の迷惑にもならないし、今日は選択授業だけでしょ！」

「規則は守るためにあるのよ。よこしなさい」

「絶対に嫌！」

と、ぬいぐるみを学校内部に持ち込もうとする沙織と、それをさせまいとする風紀委員のバトルが始まった。どう考へても不毛な戦いにしか見えない。

「今のうちにさつさと入つてしまおう」

「みほさん。帰つたら私にも一体貰えませんか？」

「あつ、私も欲しいです！」

「うん！あ、でも持つてきている子には限りがあるから、こんど港に停泊した時に一緒にデパートに行きましょう」

「よかつたなみほ、三人もボコのファンができて」

「ファンなのか？沙織のあれは、むしろ洗脳に近い気がするぞ」

戦いを始めた二人を尻目に、みほたちは学校の中へと入つて行く。かなり時間がかかりそうであるし、これ以上遅刻したら他の戦車道履修者の迷惑にもなりかねない。後者に入る一步手前にたどり着いた麻子は、肩を貸してくれていたまほからゆつくりと離れて言う。

「お前たちまで遅刻させて悪かつたな」

「いえ、寮を出た時から遅刻するのは覚悟していました」

「いつか借りは返す。またな」

そう言うと、麻子はゆつくりと校舎の中へと入つて行つた。なんとなく不思議な生徒である。というのがまほとみほの第一印象であつた。こうして麻子と別れたみほたちではあつたが、この時まだ知る由もなかつた。麻子のいった借りを返す時がすぐに来るなどと。沙織はまだ知らなかつた。ボコに魅了された者が、自分たちの他にもまだまだいるという事を。まだ知る由もなかつたのだ。

2—8 始動

校門前にて止められた武部沙織以外の四人は、冷泉麻子と別れた直後に集合場所となつてゐる倉庫前に向かつた。当然ながら、彼女たち以外の履修者はすでに集合済みで、みほたちが一番最後となつてしまつた。しかし、まだ教官も来ていないという事で、その点からみればよかつたと言えるだろうか。

それから数分後、沙織もまた倉庫前へと来た。しかし、その手にボコの姿はなく、何となくげつそりとした印象があつた。

「うう……結局没収されちゃつた……」

やはり規則は規則なのか、ボコは学業に関係のないものとされて没収されてしまつたらしく、放課後まで風紀委員管理となつてしまつたらしい。

「まあ、規則ですからしようがないですね」

「でもただのぬいぐるみじやん、ゲームとか漫画と違つて学業とは何にも関係ないじやん……」

「学業と何の関係もないというのが問題なのでは？」

「うぐ……ああ、ボコ……」

華からのきつい正論。それにしても、一体どうしてこうなつてしまつたのだろうか。昨日までボコの事を全く知らなかつた沙織がここまでボコの事を溺愛するようになつてしまふなど想像もできなかつた。麻子も言つていたが、これはもはや洗脳の域に達しているのかもしれない。ボコの魅力が凄まじいのか、沙織の感受性が人よりも優れていたからなのか、そのどちらともどれるのだが、にしてもこれはちよつとやりすぎである。

「それにしても、教官遅くない？」

「ああ……ん？」

まほは聞いた。空高くから飛行機のジエット音がするのを。いや、これはそんなに高くはない、むしろ低い位置からの音。そう、すぐ近くを飛ぶ飛行機の音だ。空港か自衛隊の基地に降り立つならこのような音が聞こえるのは分かるのだが、この当たりの海域には島など、

飛行機が降り立てるような陸地はない。と、いう事はこの音の持ち主はここを目指していると考えるのが普通であろう。

その時、学園の向こうから一つの大きな機影が姿を現した。それは、セスナなどと言った小型機よりも大きく、普通の旅客機よりも大きい外観をしている。どう考へても一般の飛行機であるようには見えなかつた。その飛行機の姿を見た優花里は興奮しながら言う。

「ああ！あれば、空自が所有しているC—2輸送機！前に自衛隊の交流イベントでも見ました!!」

C—2輸送機とは、1973年から運用が開始されていたC—1輸送機の後継機として2016年から運用が開始された輸送機である。配属先の基地からは『Blue Whale』、青い鯨の愛称で呼ばれているのだと、あとさらに言えば、実は諸々の事情により開発が遅れ、2018年9月まで運用試験を実施した後、空輸任務に使用される予定であるそうだ。2018年の9月まで運用試験をして、2016年から運用開始となつてているのはどういうことなのだろうか。という疑問がわくのだが、詳細は定かではない。

C—2輸送機（今回の機体に関しては通常の機体に戦車を積み込むように少しスケールアップをしたC—2改らしい）が、学校の上を通過し、すぐ近くにある駐車場の上に来たその瞬間、下部のハッチが開いていき、上空へと上がる際に斜めになつたその一瞬の時に、パラシユートを受けた一輛の戦車が降りたつた。

「おおお！！あれば、自衛隊の所有している最新鋭戦車、10式戦車!!」「ひとまるしきつて？」

「現在日本自衛隊が所有し、かつ国産の戦車の中では一番新しい戦車だ。当然、戦車道の試合に用いることはできないが……正直第二次世界大戦以前の戦車100輜で10式に挑んで勝てるビジョンなど浮かばない。それほどの戦車だ」

10式戦車は、陸上自衛隊が運用する国産戦車としては、61式・74式・90式に次ぐ四代目になる主力戦車である。そのスペックは、正直あまりにも凄すぎてよくわからないが、世界トップクラスの戦車であることと、あとファイクションのみの話ではあるがかつて『ウ

ルトラマンに出てきた際に複数体の敵怪獣を倒した実績があるらしい』という事だけ分かつてもらえればどれだけ強いのかがよくわかるのかかもしれない。

「それにしても随分乱暴というか大雑把なような……」

「はい、あと少し待つてればこっちのグラウンドに降りられたのに……」まさか一応は車だから駐車場に止めなければならないと思つたなどという、戦車探しの時の沙織の意見を実施しようとしているのかと思つたが、流石に停まつている普通車にぶつかるリスクを押してまでそのようなことをするとは思えない。

「学園長の車がッ！」

……いや、もしかしたら最初からぶつかるつもりで駐車場に降りたのかも知れない。地面に降り立つた10式は、そのまま滑るように駐車場を滑走して止まつた。一台の赤いスポーツカーを巻き添えにして。

「学園長か……そういうえば私は会つたことがないが、学校の中にはいるという事なのか？」

「お姉ちゃん、気にするとこちよつと違う気がする」

まほが大ボケをかましている間にも、10式戦車は遠慮することなく方向転換をしながら学園長の車を押しつぶす。それは、まるでせんべいが平らになるかの如くに綺麗につぶれて、もはやおいしそうとまで思つてしまつた。

「ああ……あれはもう修復は無理そうだね」

「自動車部も匙投げるんだ」

「どうか、あれつて確かフェラーリ……」

「安くても何百万はくだらない……学園長も気の毒に」

とは思うが、しかしこういつた映像はなんだか知らないが胸ガスカツをしてしまう。学園長には申し訳ないがしかし、これも学校の運営責任者としてやらなければならぬ戦車道関連の資料作成の全てを学生に任せたことの因果応報と思えば、さほど罪悪感もなくなるてしまうだろう。

学園長の車を潰した戦車は、グラウンドと駐車場の間にあるフエン

スを隔てた向こう側にフエンスと平行にして停車すると、入口が開いていき、中から一人の女性が現れる。

「こんにちわ！」

「……」

先ほどまでの行動すべてがまるでなかつたかのように、清々しい顔でそう挨拶をした女性。まほは、その顔に見覚えがあつた。

「あの女性は確か……」

「お姉ちゃん、知っている人？」

「ああ、少しば……」

それから数分後、整列した戦車道履修者の前に女性は立つていた。女性は、10式をこれまでの大雑把な行動とは裏腹に律儀に停車させてきた。そんな気遣いができるのであれば、もつと優しめな着地を見せてもらいたかった気もするが、迫力もあり、戦車を知つている自分達ですらその光景が魅力的に映り、少しだけ心の中で感心してしまつたため、いいデモンストレーションを見せてもらつたという事にしておこう。

「会長に騙された……」

「でも、確かにかつこよくて素敵そうな方じゃないですか」

沙織は、さらに一段と落ち込んでいた。彼女は、女性ではなく、男性が来るのだと思い込んでいたからだ。しかし、こうなるという事はあらかじめ予想で來ていたことだつた。と、いう事の説明は以前にもしたであろうからここでは省く。

「皆静かに、こちらは陸上自衛隊富士教導団戦車教導隊所属、蝶野亜美一等陸尉だ」

「よろしくね、戦車道は初めての子が多いと聞きますが、一緒に頑張りましよう」

「蝶野一尉」

「あれ？あなたもしかして……」

蝶野は、自分に声をかけてきた人物に見覚えがあつた。かつて、自分が世話になつた西住流現家元の西住しほの長女、西住まほだ。前年度の戦車道全国大会の数か月後に、大怪我を負つた妹のみほと共に西

住流から破門され、戦車道の名門黒森峰から去り、その後消息不明となつたと聞いていた。風の噂で海外に渡つたとまで言われていたが、まさか、この学園のどこかの山奥に籠つたとまでも言われていたが、まさか、この学園艦に乗つていたとは。だがまほがいるという事は必然的に……。

「はい、お久しぶりです。以前はお世話になりました」

「そんな、私の方こそ師範……いえ、家元にはお世話になつたから……あなたがここにいるという事は……」

「はい、みほもいます。今は、機材の点検のために席を外していますが……」

実は、蝶野がこの場に来るまでの間に、みほは自動車部の部員と共に倉庫に向かつた。どうやら、車椅子のみほのための機材にちょっとした問題が発生したという事らしい。詳細はまだ聞いてはいないが、足が不自由なみほにとつて試合中に機材が壊れるという事ががあれば、下手をすれば命にもかかわることになりかねない。何事もなければいいのだが。

「そう……ここにいるつてことは、戦車道を？」

「はい……西住流とは関係なく、純粹に戦車道を楽しむために……」

「そう……分かつたわ、武運長久を」

「ありがとうございます」

蝶野は、ある言葉を放とうとしたが、しかし言うに言えなかつた。やはりというか、予想していた通り、彼女は履修者にはあの事について話していない様子。そうでなければ、純粹に戦車道を楽しむためには等という言葉が出るはずがない。そう、彼女たちは知らないのだ。まさか自分たちがこの学園艦の運命を託されているなど。夢にまで思つていないのであろう。

「教官！今日はどのような練習を行うのでしょうか！」

「そうね、本格戦闘の練習試合。早速やつてみましょうか！」

「ええ！いきなりですか！」

蝶野のいきなりの発言に、皆一部を除いた面々は驚きを隠せなかつた。まほもまた、表情には出さなかつたが、内心でかなり驚いていた。

「蝶野一尉、それはまだ早すぎるのでないでしょうか？まだ戦車の

走らせ方すらも大多数が知らないのに……

「習うより慣れろ。何事も実践と実戦から、じゃないと人は成長しないわ。それと、一尉じゃなくて教官でね」

「はあ……」

「皆も聞いて。戦車なんてバーツ！と動かしてダーツ！と操作してドンッ！と撃てばいいんだから!! そう考えれば気楽な物でしょ？」

「確かにそうですが……いや、そもそも戦車乗りの基本の動かすことと、戦車道としての戦略を立てるの中間から開始したほうが早いのか？」

まほはそう考える。それに、正直なところ全国大会までそれほど時間がない。これから戦車の乗り方のレクチャーを受け、簡単にでも戦術を立てて、それを覚えなければならぬ現状からして、下手でもいいから試合勘というものを養つた方がいいのかも知れない。

「そう言う事。それじゃ、それぞれのスタート地点に向かってね。解散！」

蝶野は、手に持った地図を広げるとそう言つた。所々に印が付けられているが、それがスタート地点なのだろう。しかし、ここでもまた大難把というかなんというか、そんな物を見せてしまうと、最初にどの位置に敵がいるのかを悟られてしまうではないか。とはいってもそんな事を考えるのは自分の他にはもう一人、いやもしかしたらさらにもう一人いるのかもしれないが、とにかくごく少数しかいないだろう。蝶野の一言でそれぞれチームごとに分かれ始めた履修者の面々。愛里寿はそれを見ながら果たしてどう動こうかという事を思案する。だが、それもこれも全ては一度同じ戦車に乗る面々のスペックを見てからでないといけない。それも頭に入れなければ、何事も始まらないのだ。

「解散つて言われても、戦車の動かし方も分かつていないのでなあ……」

「それはどのチームも同じだよ。でも、私たちはまだましな方だと思

う」

「うん！ だつてこつちには愛里寿がいるし！」

「おだてないでください……」

「愛里寿？」

蝶野は、あやが放つた名前に聞き覚えがあつた。会つたことはなかつたものの、戦車道の関連書籍の中に写真や名前が掲載していた少女だ。先ほどまでは、その低身長から人の陰に隠れてしまっていた物の、それぞれがばらけだした今、ようやくその少女の姿を捉えることができた。確かに、自分が勝手に知つていた少女の顔によく似ている。しかし、蝶野は信じることができなかつた。何故ならば、戦車道をよく知つている人間からすれば、それがどのようなることであるのかを理解できたからだ。蝶野は、改めて確認するためには、愛里寿に近づいて聞く。

「貴方もしかして、島田流の？」

「はい、島田愛里寿です」

「そうなの……だとしたら凄いわねこの学校……」

「教官、島田流つて？」

「さつきも西住先輩が西住流つて言つてたけど……」

「戦車道には、華道における池坊、小原流、草月流。茶道における表千家、裏千家、武者小路千家みたいにたくさんあるの。いくつかの流派は時代と共にすたれていつたけど、それでも現代にまで残っている名門の流派はたくさんあつて、中でも二大流派と言われ双璧を成しているのが、西住流と島田流なのよ」

「へえ……あれ？ 西住先輩が西住流で、愛里寿が島田流つてことは……」

「そう、つまりこの学校にはその二つの流派の娘、次期家元候補とも言える子たちがいるという事よ」

「へえ、愛里寿つてなんか戦車の事詳しいなつて思つてたけど、名門の娘さんだつたんだ」

「言つてませんでしたつけ？」

「言つてなかつた……よね？」

「え？ どうだろう……そんなこと気にも止めたことなかつたし……」

などと、一年生四人がそれぞれに驚いている中、梓は一人保健室で

愛里寿と話していた時の事を思い出していた。あの時、自分自身まるで監督のようだと言つた愛里寿の『強くできる自信がない』という発言。今考えてみると、あれは戦車道という物をよく知つてゐるからこそその発言だつたのだ。愛里寿がそう考えるのも無理はない。何故なら、西住流である二人を除けば、自分たちは戦車という物に関するはずぶの素人。そんな子たちで構成されたチームを強くする自信、湧いてくる方がおかしい。だが、ここで梓はふと気がつく。強くできる自信がないということは、強くしなければならないという責任感の表出なのではないかと。ファイクションの世界でよく見るのだが、俗にいう名門と呼ばれる由緒正しい続柄は、常に勝ち続けなければならぬ。そのため、多くの苦労があるらしい。そのためには、時に人間らしさを失い、まるでマシンかのようにその分野でのエキスパート性を求められるのだと。特に、アニメや漫画では敵やライバルキャラとしてそのような存在があるが、もしかしたら、愛里寿は勝利という物に縛られているのかもしれない。絶対に勝ち続けなければならぬ。勝利以外の物には何の価値もない、そう思い込んでいるのかもしれない。これは、考えすぎなのかもしれないがしかし、そうであつたとしても自分達と愛里寿の付き合い方が変わるものではない。彼女が名門の家の子であつたとしても、自分たちの友達であることに変わりはないのだから。梓は、愛里寿の手を取ると言う。

「西住流でも島田流でも、愛里寿が私たちの友達つてことに変わりはないよ。それよりも戦車の動かし方教えてよ」

「……」

紗希もまた愛里寿の手を取つた。というかいたのか紗希。無口であるがゆえに彼女は何かのアクションを起こさなければこちらとしても見つけることができない。先ほどの蝶野が島田流と西住流の事について話している時にも上の空であつたようだが、ちゃんと話は聞いていたようで、彼女もまた梓の意見に賛成だそうだ。そして、他の四人もまた……。

愛里寿は、何となくであるがこのような反応が来るであろうことを予測していた。元々、戦車道を知らない彼女たちにとつて、自分達の

正体など知ったところでそれほど驚くようなことではないと考えていたから。それに、きっと彼女達だつたら自分の正体など関係なしに、友達として付き合ってくれる。そう確信していたから。愛里寿は、6人の友達と共にに行く。7人目の友達の元に……。

2—9 衝撃

あの日、人生で最も最悪な目覚めを迎えたあの日から数日の時が脱兎のように過ぎていった。自分の足のこととか、試合のこととかについて教えられてから、ひとしきりに泣いてて、それから数人の見舞い客が来たような気がする。けど、その時のやり取りは全くと言つていほどにお覚えていない。先生や看護師の話なんてものも、一切耳に入つてこなかつた。もう歩くことができないという絶望。それが、彼女的心を大きく蝕み、ガラスの靴のように少しだけの衝撃で壊れてしまいそだつた。だからなのだろう、彼女が目覚めたあの日、それ以来の言葉は……。

「オムツなんて、赤ちゃんだけがする物だと思つてたな……」

他人事であるかのようにそうつぶやいた。だが、それは彼女の心が行つた精一杯の反逆なのだろう。そうすることでしか、己の心を平穏をもたらすことができなかつたのだろう。だが、とりあえず彼女の呟きは確かに他人事のようではあるが、自分自身の状態について簡単に表した言葉であつたと言える。彼女が障害を患つたのは足だけではなかつた。脊髄は損傷した部位によつてそれぞれに症状が個別に変化する病なのだ。そもそも脊髄とは四つの部位に分けられている。上から頸椎、胸椎、腰椎、仙椎と呼ばれており、さらにそこからそれに番号で分けられている頸椎はC1～7、胸椎はT1～12、腰椎はL1～5、仙椎はS1～5という様に。そして脊髄損傷をした場合頸椎損傷から障害を受ける部位が多くなる。みほの脊髄はT110の部分が損傷してしまつて、それより下のT10～S5までの神経が繋がつて、その神経が障害を受けているのだ。そして、その間には排尿に関する神経、並びに直腸に繋がつて、それらが麻痺を起こしたため排尿障害と排便障害を患つてしまつたのだ。これにより、みほは膀胱に尿が溜まつたという感覚も、排尿を我慢するという機能も一切感じなくなつたため失禁、つまりおねしょをする確率がかなり高い状態にある。それに加えて、足も動かないためトイレに立つこともできないため、排泄セルフケア不足となつ

ている。オムツを使用しているのは、垂れ流しになる尿を受け止めるためだ。だが、それだけではまだ足りない。

排尿に限らずとも、人間のすべての行動、生理現象というものはどちらもそうではあるのだが、下腹神経や骨盤神経等多くの神経、膀胱排尿筋や内・外尿道括約筋等の筋肉が脊髄という道を介して相互に作用することによつて起こる複雑な物なのだ。それこそ、全てのメカニズムを事細かに書くとかなり長いものとなってしまうため簡単に書いては見たが、みほはT10という道が寸断されてしまったため、排尿、また蓄尿といったものが障害されてしまつていて。そのため、自由に排尿することができないどころか、完全に尿が溜まつて、少しづつ尿道を通つて漏れだすまで自分の膀胱に尿が溜まつていたという事実に気がつかないので。それだけ聞けば、ただおねしょするだけじゃないかと感じるかもしれないが、実は排尿が障害されるという事は、かなりまずい状況になる。血圧の上昇や膀胱痛、頻脈、果ては腎臓へダメージを与えて尿毒症にまで陥るリスクがあるのだ。これもまた、詳しくメカニズムを説明すると長いので、割愛するとして、最悪なところまで至ると、死に直結してしまうという事を頭に入れてもらいたい。

そうならないために、みほは脊髄損傷したその日から膀胱留置カテーテルを用いての導尿を行つてゐるのだ。ただし、それを使用していくともなお、いや異物が体内に入つてゐるのであるから、なおさら尿路感染症のリスクは大きい。だから毎朝彼女の陰部を洗浄するために病院のスタッフが来て彼女の下を洗つてくれていた。みほはそれに関して、本当だつたらみじめに思わないといけないのだろうかと思ひながらもしかし、腰から下の感覚が全くないからと別に気にも止めていなかつた。

みほは窓の外の景色を見る。もうここに何ヶ月ほどいるのだろうか。みほは時間の感覚が全くなかつた。一体何日この部屋で寝起きして、病院が出してくれる食事を食べて、ただ何もせずに一日が過ぎているのだろうか。実際には、みほの思つてゐる通りの月日が流れていることはなかつた。実のところ、あの事故があつてからまだ数日し

か経っていないのだ。ただ彼女にとつてはその数日が永遠のように感じていただけの事。みほは改めて自分の足を見て思う。

「早く治して、お姉ちゃんたちとまた戦車道したいな……」

治療して、リハビリをして、そうしたらまた歩けるようになるだろう。走れるようになるだろう。みほは現実を直視していなかつたしかし、それが普通なのである。障害受容の過程の一つに、コーンの段階理論という物がある。コーンとは、この障害受容の過程の一つを提倡した人間の名前であるが、それを深く語ることは止めておこう。コーンは障害発症直後を『ショック』であるととらえた。感覚がマヒし、実際には自分自身に起こっていることのはずなのに、まるで他人事のように感じてしまう時期。この時期には集中的なケアや医療を受けていて、治療を受けていれば完治すると淡い希望を持っている患者が多いそうだ。今のみほはまさにそのショックの時期に値するのだ。

みほは、できるだけ早くあの場所に戻りたかった。姉や仲間たちと共に戦う、あの勇ましく進む戦車の中に自分もまたいたかった。みほにとつては、それがまほと繋がっていられる唯一の時間であるから。今後、おそらく姉は戦車道界で大きな存在となっていくだろう。もしかしたら、日本代表として選ばれて、日本という国を背負つて戦うことになる。そうなつたら、自分とまほとの間は離れて行って、もう一度と一緒に走ることができないかもしれない。自分のような凡庸な人間が、姉と共に走ることはできるのは、この高校生という限られた時間の中でしかないのだ。だから、その短い時間をもつと有意義に使いたかった。こんなところで立ち止まつていてはいられなかつた。姉の背中を追いかけていたかつた。姉に、必要な人間としてみていたれたかつた。ただただ、姉と一緒にいたかつた。

その時、みほの個室に一人の来訪者が現れた。

己にとつて、戦車とは何なのだろうか。それは足。それは腕。それは心。それは鎧。それは服。それは指。それは機械。それは鉄。それは道具。

戦車にとつて、自分とは何なのだろう。それは眼。それは頭脳。それは心。それは耳。それは花。それは神経。それは血。それは肉。それは動物。

自分たちがここにいることによつて戦車はただの置物から人を殺すこともできる兵器へと変わる。砲弾で撃ち貫き。履帯で潰し。車体で押しつぶし。時に焼き払い、時に破壊するただ一つの兵器に生まれ変わる。

自分にとつて戦車を纏う事。それはすなわち裸の自分が纏う服。それはすなわちゆりかごで揺れること。それはすなわち母の手に抱かれるかのよう。そして……。

『子宮』

そう、まるで子宮の中にいるかのような居心地の良さ。それが戦車。自分が今今まで忘れていた、最初に戦車に乗つた時の気持ち。忘れていた。思い出した。邂逅した。閲覧した。懐かしくなつた。思い出したかつた本当の自分の気持ち。ああ、また自分はこの世界に産まれようとしている。一度妹のために捨て、妹によつて思い出させてくれたその魂のよりどころ。究極の一択、その全てを手に入れることができた。あの時、自分は妹を捨てなくてよかつた。西住流を捨ててよかつた。帰つてきてよかつた。

「わあ木にぶつかる！左！左！」

「え？ 何か言いましたか？」

沙織が華に向かつてそう言つた瞬間、IV号D型は一本の太い木にぶ

つかつた。内部にはそれほど衝撃は伝わらなかつた物の、しかし激突したという事実 자체が心理的にもダメージをもたらす。上部にある入口から顔を出していた沙織は、内部に入るという。

「もう！ 左つて言つたのに！」

「すみません。よく聞こえなくて……」

「エンジン音と履帶の音が直に内部に伝わっていますからね。工夫していないとそうなりますよ」

と、優花里が言う。確かに、戦車は通常の車とは違つて内部も周囲が鉄板に囲まれているために、音がそこを伝つて中にいる四人の耳に直接、それも反響することによつて音が倍増して聞こえているのだ。結果、普通の会話はもちろん、少し大きめの声を出したとしてもエンジン音や履帶の音にかき消されてしまうのだ。マイクやイヤホンを使用していればもう少しましなのではあるが、残念ながら今回は用意していなかつた。

「そういう時は、足で操縦手に指示を出せばいい。左に曲がるときは左肩を、右に曲がるときは右肩を蹴れ」

「親友にそんな事出来ないよ！」

「思いつきり蹴つてください！」

「と、親友は言つているが？」

「じゃあ左！」

「あ、っ！……あのう、もう少しお手やらわかにお願いします」

自分で言つておいて何ではあるが、強く蹴りすぎだ。沙織の想像以上の一撃に、華は少しだけのけぞる。親友と言つておきながら、いざ大丈夫と言われば迷わず行動に移せる沙織も凄いとは思うのだが、そこまでやれとは言つていないと、横にあるハツチから外をみながらまほは思つていた。

本来ならば、IV号に乗つっていたのはみほのはずだつた。しかし、これにはちよつとした事情がある。それは、教官の蝶野によつてそれぞのチームに別れるように言われた後の事。

「今日は乗ることができない？」

「う、うん。そうみたい」

自動車部の面々の元から帰ってきたみほは、沙織達に向かつて苦笑いを浮かべながらそう言つた。続けて言う。

「えつと、ここしばらく戦車の移動やメンテナンスで自動車部の人達が皆して疲れ切つてて、IV号のイスに取り付ける機器の最終調整が完全に終わつてないって……」

「それは……仕方がありませんね」

自動車部の事を憐れに思いながら華はそう言う。元々、どう考えても自動車部の面々に迷惑をかけるであろう日程であつたのだ。初日、みほの詳細なデータを取つたその夜には、計四輛もの戦車を様々な所からグラウンドに徹夜して持つてきてもらつたし、2日めの夜中もまたその戦車のメンテナンスを行わなければいけなかつた。戦車道を取つているわけでもないのにここまで戦車に思い入れを持つて接してくれるという事はありがたいと感謝する一方で、このままだと彼女たちが過労死してしまう危険性がある。

「その辺に関しては我々も危惧していることだ。だが、現状彼女達しか戦車をメンテナンスすることができないため、こうするしかないのだ」

「そうだな。黒森峰だと、外部からプロを呼んできてメンテナンスや修理を行つてはいたが、それはそのための資金があつたからこそ、この学校ではそもそも行かないだろうからな」

黒森峰は、9連覇という実績に加えて西住流という大きなバックボーンが付属していたため、その分軍資金は多かつた。そのため、秀逸な機材を買うこともできだし、メンテナンス費用に多額の費用を使用することができた。コーチ代も事実上無償で合つたこともあり、そういう言つた面で見ても、他の学校からしてみれば羨ましい限りであろう。

「でもどうしよう。一応IV号は3人だけでも動かせない事はないけど……」

戦車を文字通りに動かすには操縦手がいる。砲弾を打つためには砲手が必要。そして、それらを統括するための車長と、三人いれば戦車を動かせないわけがない。しかし、素人ばかりであるというのは他

のチームも同じではあるが、必要最低限のメンバーのみしか乗らないというのは、ちょっとばかし不都合である。他のチームが、すべて搭乗可能人数いっぱいで乗り込んで、万全の状態で出るというのに、一チームだけ空白の役割が二つできる。他の役割が装填手と通信手であるため、いうなれば、耳と利き腕じゃない腕がないのも同じである。装填手と通信手は兼任できる役割であるため、せめてあと一人が乗つてくれればいいのだが。

「だつたら、今日の所は姉さんがIV号に乗つたら？」

「なに？」

「そうだな。同じ西住流の人間が乗れば、西住みほ用の機器が完成した時に滞りなく変わることができるだろう」

確かにそうすれば、華、沙織、優花里、そしてまほの四人で十分に戦車を動かすことができる。だが、とまほが言う。

「それだと今度は38(t)に乗る人間が一人減ることになるぞ？」

そう、それはIV号での不安要素が38(t)に移り変わるだけだ。それでは本末転倒ではないか。まほがそう考えたその時、柚子が笑みをこぼしながら言う。

「大丈夫。私達は元々三人で戦車に乗ることも想定して、そのための役割分担は済んでるから」

「そうなのか……」

よく考えてみると、もともとこの学校の戦車道が復活すると知っていたのはこの生徒会三人衆のみだった。逆に言えば、それだけ戦車道に携わる時間が大洗の面々の中では誰よりも長いという意味になる。であるならば、彼女達三人だけに任せても問題ないのではないか。

「分かった。なら今日の所は私がIV号に乗ろう」

「決まりだね。それじゃ、よろしく姉さん」

「お願い、お姉ちゃん」

「任せておけ……それから杏」

「なに？」

「……もうそろそろその姉さんという方は止めてもらえないか？なんだかこう……戦車道ではない別の道の人間のようで……」

「ええいいじゃん格好いいし。そんじやよろしく〜」

「……」

そして、生徒会三人衆は去つていった。杏の自分への呼び方に関してはあつたその日から気にはなつていた。自分の事を『西住姉さん』みほのことは『西住妹ちゃん』、それが今ではさらに短くなつて『姉さん』『妹ちゃん』となつている。同じ名字で、しかも姉妹なのだから区別がつきやすいようにそう呼んでいるだけなのかもしけないが、それだつたらせめて名前で呼んでもらいたい。少しだけ距離を置いているように感じて、それだけは心細い。みほは、IV号の履帶に触れながら言う。

「ゴメンネ、今日は乗つてあげることができなくて。また今度、ちゃんと機材がてきてからね」

みほにとつて、戦車とは仲間である。共に歩む友である。心の底から信頼するべき親友である。そうでなければ、自分の身体を預けることなどできない。それは、彼女の使用している車椅子に言えることだ。車椅子に乗り始めた頃は、さすがに少し怖かった。二つの脚で地面を踏みしめるわけじやなく、タイヤという少し加減を間違えただけで自分の思つていなかつた場所にまで到達してしまう。平坦じやない道であれば、ブレーキをかけなければ勝手にどこか見知らぬ場所に旅立つてしまう。そんな物に体を預けるのだから、怖くないわけがない。しかし、それが戦車と同じ存在であると考へた時から自分の考えは変わつた。友達としてなら、親友としてなら、そう考へた時からそれが自分の身体のようになり、自分の足の代わりの、いやもう一つの足となつた。みほは戦車を愛しているのだ。だから戦車乗りの家系だからじやない。戦車が好きだから、彼女は戦車という凶器を前にして笑つていられるのだ。

「みほさん」

「？えつと……確か10式の……」

「初めてまして。教官としてこちらに来た自衛隊所属の蝶野よ」

「こちらこそ初めまして。私は……」

「……存じているわ」

「あ、そうですよね……」

みほは、ある二通りの意味で戦車乗りには有名だ。ひとつはもちろん、西住流の家元の娘として、もう一つは前回の戦車道全国大会での大怪我で。今後も、自分は様々な場所で同じような反応をされることが予測される。覚悟はしていたものの、実際に経験してみると、なんだか心が苦しくなる。何より、このような憐みの目で見られることが、なんだか申し訳ないのだ。優しくされること自体が、まるで自分が人間として一歩劣っているのだと見られているようで、相手にとつてはそんな意思毛頭ないという事も分かっている。だが、一度そう考えたらそれ以外の事を思いつけない、自分はそんな弱い人間なのだ。「私はこれから見張り台から各戦車の動きを見ようと思うのだけれど、貴方もどう?」

「え……でも私は……」

「言つたでしょ? 私は自衛隊員よ。車椅子一台と女の子を運ぶなんてわけないわ。それに……車椅子だから誰かが力を貸してくれるってこと、ちょっとでもいいから得だと思つてみなさい」

「え?」

「障害を持つて生きることは、別に誰かと劣つているわけじゃない。誰かとは違う個性を持つているってことなのよ。私は障害を持つて生まれてきたわけでもないし、障害を持つほどの大怪我を負つたこともない。だけど、私もたくさんの障害を持つた人達と出会つてたくさんの話を聞いて、実際に接してきて、そう思つた。だから、貴方も普通の女の子のように甘えてもいいのよ」

よく、障害を持つ人を取り上げる番組を偽善とか、感動ポルノだとかいう人間がいる。実際、ある番組で、障害を持つているから不幸であるように装うように演技するようにと演出をするという検証を行つたこともある。その結果、障害者を使って金儲けをしているだけだと、視聴率稼ぎたいだけだと色々と言われる番組がある。感動的なエピソードを抽出して、お涙頂戴の茶番劇を見せられているだけだという人間もいる。だが、我々は何を知つてているというのだろうか。障害を持つて生きる人達の、障害を持つことでどんな人生を

送ってきたのかを。それは、確かに健常者と同じなのかもしない。上手くいかないことがあつたり、それは障害を持つていなくとも起こり得ること。な扱いを受けたり、それは障害を持つていなくても起こり得ること。障害者イコール不幸な人々というわけではない。それは正論であるのかもしない。どこかの街の片隅で、今も苦しんでいる人がいるのかもしない。今も辛い思いをしている人がいるのかもしない。また、今も不当な扱いを受けている人間がいるのかもしない。けど、『誰も助けようとしない』それもまた真実だ。年に一回でいい、そんな人たちの事を思い続ける日があつてもいいじゃないか。そして、そこから自分も何かしなければと思う人がいてもいいじゃないか。障害を持つていてるから不幸じゃない。確かにそう、だがそれは障害者全員に当てはまらないのかもしないじゃないか。もしかしたら今この瞬間も、自分は障害を持つていて、だから不幸だと思つている人がいるかもしれないじゃないか。障害者を見世物にするな。何もお前たちに見せようと思つていてるだけじゃない。今もどこかで苦しんでいる同じ障害を持つた人達にも見せなければならぬ、同じような障害を持つていても、挫折しても、立ち上がれなければならぬ、同じ壁があつても、乗り越えることができたと、自分はこんなに明るくなることができたと、そう伝えることができるならば、多少の演出が入つても、過剰な反応を示したとしても良いじゃないか。自分は一人じゃない。そう思うことのできる日があつてもいいじゃないか。そんな日があるからこそ、自分は真夏になるといつも真っ青な空とはつきりと区分けされている雲をみて思うのだ。ああ、またこの季節が来てくれたのだと。今年も、夢を持った人が生まれますようにと。

蝶野は続けて言う。

「多分、障害を持つてよかつたって思えるようになつたら、それはもう一人前何だらうけど……私が言えることじゃないわよね」「いえ、でも……そんな自分に慣れたら嬉しいかもしません。今はよく分からないですけれど……」

とみほは言う物の、実はみほ自身障害を持った後、障害を持つ前よりも手に入れたものは多いように感じていた。姉や、大洗での友達、

自動車部の面々など頼りになる先輩達、こちらにきてたつたの三日でたくさんの宝物を手に入れた気分だ。だが、みほは思う。それは障害を持つていなくても手に入れられたものなのじゃないかと。思えば、あの時の大会で川に飛び込んだことによつて自分の責務を放棄した時点で、自分は西住流としては失格だったはず。だから、もしも障害を患つていなかつたとしても大洗に、それか他の戦車道のない学校に行つていたはず。まほの事だつて、自分の中では見失つていただけで、最初から一緒に歩いてくれていたのだ。自分はまだ障害を持つたら手に入れたものがない。障害を持つてよかつたなんて一人前の事を言える時、そんな物が来るのだろうか。そんな胸を張つて言える時が来るのだろうか、いや必ず来てくれるはずだ。何故ならば、それに気が付けるのは自分だけ。足に障害を持つて生きていく使命を持った自分だけなのだから。

そしてそれから数十分後、全員が糸余曲折ありスタート地点へとたどり着いた。

「みんな、スタート地点に着いたようね。ルールは簡単、全ての車輛を動けなくするだけ。つまり、ガンガン前進してバンバン撃つて、やつつければいいだけ。分かった？」

「随分とぞつくりと言いますね」

「堅苦しい言い方で、よく分からぬ事を言うよりかはマシだと思う……多分な」

「戦車道は礼に始まつて礼に終わるの。一同、礼！」

『よろしくお願ひします!!』

戦車道はスポーツである。そのためごく一般的なスポーツと同じように、始まる時は『よろしくお願ひします』終わる時は『ありがとうございました』それが当然であり、マナーである。みほもまた、参加していないが、蝶野の横で戦車に乗つてゐる面々と同じように頭を下げた。

「それでは、試合開始！」

「いよいよ攻撃開始ですね！」

「どうするまほさん？とりあえず撃つてみる？」

「決めるのは戦車長の役目、つまり沙織さんが決めていいよ」

「あ、そつか」

そう、実は役割を決めるときにAチームの面々はまほに戦車長になつてくれるよう打診したのだが、まほは断つたのだ。今回だけしかIV号に乗らない自分が戦車長になつて、みほが乗る時になつて指揮系統に問題が起こつては困るという理由らしい。結果、くじ引きを行い、戦車長が沙織、操縦手が華、砲手が優花里、そして装填手兼通信手がまほということになった。

「よし！それじゃまず生徒会チームを潰そう！教官女人の人だつたんだし」

「まだ言つてるんですか？」

「私が決めていいんでしょ！」

「だが、生徒会チームの位置は確かここからは遠かつたはずだ。確かにこちらに比較的近かつたのは……」

その瞬間である。激しい轟音とともにIV号の車体が揺れたのだ。

「なに!? 何が起こつたの？」

「砲撃？だが、今の衝撃では当たつた様子は……」

そう言いながら、まほはハッチを開けて外を見る。そして地面にへこみを見つけた。土煙が立つていてことから、先ほど撃ち込まれたもので間違いない。問題はどこからかという事であるが、まほはすでに見当をつけていた。両端を木々に囲まれ、前と後ろは道となつている。この状況で戦車道素人である他のチームがいるであろう場所がどこなのか、少し考えれば分かることだ。

「見つけた。右90度の位置にBチーム、なかなかいい位置取りをとる」

木と木の間から八九式の姿を見つける。砲身から煙が伸びていることから、Bチームが撃つたことに間違いないだろう。それにしてもなかなかいい位置を取つた物だ。一見して、森の中を進むという事は死角から攻撃されるリスクが考えられ、またその道中も草等で進みづらいように見える。だが、死角から攻撃されるリスクがあるという事

は、つまり死角から攻撃できる可能性があるという事。それに加え、ほぼ90度の位置から攻撃を加えたという事は、こちらとしても反撃するのに一度砲を回転させなければならず隙が生まれる。ならば、180度回転しなければならない後ろから攻撃をした方がいいのではないかとも考えるが、その場合今度は自分が森の中からの奇襲を受けることがある。そのようなことを考えた結果、森の中から攻撃した方がいいと考えたのであろう。一方、まほに褒められていることを知らないBチームの面々は、自分たちが撃つた砲弾の威力に面を喰らっていた。

「すごい音……」

「今、空気震えたよ？」

「こんなスパイク打つてみたい！」

「まずはIV号Aチームを叩く！」

最初は、確かにバレー部を復活させたい。その一心だけで戦車道を選んだ。しかし、いざ乗つて、撃つてみると、なんだか心に響く者がある。撃つたのは自分たちのはず。だが、その撃つた砲弾の威力が自分たちの心にまで響いてきた。そんな幻想にも似た感覚を感じ取つたのだ。そして、撃たれた沙織はちょっとしたパニックを起こしかけて言う。

「怖い！逃げよう！」

今度は止まっているためほぼ鮮明にその言葉が聞こえた華によつて、戦車は前進する。その直後、また一発の弾が地面に当たる。今度のは、確かにIV号に近づいていた。もし動かなければ履帯が外れてそのまま撃墜されていた可能性がある。履帯は、外れてもその場で直すことができるためか、それが外れただけでは撃墜判定にはならない。しかし、動けないためにそのまま撃墜されることがほとんどのため、8割方撃墜されたと言つてもいいであろう。

「いい修正能力だ」

と、ハツチから顔を出してBチームの動向を探つていたまほは、素人ながらも即座に砲の着弾位置を修正してきたバレー部の面々を称賛する。沙織もまた、上部にある入口から顔を出して前を見る。する

と、その先に分かれ道があり、左からは見覚えのある戦車が向かってきていた。

「得物を捕らえた！」

「南無八幡大菩薩！」

CチームのⅢ突である。南無八幡大菩薩とは、簡単に言えばすべての心と身を武の神様にお任せしますという意味合いで考えてもらつた方がいい。だが、それは切羽詰まつた時に使うような言葉であるという事は分かつてているのだろうか？

「どうした！」

「挟まれた！あつちに逃げよう！」

「聞こえません！」

「右斜め前!!」

と言つて華の右肩を思い切り蹴つた。華はその指示通りに右の道へと入る。

「よし、これで何とかなるか？」

しかし攻撃はより一層激しくなるばかりだ。もしかすると……。まほがそう考えていたその時、彼女はみた。目の前にある切り株を枕にし、本を頭からかぶつて寝ている女生徒の姿を。

「まずい！」

糺余曲折あつてついに始まつた戦車道の新たなる一ページ。果たして、どのチームが勝利者となるのか。

試合、やります

3—1 傾斜

音か、振動か、それとも第六感だつただろうか。ともかく、彼女の意識は突如として覚醒して眼は漆黒の中へと開かれる。目を開いたのに漆黒であるのは、どういう事だろうか。自分は、確かに眠たいからと授業をさぼってしまってはいるが、確かにここに来たのは朝早くだつたはず、もしも今が夜であるとするならば、自分はおよそ10時間以上も眠つていたことになる。いくら何でもそれほど自分は寝ない。それに、夜であつたとしても星が一つもないのも不自然だし、それに頭が重たいのもまた奇妙である。

ああなんだ、至極まともで簡単な理由ではないか。顔の上に本が乗つてているのだ。そういうえば、確かに自分は眠りに入つてしまふ前まで読書をしていた覚えがある。彼女は何故か安心する。もしかしたら眠つてしまつている間に何らかの事故が起こつて死んでしまつたという事も考えられたからだ。いくら眠ることが多い彼女であつたとしても、永眠することだけは嫌いであるため、まずは一つ安心だつた。では、その次の不安材料を何とかしよう。何なのだこの振動は。それに、この重たいエンジン音は一体なんだ。まるで大砲の弾が落ちたかのような振動と音もする。まさか、眠つている間に戦時の日本にタイムスリップしたとでもいうのだろうか。などと、家に置いてあるタイムスリップ物の漫画のようなことを考えて、すぐさま否定した。そんな非現実的なことが簡単に起きるわけがないし、その振動は戦時中じやなくとも現代普通に感じることができる物であるからだ。振動は次第に大きくなり、そしてエンジン音もまた近づいてくるのを感じた少女は、顔に被せた本を落とさないように支えながら起き上がる。こうやつて眠りから覚めて起き上がる時が一番嫌なのだ。どうして安らかに眠つているというのにわざわざ起きなければならぬのだ。よく食べ、良く寝て、よく勉強しなさいと言うのが学術評論家たちの言い分ではないか。なのに、どうして彼らの方から寝ること

を邪魔してくるのだ。よく寝ろというからには、ちゃんとよく寝られる時間を作つてもらいたい。などと寝ぼけた頭で訳の分からぬ事を考えながらも、起き上がり本を取つて前を見た。すると、やはりすぐそこに戦車があつた。戦車についている小窓からは見覚えのある女性が姿を見せている。このままだと自分は引かれてしまうなと他人事のように思いながら少女、冷泉麻子は引かれる寸前にその車体の上へと飛びついた。だが、そのまま立ち上がるなどという格好の良いことなどできるはずもなく、麻子は転んでしまう。結果、本は落としてしまつたが引かれずには済んだので良しとしよう。

「君は……」

「やはりお前だつたか。いや、確か先輩だつたな」

今朝あつたばかりの少女だ。何故このような場所にいるのだろうか。少なくとも今は全学年選択授業を受けている最中なはず。だといふのに、彼女は今野原に寝転んで本を読んでいた。それが授業であるとは考えづらいことであるが……。

「あれ？ 麻子じやん。また授業さぼつてたの？」

「沙織か、あのクマはもういいのか？」

「取り上げられて……つてそうじゃなくて、また授業をさぼつて、そんなじや進級できなによ？」

「眠い物はしようがない」

「眠いから授業をさぼつていたのか？」

「朝は眠いのが当然だ」

高校生がそのようなことを言つていていいのだろうか。社会人になつたら毎朝眠くても会社に行かなくてはならないというのに今のうちにさぼり癖のようなものを付けては、などという事を言つても後の祭りである歳なのかもしれないが、ともかく今現在生身で外に出ているのはかなり危険である。そんなことをまほが思つている間にも砲撃が彼女たちの戦車を襲う。

「とりあえず中に入れ！ 外に出ていると危ない！」

「おう」

砲撃は何とかIV号のすぐ後ろに着弾したために彼女達には何ら被

害はなかつたが、麻子が外に出ている限り危険であることには変わりなかつた。まほ自身、みほの事もあつてもう戦車で悲しい思いをする人間を見たくなかつたこともあつてか、麻子を戦車内部に入れるのはそう遅くはなかつた。

「誰か中に入つていつたわね」

「あれは確か今朝あつた……でもあの人は戦車道を履修していなかつたはずじゃ……」

一方、その様子を見張り台から確認していた蝶野とみほ。有言実行とはまさにこのことで、蝶野は本当に車椅子ごとみほを階段の上にあら見張り台にまで運んだのだ。結構な重労働であつたはずなのに息切れどころか汗を全くかいていないところが、彼女が自衛官らしいといえる部分であろうか。とにかく、二人はそこから双眼鏡を使つてそれぞれの戦車の様子を確認していく。今のところ戦況としては三突と八九式の二輛が手を組んでIV号を追つている最中。IV号が道を外れて二輛が向かい合つたというのに、双方一発たりとも放つことがなかつたところから見て、同盟を結んだという事は想像しやすいことであろう。その二輛の近くに姉の乗つているIV号があつただけという事も考えられるが、戦車道経験者が乗つているIV号を先に潰そうと考えたのだとすれば、歴女チーム、バレー部チームどちらかにななかかの策士が乗つっていると考える。それにしても不可解なことが一つだけある。

「でも、なんだかIV号の動きが変……お姉ちゃんが戦車長だつたらあんな動きしないはずなのに……」

行動が何もかもが遅い。まほであつたら、試合開始と同時にその場所から動こうと考えるはず。蝶野から場所の指示があつた際、それぞれの位置関係を示す地図が全員の前で公開されていた。その時間はわずかであつたため記憶力の良い人間でなければそれぞれの位置などを把握することはできないだろうが、しかし最初にスタートする位置がばれている危険性があることには変わりない。そのため、試合開始とともにいち早く動いて、ともすれば自分たちの事を潰そうとする戦車を待ち伏せでもするはずだ。それなのに、IV号は一度八九式からの

砲撃を受けた直後に動き始めた。もしかして戦車長は姉ではないのだろうか。

「そういうえば、IV号から入る通信は、まほさんの声に聞こえるけど……もしかして通信手をしているんじや」

「え？ 通信手と戦車長は、役割の内容から一緒にすることはないはず。という事は、やっぱりお姉ちゃんが戦車長じゃない……でもなんでも？」

通常通信手と戦車長は同じ人物がやるような役割ではない。何故ならば、どちらも言語的コミュニケーションを用いる難しい役どころだからだ。戦車長は、その戦車のリーダー的な役割として一つの戦車を操作するために乗組員に指示を送らなければならない役割を持っている。通信手は、他の戦車からの指示を受けたり、また逆に指示をしたりする役割。自分の戦車に指示を出したり、他の戦車に指示を出したり、指示を受けたりと、これだけの言語的コミュニケーションの方法をいつぺんに取ろうとするとこんがらがつてしまふことは間違いないだろう。姉であれば、それぐらい容易いことなのかかもしれないが、わざわざ指揮系統が混乱しかねないリスクを背負う意味が分からぬ。今は訓練でバトルロワイヤル方式になつてているため他の戦車と連絡を取り合うことはないだろうから通信手の役割は実戦よりも少なくなっているであろうが、それでも蝶野からの通信が入ることもあるだろうからおろそかにはできない。

やはり、姉は通信手のみ、もしくは通信手と戦車長以外の役割を行つてていると考えるべきなのだろう。しかしどうして姉はそのようなことをしているのだろうか。自分のためなのか。後々自分が戦車に乗ることになるから、下手に戦車長として指揮を取つて自分の指揮のクセを沙織達に教えないようにするためなのだろうか。それとも、また他の目的があるのだろうか。今度姉に聞いてみよう。もしかしたら、何か答えが返つてくるのかも知れない。

「Aチームは、どうやら吊り橋を渡るようね」

「吊り橋……」

まずい、追い詰められている。それがみほの第一印象だった。確か

に吊り橋を渡れば今彼女達を追つている戦車を突き放すことができ
るかも知れないが、それは渡り切れればの話である。橋は洞窟のよう
に入口と出口がはつきりしているため、その両方から挟み撃ちにされ
れば文字通りに逃げ場所がない。おまけに洞窟とは違つて左右から
も攻撃される可能性が高く、正直言えば吊り橋を何の援護もなしに渡
るなど、自殺行為に等しいと言つてもおかしくないのだ。それに、み
ほにはそれ以上の大きな不安要素と言つてもいいものがあった。そ
れは……。

「吊り橋か……危険だが、ここを渡るしかない。私が外に出て先導す
る」

「でも、今出たら砲弾が……」

「今までの砲撃間隔の通りなら、もうしばらくは時間がある」

大体の体感では、八九式の一発目と二発目の間隔は30秒、二発目
と三発目の間隔は19秒、三発目と四発目の間隔は35秒、そして四
発目と五発目の間隔は22秒、平均すれば約26秒という事になる。
その間にIV号の影に隠れて敵戦車の射線の死角に入りさえすれば、危
険は少なくなる。一つ気になるのは三突の行方だ。最初に一度撃つ
ただけでその後は一度もこちらに砲撃を加えてこないが彼女たちは
どこに行つてしまつたのか。だが、先回りしていたとしても橋の向こ
うにまでは行つていなければ。それに、三突は砲塔が回らない上に基
本的に上下も動かすことができないため、地面と平行にしか砲弾が進
まない。きしんだりして上下に位置が変わる橋の上の目標物を相手
にして致命傷の一撃を与えられるとは思えない。よつて、この場合は
三突は問題にしない方がよいだろう。不確定要素として考えられる
のが、M3リー戦車と38(t)軽戦車の居場所。もしも橋の向こう
で待ち伏せでもしようものなら、それこそ一巻の終わりだ。こうなつ
た場合、迅速かつ冷静な対応が必要になる。簡単に言えば、さつさと
渡つてさつさと隠れるべきであることだ。

すばやく吊り橋の上に降り立つたまほは、両手を大きく使ってIV号
Dの先導を開始する。華はそれに従つて徐々に戦車を動かし始める。
やがて、橋の上に乗つた。普通のつり橋であつたら、この時点では戦車

の重みに耐えきれなくなつて落ちてしまう事であろうが、この橋には戦車の履帶の幅に合わせて鉄板が置かれており、そのおかげもあってか木の板が壊れることなくIV号は確実に進んだ。だが、それも橋の半分を通過する直前までの事。徐々にIV号が左に進み始めている。戦車どころか車すら運転したことがない華にとつて、揺れてきしむ橋の上をまっすぐに進むという事は難しいことこの上なかつたのだ。その事に気がついたまほが右に行くように指示を出したが後の祭りである。IV号の履帯が吊り橋の横に張つてあるワイヤーの一本を切つてしまつた。その一本を切つただけでは橋は落ちることはないが、しかしそれによつてバランスを一時的に崩した橋は左右に大きく揺れ始める。その揺れに足元をすくわれてしまい、まほは蹲ることがやつとで、立ち上がることができない。そのうち、段々橋の揺れのバランスが左に傾き始めた。無論、そちらに重たいIV号Dがあるからだ。

「あぶないッ！」

その様子を双眼鏡で見ていたみほはそう叫んだ。このままではIV号Dが浅い川へと落ちてしまう。そうなつたら、IV号から身を乗り出している沙織達がけがをするかもしれない。場所は違う。天気も違う。だが、その様子はまさしくあの時のソレとあまりにも似た姿に見えた。そう、あの時。増水した川に落ちて行つたティーガーの姿。あまりにも衝撃的なその様子、地面がえぐれて、川に土砂崩れに巻き込まれたかのように落ちて行つたその巨体。離れた場所ではどうすることもできない。もう二度と立ち上がることができないと知つている。なのに、みほは発作的に車椅子から立ち上がるうとした。腕に思い切りに力を入れて、前のめりになつた。だが、足は当然前には進まない。そんな事、あの時もう知つたはずだつたのに、それでも彼女は沙織達を助けに行こうとしていた。気持ちだけでも、思いだけでも、だがそんなものは無意味だつたのだ。その時、足を置いていたフットサポートの上から足が滑つて落ちてしまう。バランスを崩したみほはそのまま前に倒れ始める。その時の様子を、彼女はまるでスローモーションのように感じていた。そして、彼女の頭が目の前にある手すりに当たろうとした、その時であつた。二つの爆音が鳴り響いた。

3—2 操者

ダメだ落ちないでくれ。蹲りながら、彼女はいるはずもないであろう神様という物に祈つていた。妹を助けてくれなかつた残酷な神様の事なんて、絶対に信じない。そう思つていた彼女だつたが、しかし今その時だけはその神様に祈りたい一心であつた。目の前で、みほの、そして自分に初めてできた本当の意味での友達。それが、橋の下へと落ちようとしている。彼女は思う。もしも、自分がこの橋を渡ることを提案しなかつたら。もしも、誘導したのが自分じやなかつたら。もしも、自分がIV号に乗ることを提案しなかつたら。あの崖を渡ることを提案していなかつたら。まほの心は後悔で埋め尽くされていた。しかし、後悔先に立たずとはよく言つた物。今更そんなことしだところで全ては遅すぎる事なのだ。あそこまでバランスの崩れた戦車が持ち直すことはない。何らかの外部因子がなければ、そう遠くないうちに戦車は川の下へと落ちて行つてしまふだろう。だが、外部因子などそろ多くはない。台風並みの風や、クレーン等の機械で持ち上げると言つたようなことしか思いつかない。

「ツ！」

いや、もう一つあつた。そう考えた瞬間、一つの砲弾がIV号を襲つた。その衝撃でIV号は若干前進し、奇跡的にバランスを立て直した。橋の左端に寄つていたその巨体は、橋の中心へと寄り、落下を逃れることができた。それともう一方もまた。

「……え」

「大丈夫みほさん？」

「は、はい。ありがとうございます」

手すりに頭をぶつけようとしていたみほは、しかしそのすぐ隣にいた蝶野が咄嗟に腕を彼女の身体の下にいれたことによつて手すりの数センチ手前で止まることができた。もしもあのまま頭をぶつけていたら、怪我をしていたかも知れない。

「あ、そういうえばIV号、皆は？」

「大丈夫。III突が助けてくれたわ。向こうはそんな気はなかつたかも

しないけどね」

「Ⅲ突か……偶然でも助かつた」

撃破時の旗が上がっていない所を見ると、どうやら撃破認定はされていないようだが、一体だれが撃つたのか。気になつたまほは爆風と煙が収まつたころ、IV号の後ろに隠れながらその戦車の後ろを見た。そこにいたのはⅢ突、そして後ろからは八九式が向かつてくる様子が見えた。恐らく距離的なことを考えると、Ⅲ突の放つた砲弾がIV号に当たつたのだろう。向こうからしてみれば、こちらを助けようとする意図はなかつたかもしれないが、むしろ撃破しようとしてくれたために調度良い場所に弾が当たつてくれたのだ。後で感謝しなければならない。そう思つていたまほではあつたが、ここでIV号から悲鳴にも似た声が上がつたのを聞いた。

「五十鈴殿！」

「華大丈夫!?」

「どうした！」

「操縦手失神！行動不能！」

その言葉を受けてIV号の上にあがつたまほは、操縦席上部の窓から顔を出して氣絶している華を見た。おそらく、先ほどのⅢ突の攻撃による衝撃で気絶してしまつたのだろう。軽く見たところ大きなけがはしていないようだが、そのまま放つておくわけにはいかない。

車内に入つたまほは、華を右前の席、開いていた通信手のイスへと座らせる。観察した結果、やはり怪我は見当たらぬため脳震盪による気絶であると考えていいだろう。この訓練が終了した後にちよつとした検査は必要はなるだろうがしかし、大事に至ることはないだろうと思う。だがどうするか。操縦手がいなければ当然戦車を動かすことはできない、こうしている間にも後ろにいる2チームは迫つてしまっているのだ。何とかしなければ。

「やるしかないか。あまり得意ではないが私が操縦手を……」

まほは基本的に指示をする側の人間だ。そのため、実際に戦車を動かすという能力に関しては平凡であつた。幼少期や戦車道をやり始めたころには自分で操縦していたこともあつたが、こういつた試合形

式のなかでするのは実質はじめてだ。果たしてうまくいくだろうか。まほが操縦席へと移動しようとしていたそのときである。戦車が突如として揺れたのだ。

「撃つてきた!？」

「いえ、違います!」これは……」

「ああ、間違いない、IV号が動いている。だが誰が……」

砲撃を受けた時には、一度大きな揺れがあつてから徐々に収まつていくような振動を感じる。しかし、今彼女たちを襲っているのは小刻みな揺れ。恐らく、誰かがIV号を動かしているのだ。しかし何者なのか。華は見ての通り気絶している。沙織も優花里も今自分の目の前にいるから彼女達ではない。透明人間でも乗っていたのか。いや違う。一人いるではないか。この試合中にIV号に乗ってきた人間が。

「……」

「冷泉、お前か」

冷泉麻子である。彼女は優花里が持参していた戦車の教科書を見ながら操縦していたのだ。しかもかなりうまい。左斜め前を向いていたIV号が、少ししたら橋の端と平行に、そして橋のど真ん中へと戻っている。これは、ただ本を見ただけでできるようなものじゃない。才能だ。彼女の中に備わっていた操縦手としての素質が、この動きを可能としているのだ。こんな短時間でここまで操縦技術を見せてくれる、ワクワクさせてくれるような少女、黒森峰でもあまり類がない。

「麻子運転できただんだ！」

「今覚えた

「今!?

「流石学年主席！」

ぶつつけ本番でここまで操縦技術を見せることができるので。彼女を鍛えればきっといい操縦手になる。いや、それだけにとどまらず鍛え方次第では以前杏が言つていたように本当に日本代表として選ばれるような人間になつてしまふかもしれない。また一つこの学校への興味と欲求が増えた瞬間であつた。

「とにかく撃ち込め！」

「連續アタック!!」

「「それそれそれえい！」」

そういうしている間に八九式の副武装である九一式車載軽機関銃が火を噴く。しかしそれぐらいの攻撃だつたらIV号に傷をつけることができないのは想像するのは難しくない。一方のIII突だが、今のところ砲撃の間隔から見るに、おそらく砲弾の装填に時間がかかっているのだろうと思う。75mmの砲弾の重さは最大で6,8キログラム。それをつい昨日まで普通の女の子だつた彼女達がそうやすやすと持てるわけがない。八九式の装填速度がやや早かつたのはおそらく元々バレーボールをしていた分筋力があつたためであろう。しかし、この場面で主砲ではなく副武装の機関銃を選んだのは彼女たちのミスだ。もしも八九式が主砲を撃つていたのであれば、まだIV号にダメージを与えることができていたであろう。しかし、彼女たちは主砲ではなく機関銃を選ぶ、それは恐らくIII突が砲撃するまでの時間稼ぎをしているからだ。確かに八九式の57mm主砲である九〇式五糰七戦車砲よりはまだIII突の75mmの方が威力はある。それは間違いないしかし、乗り手側のスペックから考えれば、一発の威力にかけるよりも連続して攻撃できる法を選んだ方が効率がよかつた。この大きなミスが、彼女達の運命を決定づけた。

「麻子後ろに下がってるけど!?」

「分かってる」

まほが教科書をチラ見すると、そこにはそれぞれの戦車のスペックが書かれていた。おそらく彼女もそれを見て自分と同じ考え方を持ち、少しは時間の猶予があることを確認したのだろう。そのまて、ゆっくりと助走を取る時間があると考えたのだ。それに、一応橋の真ん中付近にまで戻つたとはいってもまだ体勢的に見ると少しは左寄りになつていて、橋の走行と平行になるように整えたかったとしたら、助走をつけようとしているのにも納得がいく。

数秒後、麻子がブレーキをかけてギアを変える。どうやら、準備が整つたらしい。後退していたIV号は急停止したすぐ後に急発進する。

Ⅲ突、八九式双方ともに装填が完了して発射したがすでに手遅れだった。砲弾は動くIV号を捉えることができず、そのすぐ前へと着弾した。結果的には煙幕のような煙が上がって視界を遮つた物のしかしどのみちまつすぐ行くしか道がなかつたためIV号の速度が落ちることなく、煙の中からIV号は無傷で現れた。

「ツ！外れた!!」

「次だ次！」

「冷泉！橋を渡り切つたら急停止！秋山は砲塔を右90度回転！沙織は周囲を警戒してくれ、Ⅲ突と八九式は無視してもいい！」

「おう」

「分かりました！」

「了解！」

「う……ん」

「あつ華が起きたよ！」

敵が装填をしている中、次の行動を素早く指示するまほ。それはもはや通信手や装填手の役割を逸脱し、彼女本来の持ち場でもある戦車長の役割を思い出したかのような行動であつた。そうやつてあわただしくなり始めたIV号の中で、先ほどの砲撃で気絶していた華が目覚める。

「華、大丈夫か？」

「はい、すみません……」

「いやいい、それより今は休んでいろ」

「いえ、大丈夫です。頭もクラクラとしてませんし、目もはつきり見えますから」

「そうか……だがもしも頭が少しでも痛くなつたら言つてくれ。……医者か養護教諭に診てもらう方が一番安全なんだがな……」

「はい」

「とにかく、華も周囲の警戒に当たつてくれ。何か異変を感じ取つたらすぐ伝えてくれ」

「分かりました」

「秋山、指示を変更する。左に90度砲を回転させてくれ」

「分かりました！」

脳震盪だけで済めばいいが、もしかしたら脳出血などの脳血管疾患を起こしている可能性も考える。今は大丈夫であつてもこの時の傷が後々に大きくなつて重大なダメージとなる恐れがある。そのため、まほはこの試合が終わつたら保健室へと直行することを薦め、華はそれに対して了承した。

ともかく、今のところ華は心配ないだろう。ここからは再び試合に戻らなければならぬ。麻子は、まほの指示通り橋を渡り切り、Ⅲ突、八九式の対岸へとたどり着いた。橋の中ほどで砲塔を回転させてもこの砲身であれば引つかることは無い為橋の上で戦うことも考えた。だが、問題は今見えていない戦車二輛、38(t)とM3である。もしも二輛のどちらかが対岸にいたならば、後ろの八九、Ⅲ突と合わせて挟み撃ちとなってしまう。そうなる前に一輛を撃墜できたとしても、砲を再び前に戻している間に撃たれてしまえばどうしようもない。特にM3リリーには彼女が乗つているのだ。逃げ場を確保しないで戦うか、逃げ場を確保して戦うかであるならば、逃げ場を確保して戦つた方が得策であるのは素人でもわかることだ。

「早く回つて！撃たれる前に撃つちゃつてよ！」

「IV号の砲の回転は自動だから、せかしても意味はない。冷泉、橋と垂直になるように向きを変えてくれないか？」

「左だな？」

「ああ」

麻子は、戦車を細かく動かして戦車の向きを変える。本当にこの少女は戦車を操縦するのが初めてなのだろうか。随分と手慣れているようにも感じる。練習無しでここまで動きを見せられるのであれば、ちゃんと鍛錬を積んでいけば全学校の操縦手の中でも一、二を争うほどまでに成長してくれるだろう。等とまほが考えている間にも、IV号は方向を変え終えて、橋に向かつて右側で止まつた。実はこの試合でまだ一度も砲を打つていなければIV号だけだつた。停車したことによる揺れが収まつた直後、ついにIV号が待ち望んでいた瞬間が訪れ

る。

「発射用意!!」

「ツ！」

まほのその言葉に、優花里は再度引き金に力を籠める。今自分の右手人差し指がその引き金を引けば、砲塔から弾が飛び出すのだ。それは、彼女が長年待ち望んでいたことと言つても過言ではなかつた。いつかはこの引き金を引きたい、いつかは弾を撃つてみたい、そう願つていたのだ。いま、その彼女の夢が叶う瞬間だつた。人をも殺しかねない危険な砲弾。トリガーハッピーと言われても構いはしない。他人がどう言おうとも、その瞬間は彼女にとつて最も幸せな瞬間だつたのだから。一度、二度瞬きをして深呼吸をする。その普通の動きですらも、なにかの儀式のように感じられた。その緊張感に思わず周囲もまたかたずを飲む。まほは発射するタイミングを見極め、沙織は緊張緊張している優花里を見つめ、華は上部の窓から顔を出して周囲を警戒し、麻子は先ほどまでと同じように眠たそうに操縦席に座つて待つ。まほの声を待つている時間。それは、永遠に続くのではないかと誰もが思つた。しかし、ついにその瞬間が、あまりにも突然にやつてきた。

「撃て!!」

「ツ」

反射的に、優花里は引き金を引いた。轟音とともに一発の砲弾がきりもみ回転しながら飛び出し、IV号は大きく揺れる。それは自分たちの方が撃たれていた時にも感じていた物と似て非なる物であつた。弾はまっすぐと凄まじき速さでⅢ突へと飛ぶ。もちろん、Ⅲ突がそれを避け切れるはずがなかつた。Ⅲ突の主砲のすぐ左に着弾した砲弾は爆風と煙を吐き出した。そして、煙の中から現れたⅢ突はしかし、着弾した場所から煙を上げて動く様子もない。それから間もなく、行動不能を示す白旗が掲げられた。

「うわ、凄……」

「ジンジンします……」

「なんだか、気持ちいい……」

弾を撃つた瞬間まほの隣から排出された大きな薬きようと火薬のにおいが戦車内部に充満する。衝撃も音も撃たれていた時の二倍、三倍以上の力強さを持つていた。表情の乏しかった麻子ですらも、驚きの表情へと変わる。足先、指先から体の奥にまで浸透するかのようないその振動は彼女たちの心をもまた揺さぶったのだ。遊園地で危険なアトラクションに乗った後のような感触といったらしまえば簡単であろう。血肉が意識しなくても沸騰し、頭も興奮状態にあるであろうことが分かる。瞬時にアドレナリンが分泌され、一種の麻薬を直に頭に撃ち込まれたかのような同じ感覚に陥つたのだ。華の光悦とした顔つきだけはある意味で危ない気もするが、しかしそれは純粹にその場にいた全員の気持ちを代弁していたと言つてもいいだろう。

「有効！Cチーム行動不能！やるわね」

「あの動き……操縦手と戦車長が変つたんだ……」

試合の様子を見ていた蝶野はCチームのⅢ突が行動不能、走ることも砲を撃つこともできなくなつたことを告げた。戦車の撃破基準は複数ある。剣道の一本判定よろしく、有効な命中弾、つまり本当の戦争であつたらそれで戦車内部にいる乗員が死亡している可能性が高いという攻撃を受けた場合。弾がエンジンに当たる、もしくは整備不良で完全に壊れて運転が不可能となつた場合。戦車からすべての乗員がいなくなつた場合。さらにごくまれではあるが操縦者が戦闘不能とした場合にも白旗が自動的にあがつて撃破となる。ともかく、そこからどう立て直そうとしても整備班が入らない限り満足に運転できなくなつた場合に撃破認定されるといつてくられても構わない。今回は、有効弾を喰らつたから撃破認定を受けたという事だ。

みほは、IV号が落ちそうになつてからⅢ突を撃破するまでの戦車の動きが變つたことに注目した。操縦もそうであるが、それ以外の動きもほとんど無駄がなく、まさしく戦車道をよく知つている物が指揮を取つて いると言つていい動きを見せていたのだ。

「お姉ちゃん……」

戦車長が姉に変つたという事は間違いない。今この状況から見ると、八九式が落とされるのも時間の問題となつた。やはり、まほは強

かつた。自分等足元にも及ばないほどに。相手も味方も素人である
というのに、そのなかで随一の能力を見せて立ち回っている。その姿
は、暗闇で光り輝くホタルのよう。

「敵わないな」

「あら？」

「え？」

その時、蝶野が双眼鏡を覗き込んだ。何かに気がついたようだ。み
ほもまた、彼女のがのぞいた方向に向けて目を細めてみた。そして見
つけた。森の中ほど、そこから立ち上るソレを。

「あれって……まさか」

「蝶野さん！ すぐに確認を！」

「え、ええ！」

みほは、蝶野が通信機の周波数を合わせていてる間に、橋の前で八九
式と対峙しているまほたちの搭乗しているIV号の方を見た。当然で
はあるかもしけないが、彼女達もまだ気がついていないようだ。今は
まだ距離的にも大丈夫ではあるかもしけないが、もしも気がつかない
ままであれば、勝負は一瞬の後に決まってしまう。何が起こったのか
理解できないままに。

「お姉ちゃん……」

第三者の立場で戦場をみるみほには、姉に助言をする立場にはな
かつた。だから、彼女にできるのはIV号に乗っている五人の無事を祈
ることだけであつた。

「手を休めるな！ 今度は八九式を！」

「はい！」

四人が放つた弾丸にしごれ、酔いしれている中でもまほは冷静に飛
び出した空の薬きようを片付け、新しい砲弾を装填し指示を出した。
それに答えた優花里は、すぐにまた砲を撃つ準備に入る。

「まずい！ フォーメーションB！」

「はい！」

協力関係にあつたⅢ突が一撃でやられた姿を間近で見た八九式に
搭乗するバレー部の面々は、すぐに次の弾を発射した。だが、彼女た

ちは慌てていた。こういつた動搖する場面でこそ落ち着かなければならぬがしかし、経験の全くない彼女達にはそんな余裕は全くと言つていいほどに存在しなかつたのだ。明後日の方向にそれた照準では、まともにあたるわけがなく、八九式の砲塔から放たれた弾はIV号にかすりもせずにIV号の横を通過していった。

そして、先手を取られたIV号ではあつたものの、こちらはバレー部とは違い、至極落ち着いていた。その原動力となつたのは間違いなくまほだ。彼女の的確な指示、判断力、そして圧倒的なカリスマ性、それらを兼ね備えた言葉は間違いなく彼女たちに自信と勇気を与え、それぞれに割り振られた役割に集中する。指揮をする人間が変つただけで、ずぶの素人のチームであつたのが、まるでプロのチームに入れ替わつたのではないかというほどにすべてが変つたのだ。そんな化け物を相手にして、素人であるバレー部チームが勝てるはずがなかつた。

「撃て！」

IV号から放たれた弾は、見事に八九式の真ん中を貫いた。着弾した装甲には一つの穴が開き、そこから白い煙が噴き出した。

「まともにアタックくらつた！」

八九式は走行不能となり白旗が上がる。これで自分たちを追つていた二つの戦車が倒れ、元戦車長であつた沙織はホツと一息をついた。

その瞬間、華が叫んだ。

「まほさん！こちら側の森の奥から煙が！」

「何？」

こちら側の森、つまり今走行不能になつた八九式やIII突がいる方の崖とは反対の場所から上がつてゐる煙。その言葉を受けたまほは、数秒後にはその意味を理解し、上部のハッチから上半身を出して森の方を見た。そして、目を皿のようにして森の中を凝視したまほが下した決断。それは……。

「麻子！前にフェイントを入れてから下がれ！」

「おう」

麻子は、その言葉通りにIV号を数センチだけ前に進めた後、すぐにバツクギアに切り替えて後ろに下がった。

その瞬間、IV号の目の前に二つの弾が着弾する。一つは先ほどまで自分たちが止まっていた場所。そしてもう一つは、IV号がそのまま進んでいたら間違いなく当たっていたであろう場所。もしもまほの判断が遅れた。もしくは判断を間違えていれば間違いなくIV号は走行不能になつていただろう。

III突、八九式を倒して若干浮かれ気味であつた沙織は、華の叫びから始まつた数十秒足らずで起こつた出来事に対し、パニック状態になつて聞いた。

「え、ちょっと何なの一体!? 煙つてなに!?

まずはそこからだつた。果たして、華が見た煙とは言つた一体何のことなのか、沙織はまだ理解が追い付いていなかつたのだ。

「戦車が撃墜された時の煙だ。八九式やIII突が出しているような……な」

「え? それが私たちのいるほうの崖に見えたつてことは……」

「そう、こちらの崖に残る二輪がいたという事……そしてすでに一輪が走行不能になつたという事だ」

華の報告を受けそう考えたまほは、すぐにハツチを開けてその戦車を探した。一体どのくらい前からその煙が上がつていたのかは判断がしづらいが、しかしもしも自分たちがIII突と戦つていたあたりから上がつっていたとするならば自分たちの車輛の近くにまで来ている可能性が高かつたからだ。

事実、彼女の目に映つたのは一輪の戦車。そして、森の中にあつたためにその姿がよく見えなかつた物の、着弾した二つの弾、さらには残つた戦車の搭乗員の関係から十中八九あの戦車であることは間違ひなかつた。

「まだ遭遇していない戦車は二輪ある。だが……お前以外であるはずがない、 そうだろ?」

彼女達であることを確信していたIV号の目の前に現れたのは、やはりまほの想像した通りの戦車。ある意味では今のIV号と似ている。

自慢ではないが、自分が戦車長になつたことによつて、麻子や秋山などの能力は飛躍的に上昇した。先ほどの戦闘での圧勝がそのよい証拠である。思えば、三突や八九式相手に対しては、あまりにも不公平な戦いをしていた。向こうが全員が戦車道に対しては素人であるというのに、こちらは戦車長として自分というあまりにも戦車道知りすぎている人間が指揮していたのだから。

だがこの先は違う。一対一で戦うことになる彼女達もまた、自分のように戦車道の事をよく知つている人間が指揮をしているのだ。おそらく、激闘となることはほぼ間違いないと言えるだろう。だが負けられない。模擬戦だとしても、相手は自分とみほのいわばライバル。みほの姉として、そして最上級生として一年に、そして中学生に負けることはあつてはならない。というか、負けたくないといったほうがあまりにも身もふたもなく簡単な言葉だろうか。

ともかく、だ。

「島田愛里寿！」

ここに、今世代初めてとなる島田流ＶＳ西住流の次期家元候補同士の対決が始まつた。

3—3 勇気

まほの予感は的中。森の中からIV号のことを狙っていたのはM3リー。そしてその戦車長の愛里寿を含めた十四の瞳は一直線に存在するIV号はまだしも、その中にいるまほたちのことすらも見ていうに思える。

「ごめん、外した」

「愛里寿、どうする？」

「問題ありません。もとから、この攻撃で倒せるとは思っていませんから。一度、森の奥に隠れてください」

「あい」

冷たく、遠い空の向こうに存在する星を見るかのように彼女たちの目は鋭くIV号を見据えたまま、その姿は森の奥へと隠れてしまつた。

それは、この試合が始まつてすぐのこと。

「ここ」で止めてください」

「あい！」

愛里寿の小さな指示と、桂利奈の独特な返事が車内に響いた。M3リーが止まつたのは森の中で、少しだけ道から離れた場所である。

「すぐ」い桂利奈！さつきまで運転の仕方も分かつてなかつたのに！」

「愛里寿の教え方が上手だつたものね」

「……」

「へへ、ねえ！もしかして私たちつて才能があるんじゃない？」
「これなら、西住流も倒せるかも！」

と、愛里寿と梓、そして紗希以外の四人ははしゃいでいる。というより、紗希はほとんど無表情& a m p;無口な女の子であるため、実質的にはありますと梓以外の五人といつてもいいのかもしれないが。

愛里寿に教えを請うたこともあつて一年生チームは、というより桂利奈は初心者ながらも戦車の運転が上達していった。愛里寿は思う、たぶんこの6人にはもともと素質があつただろうと。そうでなければ

ば、いきなり戦車に乗つてここまでまでの動きができるはずがない。元々戦車道のなかつた学園艦に、ここまででの素質を備えた人間がいたのは驚きに値するものだ。

行けるかもしない。戦車長・島田愛里寿、主砲砲手・山郷あゆみ、副砲装填手・丸山紗希、操縦手・阪口桂利奈、通信手・宇津木優季、副砲手・大野あや、そして副戦車長兼主砲装填手・澤梓。この七人であればこの戦車を棺桶にしなくて済むのかもしれない。

「皆、浮かれてばかりいないで。まだ敵と遭遇したわけでも戦つたわけでもないんだから」

因みに、梓を主砲装填手だけでなく副戦車長という役割に添えたのは、愛里寿が梓は命令を受けてただ動くだけには止まらず、自ら指揮をとる能力に長けていると思ったから。そんな彼女の能力を使わないのは勿体無いと思つたから。今は戦車道について全く知らないただの少女だが、2年も経てばこの大洗を率いる逸材である。そう愛里寿は考えていた。だから愛里寿は、彼女を成長させる事を目的として自分の右腕となる地位に添えたのだ。現在もこうして慢心しそうになつているメンバーの事を制止し、油断しないようにと釘を刺している。

だが、油断するのも無理はない。今は、人生で初めての乗る乗り物、それも自分で操作しているのだ。ただ動かすだけでも楽しいに違いない。問題は、今この状況で敵に遭遇してしまつた場合。もしも、自分の思つて いる通りなら彼女たちは……。

「大丈夫だつて！」

「うん！だつて、私たちには……」

轟音と衝撃が彼女たちに伝わつたのはそのすぐあとだつた。

「きやあ！」

「なになになに!?」

「落ち着いて！みんな周りを見て!!」

「機械ばっかりで何も見えないよ!!」

「戦車の中じやなくて外！」

パニックになりながらも、少女たちは梓の指示に従つて窓から顔を

出して周囲を見る。だが、目を凝らしても暗い森の中にいる敵の姿は全く見えなかつた。それから数十秒後、ようやくその姿を捉えたのは次の衝撃が来た瞬間だつた。

「愛里寿！後ろにいた！距離は大体20mくらい！」

「20……かなり近いですね。どの戦車ですか？」

「えつとあれは……38(t)！生徒会の人たちのチームだよ!!」

その返答にたいして、愛里寿はやはりと思つた。そもそもあの配置図において一番近くにいたのは生徒会のチーム。来るとしたらやはり彼女たちか。などと心のなかで思つてゐる時にも、当然休むこともなく38(t)は3・7cmの砲を放つた。

「逃げて桂利奈!!」

「逃げるつてどこに!?」

「それは……」

彼女の言うことももつとも。この場所ですら隠れるのに適していると言える場所。しかし結果的に見つかってしまった。いつたいどこに逃げればいい。いつたい自分達はどうすればいい。

「愛里寿！」

梓は、隣にいる愛里寿の名前を叫んだ。

「……」

しかし、愛里寿はなにも言わずに、ただ上部の入り口から身体を出して38(t)を見ていた。そして、三発目の弾が放たれる。今度は、地面には当たらず近くの木に当たつたようだ。弾があたつた木はゆっくりと倒れ、M3リーのすぐ横に横たわつた。その倒木が決め手となつた。

「きやあ!!」

「愛里寿！」

「もう嫌だ！怖いよ！」

なにも言わない愛里寿。それに対比するかのように戦車内部の混乱は激しいものであつた。

死ぬかもしれない。そんな考えが彼女たちの頭をよぎつてゐた。特殊カーボン素材というもので戦車の中は守られているということ

は知っている。でも、それでも何かの間違いで弾がそれを貫通することもあるのではないか。元々この戦車は十何年も前からあのウサギ小屋に放置されていた物だから、鉄のように劣化していたとしても何ら不思議はない。そしたら、自分達はどうすることもできないままに死んでしまう。そんなの、いやだ、いやだ、いやだ。恐怖、恐怖、それらが彼女たちの頭に浮かんだ瞬間に、この戦いの終着への道が開かれてしまった。

「助けて！ここ開けて!!」

「駄目！ 今外に出たらそれこそ弾に当たるかも!!」

「でもこのままここにいても!!」

「あツ……」

『七人兄弟の棺桶』または『七人用共同墓地』。この戦車を見つけ、愛里寿からその名前を聞いた夜に調べた時、このような文字がインター ネットに浮かんでいた。車高が高いから被弾しやすく見つけられやすい。被弾した場合エンジンから発火しやすい。二つの砲それぞれにデメリットがある。そして装甲が脆いということその他諸々からそのような不名誉ともいえるあだ名がつけられてしまつたのだとか。

本当にその言葉の通りにここが自分達の棺桶になつてしまふのだろうか。いや、そんなこと愛里寿が一番したくないはずだ。でも、だつたら……。

「……」

だつたらなぜ愛里寿はなにも言わずに入り口から顔を出しているのだ。どうして先程までのように自分達に指示をくれないのだろうか。なんで……。

「愛里寿、あなたは死ぬのが怖くないの……？」

ふと考えてみる。今この状況で一番危ないのは誰なのか。それは紛れもなく愛里寿。言わずもながら、弾が当たつてしまえば普通の人間は死んでしまう。それも、華奢な愛里寿にあの重い砲弾が当たつてしまえばそれこそ身体が吹き飛んで、ただの肉片に変わってしまう。そこには、愛里寿という一人の人間がいたという痕跡すらも残らないほどのモノが残ってしまう。それは愛里寿自身もわかっていることの

はず。なのにどうしてそんな危険な真似をしている。どうして表情ひとつ変えることなく砲弾を見送ることができる。恐れを知らないのか。怖いという感情を捨ててしまつたのか。

昨晩、君は言つた。戦車は人を傷つける道具だと。戦車の外にでたら危険なのだと。それなのに、どうしてあなたはまるで死にたがりのような真似をするのか。どうして友達をこんな危険な目に遭わせているというのにそんな冷たい目をしているのだろうか。いや、違う。危険じやない。確かに衝撃は車内に伝わってきたし、その轟音で耳がつぶれそうだつた。でも、自分達は無事じやないか。弾が貫通したどころか、当たつてすらいない。それなのに、どうして自分達はここまであせつてしているのか。まだ負けた訳じやないのに、どうして紗希以外のみんなは逃げ出そうとしているのか。

「え、紗希？」

そういえば、もう一人だけ冷静な人間がいた。それが紗希。彼女もまた愛里寿と同じように表情も変えずに外を見つめているようだ。彼女も自分達と同じように戦車に乗るのははじめてなはず。そして怖いはず。なのに、どうしてあなたもそこまで表情ひとつ変えないでそこにいるのか。そこにいられるのか。梓はとてつもなく不思議な感覚に陥つた。そして、ただ外を見ていたはずの紗希の顔がふと、梓の方に向く。そして彼女は……。

「……」

「紗希……」

ただ、笑つっていた。

梓は、彼女のその表情から紗希が何を考えているのかを察しようとする。だが、答えは簡単だつた。信じているのだ。昨晩愛里寿が言ったあの言葉を。車内にいれば大丈夫という言葉を。だから彼女はなんの心配もせずに笑つていられるのだ。愛里寿を、そしてこの戦車を信じて いる。

「紗希だつて信じてる……だつたら、私も！」

まだ手は震えている。今でも逃げ出したくなつて、叫びそうになる。でも、逃げてたら勝つことができないのは当たり前とあのとき誰

が言つた。自分だ。愛里寿がなにも言わないのも信じているからだ。自分達が逃げないのを、そして反撃してくれるということを。きっとそうに違いない。だつたら、その期待に答えるのが戦車長の下に付いたものたちの、自分達の役目なのではないか。梓は、震える手を握りしめて、大声で言つた。

「みんなも愛里寿の言つたこと思い出して!!」

「え？」

「梓……」

瞬間、凍結。編みにかかつた魚が死んだかのような静寂が辺りに流れた。あゆみ、紗希、桂利奈、優季、あや、そして愛里寿の目線が梓に集中する。

「逃げるなって言われたでしょ！逃げてたら勝てないって言つたでしょ！怖くて当然だよ……戦車は元々人を傷つけるための道具なんだから、恐ろしくてたまらないのが当たり前なんだよ。私だつて、はじめて戦車にのつて怖いけど……でもみんなまだ大丈夫！傷ひとつないでしょ！負けた訳じやないのに逃げ出すのなんて、そんなの弱虫のことじやん！……私たち、もつと考えないといけなかつたんだ。戦車に乗ることがどういう意味をもつのかつて、人を傷つけるかもしれないものに乗るつていう覚悟を決めてからじやなれば、乗つちやいけないものだつたんだ。戦車は、誰かを傷つけて、その人の人生を狂わせてしまうものかもしれない、みほさんのように……。みんなみほさんのように強くないから、誰かの人生をえてしまうかも、殺してしまふのかもしれない。でも怖いって分かつた。怪我するかもしれないって分かつた！今の私たちなら、きっとなんでも乗り越えられるはずだよ。だから、逃げないで戦う。私たち7人ならこの棺桶を、ううん、この子を無敵の要塞にもできる。だつて私たちは……恐れを知つた子供たちなんだから！」

「梓……」

人を傷つけない乗り物など存在しない。戦車はもとより、車だけ、バイクだつて、自転車もそうだ。どの乗り物も人を傷つけ、簡単に殺すことのできる力を秘めた鉄の怪物。それを便利な道具にする

のか、人を傷つけるための機械とするのかは、それ操る人間の心に委ねられている。恐れを持ったままそれを操るときつといつか取り返しのつかないことをしてしまう。人は失敗からなにかを学ぶ生き物。でもその失敗で一人の人生を狂わせた結果に残るのは、より多くの人間の狂った人生だけ。優しい人間こそ、その狂わせてしまった人生に悩み、苦しむことになる。大きな力に対する大いなる責任、その認識を持たないままに力を手に入れた者には破滅的な未来が待っている。例えそれまでにどれだけ輝かしき過去を持つていたとしても、純粹で優しい心を持つていたとしてもひとたび人を傷つけたものは幸せになる未来は待っていないのだ。だからこそ覚悟を決める。車にのるのも、バイクにのるのも、自転車にのるのも、そして戦車にのるのも、一回一回に全身全霊をかけるほど恐ろしい気持ちは持つていなければならぬ。そうでなければ無意識な人殺しとなつてもおかしくない。覚悟なき者が乗る乗り物ほど恐ろしいものはない。犠牲があつても仕方がないと思うものが乗るほどに悲しいものはない。そんなものに傷つけられることほどに狂わしいものはない。人を守るのは、傷つけられるという怖さを知つたものだけに許された権利なのである。

彼女たちは知つた。傷つけられる恐怖、死ぬかもしれないという恐れ、それを乗り越えようとしている彼女たちは……。

「愛里寿、指示を出して。私たちは絶対に逃げないから」

「……うんそうだよ、愛里寿！どこに向かえばいい!?」

「私は、どこを狙えばいいの？」

「私たちは、愛里寿とこの戦車を信じるから！」

「みんな……」

そこには、先ほどまで逃げ出しそうになつていていた少女たちの姿はなかつた。みんな、敵に向かおうとしている、立ち向かおうとしている。怖いとわかっていて傷つけるかもしれないけど、それでも戦おうとしてくれている。今ここに、大洗最強の一年生チームが誕生した。愛里寿は、一瞬だけ目をつぶると言う。

「動かなくても平氣、今のところ合計8発打たれているけど、一発も当

たつていなから」

「え!？」

「そんなに!?」

それは二つの意味での驚き。ひとつは、そんなに打たれていたのかと言う驚き。確かに冷静に考えてみると自分達はかなりの時間足を止めていたと言うのに、一発たりとも弾がかすることもなかつた。しかも20mという近距離にいるというのに一発も攻撃が当たらないというのは、むしろ才能ではないのだろうか。

「もしかして、生徒会の砲手の人つてノーコン?」

「そうかもしません。生徒会の人たちも、戦車にのるのがはじめてであれば、砲を撃つのもはじめてで、まだ戦車になれないということも考えられるけど……」

「愛里寿、もしかしてそれがわかつたら顔を出してたの?」

「小窓から身体をだすのはよくあることです。小窓じや視界が狭まつてよく見えないし、気がついたのは、一発目が当たらなかつたとき」「さすが愛里寿!」

「こんなときにも冷静に見れているなんて」

「一方の38(t)。

「はつづれ~」

「桃ちゃんとこの距離で外すの?」

「桃ちゃんとこの距離で外すの?」

といいながら桃は次の弾を装填する。愛里寿たちの予想は当たつていた。生徒会チームの広報河嶋桃はある種天才的なノーコンである。その精度は見ての通り、止まつていてる戦車を狙つて全弾当たらぬいどころかかすりもせず、砲身がM3リーをとらえているというのに、何かしらの超能力でも発動したのかというほどに誰もが予想することのできない方向に飛んでしまつていて。これならばいくら素人であつても冷静に戦えば勝つことは容易いであろう。

「桂利奈ゆつくりでもいいから砲身を38(t)に向けて」

「あい!」

「あゆみは主砲の用意、あやは相手が動いて主砲が外れたときのために副砲の準備をして。M3は主砲が回転しないから外れる可能性が高いから」

「了解！」

M3リーの武装は前方向かつて車体前部左側に搭載されている主砲の75mm砲、砲塔搭載の副砲の37mm砲の二つ。それに加えて、機銃もあるにはあるが、こちらは戦車相手にはあまり効果が期待できないためやはり主に一つの砲を使つていくということになる。しかし、主砲の75mmは、砲塔の37mmとは違い左右に最高15度しか射角をとることができない。そのため、まだ戦車になれていないあゆみであればはずす可能性が高い。そう考えてのあやのバックアップであった。

「梓」

「え？」

「……やつぱり梓を副戦車長にしてよかつた」

「愛里寿……」

心のそこでは、逃げ出しても仕方がないと思っていた。逃げても恨まない、そう思っていた。戦車に乗ることの恐ろしさは、自分がよく知っているから。でも、彼女たちは逃げなかつた。梓が止めてくれたから。彼女が成長するのに2年もかからなかつた。今この場所で、彼女の才能の一端が覚醒したのだ。

「愛里寿、私から提案があるんだけどいいかな?」「なんでしょう?」

「まず……」

「動き始めた!」

「おのれ逃がさん! 追え柚子!」

(あくなんか嫌な予感がする)

当初、一切の動きを見せていなかつたM3リーはゆっくりと戦車を前後させながらその砲身を38(t)に向けようとしていた。しかし、M3リーは突如として急速発進し38(t)を置いてその場から逃走を図つた。無論、生徒会チームはそれを追つた、がこの時杏の中であ

る一つの予感がした。もしかしてこれは愛里寿の策略なのではないか。そうじやなければノーリコンの桃から逃げるなどという奇妙な行動を取つてゐる説明がつく。つまり、このまま行くと罠にはまつて負けてしまうのは確定。では、そう考えているのならなぜ何も行動を起こさないのか。

答えは単純明快。全く戦車道について知らない自分には戦車道を、いや戦車の事をよく理解している愛里寿の考えが読み取れないからだ。知識の浅い自分でも考へるてはみるが、良くて待ち伏せ、もしかは別チームにばつたり出くわして混乱させている間に撃破。いや、後者はない。愛里寿もわかっているはずだ。この近くには自分たち2チームしかいないのだと。だとすれば、待ち伏せか。いや、確かに自分の記憶ではM3リリーよりも38(t)の方が少しだけ速かつたはず。待ち伏せをするのならこの戦車を引き離すほどの速度が出なければならぬ。まあ、この道は整地されているわけではないのだからどちらも最高スピードまでまだせるとは思えないが。

杏の予想通り、その追いかけっこは双方ともに付かず離れずという様相を呈したままだつた。途中、桃が何発か撃つてはみたが、当然のごとく当たらない。しかし、冷静に考えてみるとこの状態、意外と悪くないのかもしれない。M3リリーの副砲を旋回するにはそれなりの時間が必要になるし、こうも全速力で後方にある戦車を撃破するにはテクニックが必要になる、ということはいつかは車体自体を回転させて、なおかつ停車して主砲で攻撃なければならぬ。そのためにはよくカーレースで見るようなドリフトをしなければならないが、先ほども言つた通りこの辺りは整地されていないし木が生い茂つているため、もしもそのような真似をすれば最悪横転、自滅といった結果になつてしまふだろう。他にも急停止する事で38(t)がM3を抜かし、逆に背後を取るというような作戦も考えられる。これならば、不整地の場所でドリフトなど危険な真似をしなくとも済む。だが、それをするにはあまりにも車間距離が広すぎる。これでは自分たちの車が追い抜くということはまずないだろう。

「全く…どこまで逃げるつもりだ!!」

「そういうえば、この先に整地された道があるよ！」

「なに！まさか、その道に出ようとしてるのか！・せん!!柚子、先回りだ！」

「了解！」

（なるほどね）

この時、彼女の頭の中に2つのシナリオが浮かんだ。だが、それを発する事なく柚子の運転により38(t)はM3から離れ、道に先回りできるコース取りをする。この辺りの地形は、戦車道を復活させると決まった際によく見回つたため地の利は生徒会チームにあった。舌を噛みそうになるほどに少々乱暴な運転になつたものの、なんとか3人は1年生チームより先に道へと到着する。

「さあ来い！次は一撃で仕留めてやる!!」

狩人は我々生徒会チーム。獲物はお前たち一年生チームだ。そんな意気込みで待ち続ける桃。待つ、待つ、待つ、しかし、待てど暮らせどM3が来る気配はない。いくら先回したとはいえそれほど距離を開けてはいなかつたはずだが。

「何故だ！何故あいつらはこない!!」

「あー、かあしま」

「なんです！」

ここまで不動の態度をとつていた杏は、しかし入り口からひょっこりと顔を出して後ろをみていた。自分の想像が正しければ彼女たちは横か後ろか。ならば、入り口から180度みていれば戦車の姿が見えるはず。そう考えたのだ。果たして、彼女の予想通りであつた。

「後ろから狙われてるよん」

「え？」

安全のため、苦笑いを浮かべた杏が入り口の扉を閉めて車内に戻つたその瞬間であつた。

「撃つて」

38(t)の近くで大きな音が二つ、そして遠くからひとつの花火のような音。そして二つの衝撃がひとつの小さな戦車を襲つた。M3リーから放たれた弾丸は、ひとつが38(t)の装甲を掠めて削り、

反動で動いた38(t)を今度はもうひとつ弾丸がクリーンヒットしたのだ。それによつて小さな爆発が起り、38(t)は走行不能の白旗をあげる。

「す、すごい……」

「本当に、生徒会の人たちを倒せた……」

「気持ちいい……」

「やったね、愛里寿！」

「梓の考えてくれた作戦のおかげ」

梓はある時愛里寿に二つ、いや正確に言えば三つの作戦を提案していた。ひとつが、生徒会チームが考えていたように整備された道にする作戦。しかし、それは杏が考えていたようにドリフトすると言ったテクニックのいる作戦ではなく、本当にただ道路に出て戦いややすい場所で戦うというもの。また、これまた杏の予想通りいきなり急停止して38の後ろに回り砲撃を加えるというもの。ただ、この二つの作戦が成功するとは微塵も梓は思つてなかつた。

本命は最後の一つ。確かに道に出た方が戦いやすい事だろう。しかし、そんな単純なことはすぐ見破られ、作戦を破るために動いてくることは必然。それならば、それを逆手にとつた作戦。

恐らく、相手は自分達の作戦を破るために先回りして道に出ようとする、もしくは道に出た直後の無防備な自分達を攻撃してくることだろう。だとすれば、おのずとその待ち伏せするための場所は限られてくる。38(t)の有効射程範囲、それに木々に邪魔されない場所ということも重要。なおかつ、自分達が道に出ることがよく見える場所を相手は選ぶことだろう。そう辺りをつけてM3リーもまた後ろから38(t)を追つた。この後ろからというのも重要なとなる。

真後ろというのは、戦車の死角、注意してみるとしない場合以外はそこに敵がいたとしてもまず気付かれにくい。さらに相手は先回りをするためにもうスピードで目的地に向かっているため周囲に気を配りづらくなることだろう。それに、さきほど愛里寿がやつていたように入り口から顔や体を出して後ろを見るという行為も、バランスがとれないとやりづらい、そう梓は考えてこの

本命の作戦プランをたてたのだ。

「ううん、今回は偶々……運が良かつたから」

今回彼女にとつて幸運だつたのは、本当に相手が自分の作戦に乗つてくれたこと、そして勢い余つてなのが生徒会チームが道に出てしまつたということ。これによつて、森の中からみれば生徒会チームが丸見えとなつてしまつていたため、よく狙いを定めて打つことができた。ちなみにもしも敵が自分の作戦に乗つてこなかつたときは、もうその時はその時で真正面からぶつかるつもりでいた。そもそも、杏が考えていた通りノーレコンである射手から逃げる必要なんてなく、その場で戦いを挑んだ方がすぐにけりがつく勝負だつた。しかし、それをしなかつたのは、もともとこの作戦は運転テクニックがまだ備わつていない桂利奈があの場で後ろを向くといふことに苦労していたことから、どうしたら敵を真正面にすることができるのかを考えた結果の代物。今回の戦いは、いくつかの運が重なつた結果一番最良な終わりとなつてしまつただけなのだ。

「それでもいいんです。複数のプランを用意できる時点で、優秀です」

「ありがとう、愛里寿」

愛里寿の言葉は社交辞令でもなんでもなく真実。あるひとつの戦いにおいてひとつずつ作戦をたてるなどということは、素人でもできること。大切なのは、もしその作戦が失敗したらどうするのか、敵がどう動いたらこちらはどう動くのか、戦場の状況を見るなかで自分のたてたプランのどれを早く採用し、そして動くことができるのか、それを考えられる人間こそが強い指揮官となることができる。確かに彼女の作ったプランはシンプルで単純なものだつた。しかし、それがひとつだけではなく二つ三つ、さらにもしも敵が想定していない動きをした場合についても考慮していくことを考えると、作戦の精度等は横道にそらしてもいいくらいに賢明な作戦だつた。今はまだこれだけではあるが、しかし彼女のこれから成長を期待できるないようだつたことは確かだ。

「愛里寿、このあとどうするの？」

「次のチームのところに向かいます。ただ、そのなかで一番の驚異と

なるのは……

「西住流……みほさんのお姉さん……」

島田流と双璧をなす西住流であり、戦車道の名門黒森峰の元隊長西住まほ。生半可な相手ではないことは確かだ。

「気を引き締めないといけないね……」

「はい、敵は生徒会の人たちのように単純ではありません。今用いることができるすべての力を使ってください」

「了解!」

用心のために目の前にある道は使わずに、彼女たちは森のなかを再び突き進んでいく。もうそこには、油断し、満身状態にあつた彼女たちの姿も、なすすべなく過去に倒されていつた棺桶の姿もない。そこにいたのは動く要塞、そして7人の狩人だけであつた。

3—4 呴喊

まほたちの方を見すぎていていた結果、彼女たちはすでに四号の首を狩ることのできる位置にいた。瞬時の判断によつて最悪の事態は避けられたが、敵は森のなかに潜んでしまつた。果たして姉はどう戦うのだろうか。みほは双眼鏡で彼女たちの姿を目視しながら固唾を飲んでその戦況を見守るしかない。

「まさか、Eチームの車輛が撃破されていたなんて気がつかなかつたわ」

「森の深いところ、見えないところで戦つっていたみたいですからね」

蝶野は38(t)のなかにいるEチームと通信しながらみほに言う。どうやら、撃破された衝撃で通信装置にトラブルが発生してしまつたため撃破の報告ができるいなかつたらしい。戦車が中古品であるのならば通信装置もまた中古品。大会までには何とかする予定ではあるが、古いままで使つてしまつていたことがこのトラブルを産んでしまつた。だが、それ自体はこの戦況を左右するものではなかつたため彼女たちの戦いに水を指さずに済んだ訳だが、この先是恐らく森の奥深くに入り込んでの戦いになる。となるとこの場所からはよく見えないだろうから、彼女たちの報告がみほや蝶野にその結果を伝える唯一の手段となる。姉や友達の戦いを見ることができないと言うもどかしさを抱えたまま、みほは森のなかに入つた四号を見守るしかなかつた。

そして、号砲が鳴り響く。

「どうしますかまほ殿！」

「……」

麻子に森の中から狙い撃ちされないように細かく動くように指示を出したまほは、頸に手を添えて支えて考える。この状況は非常に不味いのだ。

確かに表向きはこちらと向こうとでは戦車長以外は素人、この場所で戦うのは今日が初めてと双方ともにアドバンテージなど微塵もない関係に見える。しかし、だからこそ最初の位置取りというものが大

事となる。今回の場合、四号はM3リーにとつて有利な場所をとられてしまつた。所謂、地の利を取られたというものだ。

「森の中は木々が生い茂つてゐるから外からは狙いにくく、当たりづらい。それに日光が遮られてゐることもあつて暗くて見えづらい。一方森の中からはそれがまるつきり逆となつてこちらが狙い放題になる。最初の攻撃で撃破されなかつたのが奇跡のようなものだ……」

森の中というアドバンテージを持つていかれた今、彼女達にできることはあまりない。まほが悩むのはその数少ない危険な作戦に彼女達を巻き込んでいいものか。先程の吊り橋のような奇跡的なことはもう起こらないだろう。危険か、安全か、どちらを取つても運に左右される非常に無責任な作戦だ。

「じゃあどうすんの！」

「突つ込むか？」

「まあ、それは大胆ですね」

「麻子アバウト過ぎ！ そんなのすぐやられちゃうじやん！」

「いや、それもいいかもしない」

「え？」

自滅覚悟とも思えないようなその麻子の提言を、唇に笑みを浮かべて採用したまほにたいして、優花里と沙織は驚嘆の声をあげた。

事実、この作戦を採用すると言うことは敵の中に突つ込んでいくということをすれば、最悪真正面から飛び込んで二発の砲弾が当たつて終了ということにもなりかねない。明らかな大博打となつてしまう。それに、森の中は障害物がたくさんあるから、弾に当たらなかつたとしても木や石その他もろもろに当たつて撃破という間抜けな自体になり得ない。しかし、それ以外の有効な方法があるかと聞かれればはつきりと言えばなかつた。

「愛里寿ほどの人間が、こちらの何らかの作戦にのつてこの開けた場所に来ることが考えにくい以上、森のなかに入つて戦うしかないのは明白。なら……」

「まほ殿……」

まほは、一度目を瞑り、数秒後決心したように目を開けてい
う。

「華、頼みたいことがある。麻子！」

「はい」

「おう」

まほは、麻子に操縦手の役割を渡して事実上手の空いてしまつてい
る華、そして麻子をエンジンの音に負けないくらいの大声で呼んだ。
「……」

二人には、それぞれの位置についてもらい一度深呼吸を入れて心を
整える。まほは、恐らくこの先こうしてゆっくりと休める状況など作
られないだろうと考えていた。ここからはノンストップ、やるかやら
れるかの世界に入っていくため息つく暇がない。何時以来だろうか、
こんな気持ちになるなんて、どのくらい前からだろうか、最後に運で
勝利することができたのは。一度神様に投げ捨てた幸運ではあるが、
再びそれを返してもらえるように祈りながら、まほは叫ぶ。

「パンツァー・フォ!!!」

その時の履体の回転速度は、その試合で一番速いもの。しかし、そ
れを知ることができるのは、他でもない神の視点を持つものだけだ。
その試合最高にボルテージが上がったタイマン勝負が今始まつた。
押しつぶされそうな重力に歯を食いしばって耐えながら、5人のの
る四号は、飛行機が不時着するかのようにその地に足を踏み入れた。
勢いよく飛び出したために数センチだけではあるが本当に中に浮い
たのだ。着地の衝撃もまた大きかつたが、発進するときの比ではな
い。そして、死地に降り立つて早々に、最初の攻撃が彼女達を襲う。
「見つけましたッ」

「ツ！ 右ツ！」

麻子が右にドリフト走行したその刹那、進行方向にあつた地面に一
発の砲弾が落ち、土煙を上げた。あとコンマ一秒動くのが遅かつたら
交わしきれなかつただろう。その攻撃を切り抜けたまほは、すぐさま
隣にいる優花里に指示を飛ばす。

「撃てッ！」

「はい！」

その命令を忠実に守った彼女によつてその指示が飛んでからタイムロスも一切無しに一発の砲弾が飛んだ。そして・・・・・。

「ツ！痛いッなッ！」

弾は潜んでいたM3に当たることなくその奥にある木に当たつて弾け、お返しとばかりにまたも弾丸が飛んできた。しかし、麻子が悪態をつきながら左に避けたため、双方合計して3発の弾丸はひとつたりとも相手にかすることなく無駄弾となる。いや、無駄というのは間違いだ。この結果、互いの位置がわかつてしまつたのだから。先ほどのまほの攻撃は、もう見逃すことも見送ることもしない。逃がすこともない。どちらが先に倒れるかの勝負の鐘が鳴り響いたということを愛里寿にも知らせるための、宣戦布告だったのだ。

ちなみに、麻子の言葉からわかるようにまほは麻子の肩を勢いよく蹴っている。これは、この試合が始まる少し前に沙織に教えていた走行路を操縦手に教える方法である。先ほどにもましてうるさくなつた現在、間近にいる砲手の優花里にたいしては辛うじて指示が聞こえるものの、麻子にたいしては全く声が届かない。そのためこの方法を選択したのだが、これには問題もある。

勝負は油断した方、そして少しのミスが命取りとなつて負けてしまう。判断の遅れも、その判断の伝達にもロスがあつてしまえばそれだけで負けてしまう。現に撃たれた二発は少しでもまほの指示が遅かつたらまともに当たつていたもの。入り口から上半身を出してすぐにしたにもぐつて麻子の肩を蹴る。この下に潜るという動作がどう考えても無駄だったのだ。そのため、麻子に操縦手の席を譲り、事実上仕事のなくなつた華に入り口から上半身を出してもらい敵の位置を教えてもらうという方法をとつた。これによつて無駄などうさがひとつ消え、麻子が即座に動くきっかけとなつたのだ。

「（）からは作戦もなにもない！あとは・・・・・」
「倒すか、倒されるかです」

「「「「「了解！」」」」「おう」「……」

双方、辛うじて聞こえたそれぞれの車長の指示に答える。ここから先は作戦、戦略、それらはもうなにも通用しない。どちらの乗組員の地力が強いかの勝負だった。

赤信号が青信号に変わったかのように二つの車輛はほぼ同時に走り出す。先ほどの急発進の比ではないがしかし重力を身体に感じるのは同じ。胃や腸が押し出されそうなほどに潰され、無意識に歯を食いしばってしまい、満足に声すらもあげることができない。戦車の中にいる少女達ですらそうなのだから、入り口から上半身を出している華、そして梓の二人などは手の力を少しでも緩めると文字通り振り落とされてしまうだろう。

そう、一年生チームの愛里寿もまたまほと同じように一人をもう一つの目として使っていたのだ。今回の場合一番信用ができ、なおかつどんな急事にも動すことのない梓のことだ。とはいっても、M3の車内の大きさと四号を比べた場合M3の方が狭いため操縦手に指示を伝えるだけで見るのならば、まほが使っているような方法をしなくてよい。彼女の場合は、入り口から上半身を出した愛里寿の背だとギリギリ届くという位置に入り口があるため、いざという時に踏ん張りが聞かない。後々M3の戦車長に正式に就任することとなつた時には、自動車部に座高の高さを調整してもらう予定だが、今回の場合は梓に目になつてもらつた方が視野を広げるという意味で得策であると考えたのだ。

まるで合わせ鏡かのように同じ戦法を用いていた二組の戦車は、しばらく並走しながら主砲で牽制を仕掛けていた。何故牽制であると断言できるか、それは一人とも自分たちの攻撃が当たるとは思っていないからだ。この試合の経過を見てもらつてわかる通り、動いている戦車を、撃破するというのは相当に難しい。仮に止まつていたとしても自分が動いているのであれば同じこと。ということは、動きながら走行している戦車に弾を当てるのは何倍も難しくなるということだ。では、一体二組はなにを待つてているのか、答えを簡潔にいうのならば、それはイレギュラー。整備もされていないこの道をほぼ全速力とも言えるスピードで走つていれば、熟練のF1レーサーでさえ必

ずミスを起こしてしまう。そうすれば必ず隙ができる。二人ともそのわずかだが、しかし決定的であるその隙を狙っているのだ。

「ツ！」

果たして、その一瞬の隙を作つてしまつたのは同時に走り出してから1分足らず後のこと。どんな障害物を乗り越える履帶ではあるが、しかしその乗り越えるという利点が仇となつた。中くらいの大きさの石の上に乗り上げたのだが、その石が突然砕け、一瞬だけバランスを崩したIV号が右、つまりM3リーが走る方向に進路をとつたのだ。

「愛里寿！」

「行つて」

「あい！」

梓の声を聞いた愛里寿は、桂利奈の左肩を優しく蹴る。それに反応した桂利奈は左に速度を落としながら進路を向けた。この結果、M3リーはIV号の背後をとることに成功しただけでなく、これまで真正面にしか撃てなかつたために使うことができなかつた副砲も使用することができるのだ。

万事休すとはこの事だ。そう心の中で呟いたまほは、えぐるように麻子の右肩を蹴つた。

「だからツ痛いぞツ！」

刹那、IV号は突如右にドリフトする。その遠心力でなにいる四人、そして華は飛ばされそうになつたが奇跡的に耐えることに成功し、IV号はM3リーを真正面にとらえる。その瞬間だつた。華のすぐ横を砲弾が飛んだ。ドリフトしたことによつて着弾点がずれたため、M3の主砲が通りすぎていつたのだ。華は、火薬や、なにかが焦げ付いた臭いを感じ、そして鳥肌と冷や汗が突如として吹き出した。腰が抜けた華は、座つているまほのひざの上に座り込む。おそらく恐怖で腰が抜けてしまつたのだろう。今のは一つの意味で危険だつた。砲弾が華に当たりそだつたというのもあるし、もしあのドリフトでさらにバランスが崩れていれば横転し、転がつていただろう。そうすれば、どちらにしろ華の命が危なかつたかもしれない。

ひざの上に湿つた温もりを感じながら、これ以上華に危険なことは

させられないと感じたまほは、そのままの体勢で優花里に指示を出す。

「秋山！M3の近くの木に当てる！どこでも構わない！」

「了解!!」

下手な鉄砲も数打ちや当たるとはよくいったもの。照準は定まらないものの、これだけ木がうつそーと生えているのだから、どれかひとつには当たるだろう。そう考えたまほの指示を忠実に守った優花里の放つた砲弾は、見事にM3近くの木に当たった。そして、優花里はすぐさま砲弾を装填する準備に入った。

「キヤアツ！」

「梓、大丈夫!?」

「う、うんなんとか……」

「梓、下に降りて！主砲、早く撃つてッ！」

「ッ!!こんのお!!」

あやは、愛里寿の言葉を聞いた瞬間、いや少しだけ遅れたか、主砲から75mmの砲弾が発射される。だが、すでに体勢を建て直したIV号にそれが当たることはなかつた。まほが、優花里に木を擊つよう指示したのは、ほとんどやけくそぎみな発想だつた。そうすることでき、M3リーが怯んで主砲の発射タイミングを一瞬でもいいからずらすことができたならば、麻子のテクニックなら十分避けることができ。しかし、怯まなかつたらそれまでという行き当たりばつたりに近い作戦。しかしそれが今回こうをそうすこととなる。

「突つ込め冷泉！」

「いいのか？」

「構わない!!」

「こつちに向かつてくる！」

「うそお!!」

それは、超巨大な砲弾と行つてもいいもの。重さ25トンの車体が、全速力で迫つてくるのだ。それは、もはや恐怖としか言い様のない瞬間。

愛里寿は、愕然とした。まさか、そんな方法を使つてくるとは思つ

ても見なかつた。戦車同士の戦いは砲弾と砲弾の撃ち合いで、その終わりかたも砲弾が当たることによる撃破、ただそれだけだと思つてい。しかし、まさか車体自体を砲弾とするなんて思いもよらないこと。そうほうともに全速力での衝突。その衝撃は今まで自分でやら経験したことのないものになるだろう。重さではM3が勝つているものの、先ほど怯んだ関係でM3の速度が若干落ち、さらに大きさも向こうの方が上、吹き飛ばされることになるのはM3の方だろう。だが、その衝撃で四号の方もただではすまないはず。それに耐えきればまだ……。

「あつ」

気がついたときには、すでに手遅れだつた。

今までに聞いたことのないような鈍い音が彼女たちの耳に届いた。

「きやああ!!」

「クウツッ!!」

「……」

その衝撃に、戦車に乗ることになれているはずの愛里寿でさえも苦しい声を上げる。が、なぜか紗希だけはやはり無言のままであつた。愛里寿の予想通り、勢いよくぶつかつた四号後からによつて、M3リーはその衝撃をそつくりそのまま受け取つたかのように転がつていく。それは、まるで子供が蹴つたサッカーボールのように。ぶつかつてきた四号もまた同じように転がつてゐるが、M3と比べたらまだ規模は小さい。2、3回回転して止まつた四号と違い、M3リーは何度も回転、内一度の空中での一回転を加えて木にぶつかつてようやく止まつた。

「みんな、無事?」

「なんとか生きてる~」

「あれだけあつて怪我一つないって奇跡じやん」

「これが戦車道のすごいところ」

そう、あやの眼鏡以外にはかすり傷一つおつていない7人。普通の交通事故であれば死者が出てもおかしくはないはずなのだが、これが戦車道に使われる戦車のすごいところ。といつてしまえばこれほど

楽な説明というのもないだろう。

「あつ、愛里寿！」

「……」

声をあげたのは梓だった。どうやら入り口の方が上になつて止まっているらしく、そこから梓は体を出して外の様子を見ているらしい。梓に呼ばれた愛里寿は確認の意味も含めて梓に続いて入り口から顔を出した。そして、彼女が見たのはこちらに砲身を向けている四号の姿だ。もう発射する準備を整えているらしい。

「早くこつちも撃たないと！砲塔を回転させて！」

「無駄です、梓」

「え？」

早くこちらも撃つ準備をしなければならない。そう考えた梓の指示であつたが、しかし愛里寿は冷静にそんなことをしても無駄であるということを伝える。なぜならば・・・・。

「砲身が曲がつてます」

「あつ……」

おそらく、あのぶつかつたときの衝撃で曲がつてしまつたのだろう。二つある砲の砲身がどちらも曲がつてしまつていて、これでは、奇跡的に撃てたとしても、先ほどの生徒会チームの桃の撃つ弾のように明後日の方向に飛んでしまう。一方の四号はぶつかつた際に砲身が少しだけ横を向いていたためそのあと転倒しても何ら問題がなかつたように見受けられる。

「つていうことは……」

「あれが西住流……ですか」

これらの事象から導き出されるもの。それは……。

「次は負けません」

初めてだ。ここまできれいで、そして潔い負けというのは。

3—5 伝統

この試合の勝利条件が最後まで撃破認定されないことと見るのならば、勝利者はAチームだつた。撃破数から見ても生徒会チーム以外の3輛を撃破したAチームが最も好成績だつた。しかし、今回の試合は勝ち負けを決めるものではなく、戦車道というものになれてもらうということが目的だつた。その点から見れば、この試合はすべてのチームが勝利者であると行つてもいいであろう。

試合が終わり、行動不能になつた戦車を自動車部に任せて、ある特定の何人かを除いた面々が再び車庫前のグラウンドに集合する。「みんなグッチヨブベリーナイス！はじめてでこれだけガンガン動かせるなんて上出来よ！特にAチームとDチーム！よくやつたわね」そう名指しで呼ばれた二チーム、ではあるがその場にいたのは半数にも満たない。愛里寿、梓、沙織そして優花里だけであつた。

「他の子達はどうしたの？」

「あやたちは、運ばれたM3の中で眠つてます。はじめての戦車道で疲れきつたものかと」

「紗希は、諸事情でみほさんたちとお風呂に向かつてます」

「？」

一年生チームが疲れて眠つてしまつているというのはわかる。彼女たちにとつて今日ほど神経をすり減らした日はおそらく今までになかつたことだらうから。紗希がお風呂に向かつたというのも、汗をかいだ等そういう理由だらう。

だが、四号のまほと華がこれていない理由がわからない。みほに至つては戦車にのつてすらいないのだから。いつたい道言うことなんかと蝶野が聞くと、ただ優花里と沙織は苦笑いを受かべるだけ。なんだか、言つてはいけない秘密を抱えている様子だ。それに麻子といふ途中からIV号を操縦していた女の子の姿もないが、その子もまたみほたちと一緒にいるというのだろうか。

そんな蝶野の考えは当たつていた。唯一撃破認定されなかつたIV号を運転して、道路を走つていたのがその麻子。いくら撃破されな

かつたとはいえ、かなり傷だらけである。M3との激闘のなかで何度も地面の上を転がったのだから、無理もない。本来は車庫まで戻つてあとは自動車部に任せればいいのだが、しかし今回は事情が事情であるが故にそうもいかない。その事情というのは、みほにもたれ掛かって泣いている華である。

「泣かないで下さい。初めてであんなことをして怖いのは当たり前なんですから」

「でもッ、でもッ、私……もう、お嫁に行けません」

「華……」

もはや、この世の終わりと言わんばかりにみほの胸で泣いている華。その華のことを、申し訳ない目でまほは見ている。自分が、あんなことを頼まなければこんなことには、あんな作戦を立案したばかりに、自分は華を辱しめてしまつた。こうなつてしまつたのは自分の責任だ。そして、IV号に同乗させてもらつている紗希は、そんな先輩の背中を慰めるようにさすつてはいる。だが、後輩である紗希の目の前でというのもまた華のことを苦しめていた。もう親に顔向けなどできはしない。ただでさえあの性格からすれば、自分が戦車道をするということにたいして嫌悪感を示しかねないというのに、それに加えて自分の娘がそんなはしたないことをしてしまつたと知られれば、自分もまたみほやまほのように勘当されても文句は言えない。

「ここまで華を悲しませている理由、それは……」

一人の女の子とし、乙女として死活問題とも言えるようなものであつた。

試合が終わつた直後、腰が抜けてまほの膝の上に降り立つた華は、落ち着いた頃を見計らつて喜んでいる沙織と優花里のてをとろうとした。だが、そこで気がついたのだ。なんだか、自分の股が異様に濡れているということに。本当に最初は汗であると思つていた。でも、なんだかそれにしては軒が大息がする。それに、その臭いは運動した後の臭いというにはあまりにも臭かつた。まさか、そんなことはない。そう思いながらスカートをたくしあげた先にあつた自分のパン

ツには、黄色い染みが大きく広がっていた。もう、間違うはずがなかつた。その事を知つたAチームは、沙織と優花里だけを降ろし、操縦手である麻子と、まほ、途中で華を慰めるための要員としてのみほを拾い学生が使用する大浴場に向かう。あそこならば洗濯機もあるし、この時間からいれば貸しきり状態であるようなものだからこれ以上華を辱しめることはないだろう。なおその際M3の梓からついでに紗希も一緒に連れてつてもらいたいと言われて、こうして同乗させてもらつてしているのだ。

「それに、まほさんのスカートも汚してしまつて、私とんでもないことを……」

まほの膝の上にいたということはその下にあつたまほのスカートにも華の尿がついたということでもある。その華の言葉の通り、まほの履いている大洗のスカートにも大きな染みがついている。自分だけならまだいいが、他人にまで迷惑をかけてしまつた。特にまほが大洗の制服を来はじめてまだ1週間もたつていない。そんな新品の制服を汚してしまつたという罪悪感を、華は感じている。

「私は気にしていない、むしろ……」

悪いことをしてしまつたな。その言葉を、まほは心のなかにしまつた。もしも自分があんな作戦を思い付かなかつたら、彼女の自尊心を傷つけることはなかつた。自分が目と足の中継点になるなどせずに、発信源になつてさえいれば、少なくとも彼女が恐怖に身体を縛られるということはなかつた。またしても、自分の大きなミスが招いた最悪な自体。自分は、いつたい何度人を傷つければいいのだろう。やはり自分には……。

「華さん、慰めにはなつてないかもしれないけど……私も、よく漏らすの」

「え？」

そういつたのはみほだ。みほは、戦車に搭載した車イスの後ろについているポケットから袋に入つた一本のチューブを取り出して華に見せる。

「これね、カテー・テルって言うんだけど、トイレに行くときはこれを

いれて尿を出すの」

それは、自己道尿と言われているもの。下半身の感覚のない、筋肉に力をいれることのできないみほは、尿意というものを感じることができず、また我慢することもできない。つまり、尿が膀胱に貯まれば出すといった健常者であればなんのことともないようになりますが、阻害されてしまっているのだ。だから、定期的にトイレに向かつては、そのカテーテルを自分でいれて、膀胱内にある尿を出さなければならぬ。しかし、そう何度もトイレにいけないとときは、膀胱ないにためることのできる尿の容量をオーバーしてしまい溢れだす、つまり漏れてしまうことが多々あつた。その恥ずかしさは、何度も経験してもなれることはない。高校生にもなつてお漏らしをするなんてまるで赤ちゃんのようだ。そう思うがしかし、それが今の自分なのだからと半ば静観の姿勢をとつていたみほだが、でもそれが人生が終わってしまうのではないかというほどに恥ずかしいことであるのだと、華は改めて思い出させてくれた。

みほのことが、とても輝いて見えた。自分がよく漏らすという言葉を、自慢するように言うような人間恥女ぐらいしかいないだろう。それを言つて喜ぶ人間なんて変態ぐらいだし、そう考えると彼女はとても堂々と自分の恥ずかしい記録のことについて話してくれた。それは、自分を励ますため。漏らすということは、生理機能が正常であるからこそ恥ずかしいし、自分のように漏らすということをどうしようもないことだと諦めていなかからこそ辛いことであるのだと教えてくれているのだ。

「みほさん……え？」

「……」

その時、華は肩を叩かれた。振り向くと、そこにはさきほどまで自分の背中を指すつて慰めてくれていた後輩の紗希の姿。

思い返してみると、今まで、自分はとても恥ずかしい姿を後輩にさらしていた。恐怖により失禁し、先輩にも迷惑をかけ、挙げ句の果てには後輩に慰められて、紗希に先輩としては一番見せてはいけないような姿ばかりをさらしている。こうして、面と向かい合うこともはじ

めてである紗希に、先輩はいつもおねしょをする人なのだと変なイメージをつけられたのかもしれない。

羞恥と恥辱のダブルパンチに、またも華の涙腺が決壊しそうになる。自分はこんなにも涙もらい、弱い人間だつただろうか。もしかしたら、知らないうちに自分は心が壊れてしまつたのかもしれない。あの恐怖のなか放出された屈辱にまみれた自分の中の女としての部分が、悪い方に変えられてしまつたのかもしれない。いつの日か、自分はこうして失禁するということを当たり前であると、あるいは気持ちいいとすらも感じてしまうのだろうか。それとも、誰かに見てもらいたいとすら願つてしまふほどの地獄に変わってしまうのではないかな。エタバレをするとそんなことは絶対にない。なぜなら彼女は五十鈴華だからだ。いくら彼女を恥辱が襲つたとしても、五十鈴華としての自分を忘れなければ、そのような人間に書き換えられるということはない。

人間はちよつとの恥辱で変わるような人間ではない。男ならまだしも、女性はそんなに弱い生き物じやない。人類早世の時代より、女性は男よりも弱い生き物として扱われるときがあつた。しかし、強い男と言わたるものたちの裏には、いつも女性の姿があつた。女性が、男を支えてきた。女性がいなかつたら、男はいきることも、生まれることすらもできなかつた。女性というのは、この世界を支えている大黒柱なのだ。心が強く、そしてたくましい者なのだ。そんな女性が辱しめを受けただけで変わつてしまふのであれば、それはきっとただのフィクション。偽の物語。本当の女性を知らないものたちが紡いだただの妄想、願望、そして暴論。であれば暴論には暴論で対抗する敷かないのが人間の常。

華のした粗相は別になんでもない。それは、人間として全うな反応。怖かつた、恐ろしかつた、寒気が走つた。死にそうな状況に陥つたからこそ、それが一瞬で過ぎ去つたからこそ、彼女は全身の筋肉が弛緩し、膀胱の筋肉も搖るんだ結果の必然。死にそうな状況にあって、腰が抜けなくなるほどに鍛えるのにどれくらいの歳月が必要か。どれくらいの忍耐力が必要か。はたまた、どれくらいの度胸が必要

か。それ以外であつたのならばそれこそ、無事であるのは死にたがり屋ぐらいしかいないのでないだろうか。彼女は死にたがりじやない。どうしようもないほどの生きたがり。やりたいこと、やつてみたことがあるお年頃。夢も希望もまだ失っていない、子供と大人の中間地點を越えたばかり、それが高校生。

「……」

紗希は、華の顔を見ながら、普通の顔とも、笑みとも、悲しみの表情ともとれるような表情を浮かべる。

一年生チームのなかで、紗希だけは異端だつた。どんな危険な状況でも動じず、笑みすらもこぼす紗希の勇敢な姿に、梓もまた勇気付けられた。でも梓が、それがちよつと違つていたのだと気がついたのは試合が終わつてすぐのこと。華に、感情深い顔を見せた紗希は、スカートをたくしあげる。そして……。

（ボッヂじゃなかつたですよ）

声、聞こえずとも、そういうつてくれているかのようだつた。彼女も、またあのとき怖かつたのだ。怖くてたまらなかつたのだ。一年生チームのなかでもつとも勇敢で、そして大物だと思つていた女の子が、一番臆病で、そして優しかつたのだ。

「そうですよね、怖かつたですよね、紗希さん……」

そういうながら、華に抱きつかれた紗希は思う。他の友達と違つて試合前にトイレに行かなかつたということに最初はとても後悔していた。でも、怖かつたのは自分一人じゃないと華が教えてくれて、そして自分からも華に教えることができた。自分が、こんな性格で本当によかつたなど。

これが、大洗女子の名物兼伝統となつた戦車に乗る前には必ずトイレ大行列を作るに至つた裏話である。